『Master-Slave』
「beginning」

巽 ヒロヲ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第１章

「ユウキ……リョウさんでいいのかい？」
「ハルカ、と読みます」
　電話の向こうの低い声に、結城遼は面白くもなさそうな声で応じた。その、長い前髪で両目を隠した顔は、いかなる表情も浮かべていない。
「それは失礼した。私は、槙本というものだ」
「私のクラブで、お会いしましたかね」
「ああ、一度だけ」
　電話の声は、少し、間を置いて、続けた。
「仕事を依頼したいのだが」
「……依頼は、乾という男を通じて受けることになってるんですがね」
「知っている。私は、奴の属する組織の幹部だ。一応な」
　穏やかではあるが、ドスのきいた声で、槙本が言う。
「でも、その組織ってのが、うるさいんですよ」
　遼の声の調子は変わらない。
「乾を通せない事情があるんですか？」
「……あるとしたら、君に話せるわけないだろう」
「もっともな話です」
　慇懃無礼の見本のような声で、遼が応える。
「報酬は、通常の倍用意する。それでよかろう？」
「いいですよ。私も、自分では組織専属のつもりはないですから」
「話が分かるな。では、明日の夜、店が終わったら、自宅の方にうかがう」
「お待ちしてますよ」
　そう言う遼に答えもせず、電話が切れる。
　遼は、苦笑しながら、コードレスの受話器を充電スタンドに戻した。

　日本海に面した、中規模の大きさの、ある地方都市。
　海の向こうからやってくる非合法な品々をめぐって、裏社会の連中がうごめく。そんな、ある意味では珍しくもない街である。麻薬、拳銃、密入国者……それらは、錆の浮いた貨物船から、この街の港に上陸し、大小いくつかの組織の資金源となる。
　表向き、町は明るく健全に運営され、管理されている。だが、一皮向けば、この国の首都に匹敵するほどの悪徳と退廃が、街の夜の側を支配しているのだ。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

結城遼は、そんな裏の組織の末端に、不吉なコウモリのようにぶらさがっている。
年齢は 23 歳。
前髪を長く伸ばし、両目を隠しているため、容貌や表情は判然としないが、顎のラインは、年相応に若い。だが、その声の調子や皮肉げな口元は、もっと上の年齢を想像させた。
表向きの職業は、小さな酒場の店主。
実際は、女奴隷の調教師だった。

その夜、遼はカウンターで、バーテンの真似事をしていた。
雑居ビルの地下室にある、さして大きくないバーである。店の入り口は閉じられ、「ＣＬＯＳＥＤ」の札がかかっている。
しかし、客はいた。この店本来の客が。
手に、思い思いのグラスを持ち、粘つく視線で、店の中央を見つめる男達。
その視線の先には、両手を手錠で拘束され、天井から下がる鎖につながれた若い女が、喘いでいた。
くせのない、腰まで届きそうな漆黒のロングヘアが印象的な、はっとするほどの美人である。年は、二十歳前後だろうか。上品な顔立ちに似合わないグラマラスな体が、黒い革のコルセットをまとっている。
「んぅう……くッ……ふぁあ……」
そんな、男の脳を痺れさせずにはおかないような鳴き声をあげながら、女は身悶えする。その度に鎖が鳴り、コルセットから無残に飛び出た双乳が、ふるふると震える。
剥き出しになった女の股間からは、毒々しいピンク色のバイブが覗いていた。
鈍い振動音をたてながら、バイブは女の最も敏感な部分を責めつづけている。女は、その刺激にゆるゆると腰を動かしながらも、ともすればずり落ちそうになるバイブを、しっかりと膣肉で咥えこんでいた。
絶え間なく分泌される愛液は、太腿を濡らして、リノリウムの床に小さな水たまりを作っている。
この快感に耐え、どれだけの時間、バイブを咥えこんだままでいられるかが、この女の価値を計る物差しとなる。男達は、興奮に目を血走らせながらも、どこか値踏みするような表情で、女の痴態を見つめていた。
「んんんんんッ！　んぐッ！　ンあああああああああッ！」
衆人環視の中で、残酷な性具に、大事な部分を責め続けられる快感に、女はひときわ大きな声をあげた。
「い、イクっ！　イク、イク、イクぅーッ！」
腰を大きくグラインドさせ、白い喉を反らせながら、女は絶頂の声をあげた。男達の低いどよめきの中、ぴくン、ぴくンとしなやかそうな体を痙攣させる。
「ふぁあァ……あぁ……ん……」

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

がっくりと頭を落とし、アクメの余韻にひたりながらも、女のそこは、貪欲にバイブを咥えこんだままだった。
それを認めた男達の口から、賞賛の溜息が漏れる。
そして、たった今、デモンストレーションが終わったばかりのこの性奴隷についてのオークションが、始まろうとしていた。

「なかなかの出来だな」
遼の立つカウンターに、一人のごつい男がやってきた。年齢は、20 代半ばくらいだろうか。禿頭に黒眼鏡。どう見てもまともな職種の人間とは思えない。
「ああ、乾か」
そんな男に、遼は恐れ気もなく声をかける。客にではなく、同僚に対する口ぶりだ。
「……俺を通さず依頼を受けたってのは、本当か？」
遼の差し出す琥珀色の洋酒に視線も向けず、乾は単刀直入に言った。
「受けちゃいけないのか？」
遼が、ひどく不敵な態度で応じる。
「いや、いけなくはない……いけなくはないがな……」
言いながら、乾は身を乗り出し、遼の耳に顔を寄せた。
「もし、うちの連中の依頼だったら、やめておけ」
「あんたのとこの、誰だよ？」
乾の囁き声に、遼も抑えた声で訊き返す。
「それが分かれば苦労しない」
「理由は？」
「そいつは、多分、うちを裏切ろうとしている」
淡々とした声で、乾は言った。
「裏切って、西の佐久間に尻尾を振るつもりらしい」
「……」
「佐久間の女の趣味は、有名だからな。お前に話が来ても、おかしくはない……お前、巻き込まれるぞ」
「巻き込まれるも何も、俺は一介の調教師だぜ」
遼の顔に、自嘲に似た笑みが浮かんだ。
「俺に出来ることは、調教しろといわれた女を、注文通りのメス犬に変えるコトだけさ」
「あんなデカい家に住んでて、よく言うよ」
乾は、皮肉げに片頬だけで笑った。
「家は、前からのものだ。俺の稼ぎで買ったもんじゃないよ」
「ま、それはともかく用心に越したことはない。それに……」
ちらり、と乾は背後を振り返った。遼が調教した奴隷に対するオークションが、ますま

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

す白熱している。
「結局、どうしたって男は女に溺れるもんだ。お前の力は、お前が思ってるほど軽視されんよ」
「……あんたにしては、意外なことを言うもんだな」
　そう言いながら、遼は小さく肩をすくめて見せた。

　深夜、遼が自宅に戻ってすぐ、槙本が訪れた。
　遼の家は、人気のない丘の中腹に建つ、古びた洋館である。大きさよりも重厚さで、人を圧倒するような館だ。それなりに洗練された造りをしてはいるが、その館が過ごしてきた長い長い時間が、全体の印象を暗くくすんだものにしている。
　それは、館の部屋も同じであった。薄暗い照明しかない応接間の絨毯やソファーは、高級品ではあるのだろうが、どうしても古臭さが感じられる。
　そのソファーに、物騒な目つきの壮年の男と、一人の少女が、並んで座っている。
　彼女は、この部屋の雰囲気に全く合わない、ひどくひらひらした服をまとっていた。
　少女は小さな体を堅く強張らせ、自分の膝の上の握りこぶしをじっと見つめている。
　そんな二人に向き合う形で、遼が、やはりソファーに座っていた。
「期間は一ヶ月」
　槙本が、電話での声同様、低くさびた声で言った。
「その間で、誰に対しても、きちんと夜の相手が出来る女に仕立て上げてほしい」
　遼は、小さく肯き、槙本の隣で縮こまってる少女に目を向けた。
　かなり幼く見える。身長は、150 センチそこそこ。長めの髪の毛を左右で結んで垂らしている。俗に「ツインテール」など呼ばれる髪形だ。髪を結ぶゴムひもにつけられた、緑色の、丸いプラスチックのかざりが、ますます幼さを感じさせる。とても、調教に耐えられそうな様子ではない。
「……年は、今年で 18 だ。遠慮はいらない」
（誰が遠慮なんかするか）
　遼の印象を察したかのような槙本の言葉に、遼は密かに毒づいた。
「名前を訊いて、いいですかね？」
　代わりに、遼は見せかけだけの丁寧さで訊いた。
「槙本由奈……」
　言いながら、槙本はその顔に歪んだ笑みのようなものを浮かべた。
「俺の娘だ」
　その言葉に、少女――由奈は、びくっ、と体を震わせた。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

少女の父親は、去った。
応接間の、黒い革張りのソファーの中に、彼女一人が残されている。
「ユナ、だったか？」
「ユウナ、です。真ん中を伸ばします」
立ちあがりながら言う遼の言葉を、由奈がかすかに震える声で訂正した。
「そりゃ悪かった」
遼の声に、わずかに嘲弄の色がある。
「じゃあ由奈、これから、お前が厄介になる部屋に案内しよう」
声の調子を変えずに、遼は言った。初対面の少女を、ごく自然に呼び捨てにしている。
「ついて来い」
その言葉に、一瞬ためらった後、由奈は従った。
それを確かめた後、遼が、ずんずんと館の中を歩く。そして、広いホールの中で優雅な曲線を描く階段の陰にある、無粋な鉄製の扉の前に立った。
「この奥だ」
言いながら、ポケットから取り出した鍵で、扉を開けた。扉の向こうは、漆黒の闇に塗りつぶされている。
遼が電気のスイッチをつけると、地下に続く下りの階段が現れた。
地下へと降りていく遼に、由奈は震える足で、どうにかついていった。

「……ッ」
地下室に導き入れられ、由奈は小さく息を飲んだ。
そこは、異様な部屋だった。
コンクリートが打ちっぱなしの、何の装飾もなされていない部屋である。天井にある蛍光灯が、無機的な光で部屋の中を照らしている。
しかし、部屋のあちこちには、何とも奇妙な調度が並べられていた。
部屋の中央にある鉄パイプで組まれた大型のベッドや、全身がゆうに映せる姿見はともかく、天井から何本も下がるフックつきの鎖や、それを動かすための滑車などは、由奈がこれまで見たこともないような代物だった。
さらに、壁にはハリツケ台のようなＸ字に組まれた板があり、手足を拘束するためらしい革製のかせが取り付けられている。
そして、部屋の隅には、むきだしのままのバスユニットがあるのだが、なぜか、そのバスユニットにはドアがなく、中が丸見えだった。
「お前は、これから一ヶ月、ここで暮らすことになる」
遼は、ひどく残酷な口調で言った。
「うそ……」
「嘘なものか。親父から、どんな風な目に合うか聞いてなかったのか？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　茫然とつぶやく由奈に、遼はくつくつと笑いながら続けた。
「それとも、聞いてたら来なかったか？　……まあ、今のところ、お前ら親子の事情は詮索しないことにしとこう」
　そう言いながら、まだ茫然としている由奈の背後で、この地下室の扉を音を立てて閉める。
「！」
　あわてて振り返る由奈の視線の先で、遼は内側から扉に鍵をかけた。
「さて……」
　遼は、ゆっくりと由奈に向き直った。
「まずは、身体検査といくか」

　きょとん、と、やや垂れ気味の大きな目を見開く由奈に、遼はにやりと笑いかけた。
「そんな、不思議そうな顔をするな。身体検査だよ、身体検査」
「……」
　遼の意図を察したのか、由奈の顔色が、少し、白くなる。
「服を、脱げ」
　そんな由奈の様子に頓着せず、遼は冷然と命じた。
　遼の言葉に、由奈はぎゅっと自分自身の体を抱きしめた。
　遼は、おびえた表情を浮かべる由奈のことを、じっと観察している。
　垂れぎみの大きな目に、ちまっとして形のいい鼻。ピンク色の可愛い唇。そして、思わず指でつつきたくなる、柔らかそうな頬……。
（ガキだな、こりゃ）
　とても、今年18歳というのは信じられない。どう見ても中学生くらいだ。
　しかし、遼はそんなことで気持ちがくじけるような人間ではなかった。
「脱げよ」
　一歩、遼は足を踏み出した。すると、由奈が一歩さがる。
　と、遼は、素早く腕を伸ばして、由奈の胸倉を掴んだ。
「きゃあッ！」
　由奈が悲鳴をあげるのも構わず、思いきり引き寄せる。
（おや……？）
　ちょっとした奇妙な感覚を感じながら、遼は由奈の顔に顔を寄せ、低い声で囁いた。
「せっかくの服を、破られたくはないだろ？」
　その言葉に、由奈が硬い表情でうつむく。
「どうだ？」

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

　言いながら、遼は両手に力を込めた。可憐なデザインのワンピースが、小さく悲鳴をあげる。
「や……やめて……」
　由奈は、消え入りそうな声で訴えた。
「自分で脱ぐから……」
　遼は、手を離した。由奈が苦しげに息を整える。
　そして、ひらひらのフリルのついた、ピンクのチェック柄の服のボタンを外していく。体のラインをあまりうかがわせない、なんとも少女趣味なデザインのワンピースだ。
　ボタンを外し終えたところで、由奈の動きが止まる。
「どうした？　別に寒くはないだろ」
「……」
　促す遼に、由奈は答えない。ただ、羞恥と屈辱に頬を染め、じっとうつむいている。
「お前、何のためにここに来たんだ？」
　遼は、何かを見透かすように、前髪の奥に隠れた目を細めた。
「それとも、父親に売られたお前に、どこか帰る所があるのか？」
　その言葉に、由奈はぎゅっと目を閉じた。
　そして、何かを覚悟したように、ワンピースをするりと脱ぎ捨てる。
「ほぉ……」
　思わず、遼は声をあげていた。体を寄せたときに何となく気付いてはいたが、由奈の胸は、その顔に似合わず、ひどく豊かだったのだ。
　幼児体型、と言っていいほどの姿態の中で、その大きな丸い胸だけが、白い清楚なデザインのブラに包まれながらも、自己主張をしている。
　由奈は、自らの巨乳を恥じるように、両手で押し包むようにして胸を隠している。剥き出しになった白いシンプルなショーツよりも、その胸の方が恥ずかしいらしい。だが、由奈の胸は、彼女の細い腕や小さな手では隠し切れないほどの大きさだった。
「でかいおっぱいしてるな、お前」
　由奈のコンプレックスをえぐるように、遼はわざと下品な言葉で言った。
「い、いやァ……」
　たまらず、由奈はしゃがみこんでしまった。できれば、足元でしわくちゃになってるワンピースの中に潜り込んでしまいたいような感じで、その身を低くする。
「おい、まだ終わりじゃないぞ」
　そんな由奈を見下ろしながら、遼は冷酷な口調で続けた。
「立って、下着も全部脱ぐんだ」
　しかし、由奈は答えない。きつく目を閉じ、ふるふると頭を振るだけだ。
「素直に言うことを聞いといた方がいいぞ」
　そう言いながら、遼はまた由奈に近付いた。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

　由奈は、立とうとしない。
　遼は、かすかな笑みを口元に浮かべながら、腰を曲げて、胸を隠している由奈の両手首を握った。
「あッ！　いたァい！」
　由奈が悲鳴をあげるのもかまわず、無理矢理に両腕を高々と上げさせる。
　そして、片手だけを素早く離し、天井から下がる手錠式の手かせを、片方の手首にはめた。
「あああっ！」
　由奈は、絶望に満ちた悲鳴をあげた。しかし、遼は一向に心を動かされない様子で、もう片方の手にも、銀色に光る手かせをがちゃりとはめる。
「やめて！　外して、外してェ！」
　叫びながら、由奈は身をよじった。頑丈そうな鎖が、そのたびにじゃらじゃらと鳴る。
「暴れるな」
　けして大声ではないが、ひどく低い声で、遼は由奈に言った。そして、懐から出したポケットナイフを、由奈の顔の前にちらつかせる。
「ひっ……！」
　よく光る刃物に対する純粋な恐怖が、羞恥に勝った。由奈は体を堅くし、再び沈黙する。
　遼はかすかに微笑んだまま、ナイフの平を由奈のむきだしの胸元に押し付けた。
「や、やめて……やめて……」
　恐怖に声をわななかせ、目に涙をためながら、由奈が哀願する。
「じゃあ、これから大人しく言うことを聞くか？」
　遼の問いに、由奈はきゅっと唇を噛んだ。そして、うつむいたまま、何も言おうとしない。
「顔の割には意外と強情だな」
　何となく楽しそうにそう言いながら、ブラの肩紐を片方ずつ切断していく。
　そして遼は、由奈の胸の谷間に、ナイフをそっと潜り込ませた。
「んッ！」
　由奈の体が、さらに硬直した。
「動くな。動くと怪我をするぞ……」
　言いながら、遼はナイフを手前に引っ張っていく。
「あああああァ……」
　カップとカップの間の、くびれた布の部分をナイフが切断したとき、由奈は悲鳴をあげていた。
　白い布切れと化したブラジャーが床に落ち、外界に開放された二つの乳房が、ふるん、と揺れる。由奈自身の無理な姿勢にもかかわらず、彼女の双乳は丸い形を崩さず、可憐な桜色の乳頭は上を向いていた。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ブラの大きさが小さかったんじゃないか？　今までずいぶんキツかったみたいだぞ」
　言いながら、遼は由奈の胸にそっと触れる。
「やああァ！　さ、さわらないでェ！」
　高い、子供のような声で、由奈が叫んだ。
　遼はそんな悲鳴に全く動じる様子もなく、まるで重さを確かめるように、由奈の乳房の下に左手を当て、たぷたぷとゆすった。
　柔らかさと、ほどよい弾力とを誇るかのように、由奈の乳房全体が大きく震える。
「いやァあああああ……」
　由奈の声が、涙で濡れていく。
　まるで、その声に聞きほれているように、口元に笑みを浮かべながら、遼はポケットナイフの刃を、由奈の腰の高さまで下ろした。
　そして、ショーツのサイドにあたる部分を、左右とも切ってしまう。
「いやッ、いやァ、いやアぁぁぁぁッ！」
　由奈は、脚をぎゅっと閉じた。歪んだ砂時計の形になった白いショーツが、その脚の間にぶら下がる。
　遼は、ナイフをしまい、剥き出しになった由奈の恥丘に、そっと右手を置いた。左手は、相変わらず由奈の胸を弄んでいる。
　由奈のそこは、完全に無毛ということはなかったが、ほとんどそれに近かった。細く柔らかい陰毛が、かすかなかげりとなって、ぷっくりとした丘の中心辺りに生えているに過ぎない。まるで幼女のそれのように閉じ合わさったクレヴァスの周辺は、なんとも犯罪的な風情をかもしだしている。
「胸はこんなにでかいくせに、ガキみたいなオマ×コだな」
　身動きができない由奈の耳元にそう囁きかけながら、遼はその両手の指をそろそろと動かした。
「んんンッ」
　由奈が、思わず悲鳴以外の声を漏らす。
　遼の指が、触れるか触れないかの微妙な強さで、由奈の敏感な部分をくすぐりだしたのだ。野卑な言葉に似合わず、遼の指は繊細な動きで、ひどく優しいタッチである。
「どうだ、由奈……」
　こころなしか、声の調子まで柔らかくして、熱い吐息を由奈の耳たぶに吹きかける。
「脚の力が抜けてるぞ……」
　そんなことを言いながら、遼は、無残な切れ端となったショーツを、まるで手品師のような手つきでするすると引っ張った。
「あァ……」
　ぱさ、と小さな音を立ててその白い小さな布切れが床に落ちたとき、由奈はがっくりとうなだれた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

今、由奈が身につけているのは、可愛げなデザインのソックスと靴だけである。考えようによっては、全裸よりも無残な状況だ。
「ふふっ」
小さく声に出して笑い、遼は右手の動きを再開した。手の平全体で恥丘を包み、クレヴァスをなぞるように中指でそっとこすりあげる。
一方、左手の指は由奈の白い胸の肌を丸く撫で、時々、桜色の乳首を指の腹で刺激した。
乳房が全体が大きいため、実際よりも小さく見える乳首が、半ば生理現象のように尖っていく。
そして、由奈のアソコは、透明な蜜をしっとりと分泌し始めていた。
「気持ちいいか？　由奈……」
遼が、穏やかな声で訊く。
「イヤ……イヤぁ……ヤダよぉ……」
弱々しくそんな声をあげている由奈の首筋に、遼は顔を寄せ、くちづけした。
「いやッ！　イヤあ！」
由奈が激しくかぶりをふる。
突然、遼は由奈の胸とアソコに、爪を立てた。
「い、イタあアアアアアアアアアアアーッ！」
激痛に、由奈の体が跳ねる。
しかし、遼は容赦しない。左手で乳首をつまんでひねりあげ、敏感な粘膜を指で強く挟む。
「イタい、イタい、イタあああああァい！」
眉根を寄せ、鎖をじゃらじゃら鳴らしながら、由奈が暴れる。
「痛いのか？　由奈」
澄ました声で当たり前のことを訊く遼に、由奈は激しく肯いた。
「やっと素直になったな」
遼は満足そうに言って、ようやく由奈を解放した。
胸と股間に残る激痛の余韻に、由奈は肩で息をしている。
「奴隷はな、痛いときは痛い、気持ちいいときは気持ちいいって、素直に言うもんだ。分かったか？」
言いながら、遼は、頭一つ分以上低い位置にある由奈の顔に、自らの顔を寄せた。
涙を溜めた目で、由奈が遼の顔をにらみ返す。
「……あたし、ドレイなんかじゃない！」
そして、かすかに声を震わせながらも、そう言ってのける。
「そうか？　……でも安心しろ。俺がしっかり調教して、一人前の奴隷にしてやるよ」
「イヤぁ！」
由奈が、かみつくような勢いで叫ぶ。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

しかし、遼の口元の笑みは消えない。
そして遼は、由奈から視線を外さず、ゆっくりとその背後に回りこんでいった。
由奈は、目に敵意と怯えを浮かべながら、その動きを追おうとするが、両腕を別々の鎖で拘束された身では、それもままならない。
遼は、背後からすくいあげるようにして、由奈の胸を両手に収めた。
「くっ……！」
屈辱と羞恥に染まった短い悲鳴を楽しみながら、やわやわと由奈の乳房を揉みほぐしていく。
「く……んんン……ふうッ……」
由奈は、何かに耐えるように、白い歯で下唇を噛みながら、自らの胸にくわえられている蹂躙に耐えている。しかし、その呼吸は次第に荒くなり、鼻から漏れる声は本人の意思と関係なく濡れていった。
遼は、由奈の髪の香りを嗅ぎながら、由奈の双乳を揉みしだき、ピンク色の乳首を軽くつまんだ。
「んんんんんン……ッ」
一時おとなしくなっていた乳首が、遼の指による刺激で、また堅く勃起してしまう。
そんな自分にとまどっているような表情を見せながらも、由奈は必死で声を漏らすまいとしていた。
遼が、右手を胸から離し、脇やへその周辺をそっとまさぐる。
そして、じれったくなるほど太腿の内側や恥丘の辺りをくすぐった後、遼の中指が、ゆっくりと由奈のクレヴァスに侵入していった。
「んくぅ……っ」
ぴくん、と由奈の腰が可愛く跳ねる。
「濡れてるぞ、由奈……」
その部分をまさぐりながら遼が言うと、由奈は耳までかあっと赤く染めて、うつむいた。
そんな由奈に聞かせるように、遼はわざとくちゅくちゅと音をたてながら、由奈の割れ目をこすり上げていく。
好悪の感情とは別の、生理現象としての快感が、由奈の下半身を甘く痺れさせていった。
「はァ、はァ、はァ、はァ……」
いつしか、由奈は唇を噛むのを止め、口を半開きにしながら、荒く短い息をついていた。閉じられた目の端で、長いまつげが震えている。
遼の右手は、巧みなタッチで由奈の未成熟な靡肉をまさぐり、快感のしるしの体液を分泌させていた。そして、左手はその間も休むことなく、左右の乳房を交互に揉んでいる。
「気持ちいいんだろ、由奈？」
耳たぶに熱い息を吹きかけながら、また、遼が訊く。
しかし、由奈はふるふるとかぶりを振った。二つにまとめられた長い髪が、その動きに

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

合わせてゆれる。
　遼は、薄く笑いながら、右手の動きを次第に速めていった。
「あ、あ、あァ、あああああああァッ」
　とうとう、由奈は声をあげてしまった。
「んんッ、んあ、あ、あァあッ！」
　そして、まるで自分の声に突き動かされたような感じで、かくかくと腰を動かしてしまう。
　遼は、けして焦ることなく、しかし確実に由奈の感じる部分を刺激した。手の平全体で恥丘をさするようにしながら、中指が肉の割れ目をなぞり、最も敏感な肉芽を保護するフードを、親指で押し揉むようにする。
　一方、その左手は柔らかな乳房の感触を楽しむように、由奈の胸を揉みしだき、その頂点の乳首を指で挟むようにして転がす。
「イ、イヤ、イヤぁ、イヤぁ〜ン」
　由奈の抗議は、すでに甘たるく鼻にかかった声になっている。聞きようによっては、まるで背後の遼に媚びているかのような声だ。
「ああッ！　な、何？　イヤあ、こんな、こんなのって……ッ！」
　眉を切なげに寄せ、ぎゅっと目を閉じながら、由奈は、未知の感覚の到来に、その小さな体をおののかせた。
「イキそうなのか？　由奈」
　まるでイヤイヤをするかのように首を振りつづけている由奈に、遼が残酷に訊く。
「も、もうダメ。ダメ、ダメダメダメぇ〜ッ！」
　ほとんど意味をなさない、切羽詰った由奈の声は、結局のところ遼の問いに対する答えになっていた。
「んあああああああァあーッ！」
　高い、悲鳴のような声をあげて、由奈の体がきゅうっと硬直する。
　そして、遼の腕の中で、ひくん、ひくんと何度か痙攣する。
「ふぁああァ……」
　そんな声を漏らしながらがっくりとうなだれる由奈を、遼は満足そうな薄笑いを浮かべながら見つめていた。

　由奈は、涙に濡れた空ろな目で、ぼおっと自分の足元を眺めていた。
　くしゃくしゃになったピンクのワンピースの上に、快楽のしずくが数滴、落ちている。
　遼は、そんな由奈の顔を、顎に指をかけ、くい、と持ち上げた。
「もしかして、イったのは初めてか？」
　由奈は、答えない。ただ、怒りや憎悪を表すには力の足りない、恨みっぽい目で遼の顔をにらむだけだ。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「自分でしたことは？」
　遼のあけすけな問いに、かぁっ、と由奈の頬が赤く染まる。
「おおかた、オナニーしててもイクのが怖くて途中で止めちまうんだろ」
　当てずっぽうに近い遼の言葉に、由奈の顔がますます赤くなる。どうやら図星らしい。
　しかし、由奈は何も言おうとしない。
「……素直に話ができるよう、おまじないでもしてやるか」
　由奈に聞こえるようにそう独り言を言いながら、遼は部屋の片隅に歩いていった。由奈の位置からは、死角になる。
「……な、何するの？」
　はっきりと恐怖に震える声で、由奈が訊く。
「俺の質問には答えないくせに、それはムシがいいんじゃないのか？」
　嘲弄するようにそう言いながらも、遼は何か作業を続けているようだった。かちゃかちゃという何かの器具を操るような音に、蛇口から水を出す音などが混ざる。
「……？」
　由奈には、見当もつかない。そもそも今日の今日まで、好きでもない男に体を弄ばれても、体は快感を覚えるのだということさえ知らなかったのだ。
「センパイ……助けて……」
　ぽつり、とそう漏らした由奈の声を、遼は聞き逃さなかった。
「誰のことだ、そりゃ？」
　言いながら、背後から由奈に近付いてくる。
「……」
　由奈は、答えない。
「学校の先輩か……。それが、お前の王子さまなのか？」
「……」
「ま、いいさ」
　そう言って、遼は由奈の尻の谷間に指を滑らせた。
「きゃン！」
　思わぬ感触に、由奈が奇妙な悲鳴をあげる。
「これから、お前が素直な奴隷になれるよう、たっぷり薬を流し込んでやるからな」
　身をよじって逃げようとする由奈のアヌスをまさぐりながら、遼が言った。
「え……？」
　由奈の動きが、止まる。その由奈の菊門に、何か冷たいものが押し当てられた。
「ひゃッ！」
「動くな！」
　思わず体を跳ねさせようとする由奈に、遼は厳しい声で言った。
「ヘタに動くと、ガラスが割れて尻の穴がずたずたになるぞ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

さぁーっ、と由奈の顔から血の気が引く。
「おとなしくしろ。……あと、できれば尻の穴を緩めるんだ」
そんなことを言われても、由奈の体は恐怖で硬直している。
遼は、まるで由奈の緊張をほぐそうとするかのように、その丸く小さなお尻を撫でまわした。ほんの少しだけ、由奈の力が緩む。
つぷっ
「きゃああ！」
由奈の裏門に、冷たい医療器具が挿入された。ガラス製の、シリンダータイプの浣腸器だ。
「たっぷり入れてやるからな」
実際は、入っている薬液はさしたる量ではない。しかし、由奈の恐怖と羞恥を煽るかのようにそう告げながら、遼はゆっくりとピストンを押し込んでいった。
「や、やだァ！　抜いてぇーっ！　イヤ、イヤあああああっ！」
体内に、生温かい薬液が逆流してくる感触に、由奈は悲鳴をあげた。しかし、敏感な直腸粘膜を傷つけられることへの恐怖からか、体はぴくりとも動かさない。遼の、なすがままだ。
「やめて、やめてよおぉ……」
由奈が、子供のような泣き声をあげる。
「人に何か頼むときは、もっと丁寧な言葉で言うんだ」
そんなことを言いながら、遼は慣れた手つきで、シリンダーの中の薬液を最後まで由奈の中に注ぎ終えた。そして、由奈のアヌスを傷つけないように、そっと浣腸器を抜く。
「んくぅ……っ」
理不尽な暴虐に怒る間もなく、由奈は重い苦痛に襲われた。
今まで感じたことのないような猛烈な便意が、じわじわとおなか全体に広がっていく。
「く、苦しいよォ……」
悪寒を伴う苦しみに、由奈は早々と泣き言を言った。白い歯が、かちかちと小さく鳴る。
「おいおい、こんなところで漏らすなよ」
涙をぽろぽろとこぼしている由奈に、遼が冷酷に言った。
「俺は、ちょっと準備をしてくる。帰ってくるまで、ちょっと待ってろ」
「え……そ、そんな……」
「すぐ戻ってやるよ」
情けない顔をする由奈に、にやりと口だけで笑いかけ、遼は地下室から出ていった。
「んぐゥ……う……んんん……ッ」
残された由奈は、手首を戒める手錠につながった鎖を握り締めながら、体内で悶え回る苦痛に耐えていた。
時間が経つにつれて便意は強まり、出口を求めて暴れ狂う。少しでも気を抜けば、それ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

は由奈にとって破滅を意味した。
（は、早く来て……帰ってきてよォ……！）
　いつしか、由奈は声に出さず、そう願っていた。もはや由奈が頼ることができるのは、伸びた前髪のために表情の読めない、あの冷酷な男しかいないのだ。
　由奈のとっては、永遠に続くかと思われた時間の後、ようやく、遼が現れた。
「ほお……よく、我慢できたな」
「お、お願いッ……！」
　由奈は、ひどく切迫した声で訴えた。
「コレ、外して……おトイレ行かせてぇ！」
「人に何かを頼むときは……」
「お願いですッ！」
　みなまで言わせず、由奈は叫んでいた。
「お願いです。お、おトイレに……おトイレに行かせて下さい……！」
　血を吐くような顔で哀願する由奈に、遼は妙に優しい顔で笑いかけ、ポケットから鍵束を取り出した。
　そして、由奈を戒める手錠を外していく。
　ようやく拘束から解かれた由奈だが、逃げるどころか、きちんと歩くことさえままならない。
「ほら、しっかりしろよ」
　そう言いながら、遼は、小刻みに体を震わせる由奈を、部屋の一角にあるバスユニットに、なぜか左手だけで導いてやる。しかし、そのことを不審に思うほどの余裕は、由奈にはなかった。
「……！」
　バスユニットの入り口で、由奈が、声にならない声をあげる。
　その洋式の便器には、便座がなかったのだ。
「またげよ」
　表情だけで何かを訴えようとする由奈に、こともなげに遼は言った。
　由奈は、従うしかない。きつく目を閉じ、脚をみっともないがに股にして、ひんやりと冷たい便器をまたぐ。
「お、お願いします……出てって……見ないで下さい……」
　水洗タンクを抱えるような姿勢で、しくしくと泣きながら、由奈は言った。
「遠慮するな……手伝ってやるよ」
　言いながら、遼は由奈の左側に回り込み、左手でそっと由奈の腹を撫でてやった。
「あああああああああああああああ!!」
　絶望に満ちた悲鳴を、由奈があげる。
　派手な破裂音とともに、遼の目の前で由奈は大量に排泄した。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「やだアアアアアア、イヤだよおおお、イヤあああああああああああああああああああああああああァ!!」
　まるで、自分の声でその恥ずかしい音を聞こえなくしようとするように、由奈は大声で泣いた。
　その声が、バスユニットの中で、哀しげに反響する。
「うあああアア……アアア……あうう……」
　全て出し切り、放心状態のまま、涙だけを流しつづける由奈に代わって、遼が水洗レバーを上げてやる。
「ケツくらいは自分でふけよ」
　そんなことを言う遼に、由奈はぼんやりと目を向けた。
「！」
　たちまち、由奈の顔に絶望が蘇る。
　遼が、右手にハンディタイプのビデオカメラを持っていたのだ。
　ランニングランプが、無情にも赤く灯っている。
「そ……そんな……そんなァ……」
「安心しろ。別に誰に見せるわけでもないさ」
　言いながら、遼はビデオカメラのスイッチをようやく切った。
「お前が、素直でいる間はな」
「……」
　由奈は言葉もない。
「だが、お前が俺に逆らったり、自殺でもしようもんなら……分かるか？」
「やめてえ！」
　ようやくそれだけ言った由奈を、遼は冷たく見つめる。
「や……やめて……ください……」
　遼の意図を察した由奈は、力ない声で言い直した。
「それでいい」
　そんな遼の声が、由奈の耳の中で、重く響く。
　そして、重い扉のきしみと、鍵をかける音を残して、遼は地下室から出ていった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第２章

「しんじゃいたい……」
　薄暗い地下室の中、由奈はぽつりとつぶやいた。
　鉄製の頑丈そうなベッドの中、由奈は、一人、シーツにくるまって横たわっている。
　時計がないので、今が何時のなのか分からない。
　由奈の荷物は、全て、遼が持ち去っていた。ご丁寧に、はいていたソックスや靴も、だ。
　由奈は、何も持たず、全裸で、この部屋にいる。由奈のものといえば、それこそ、髪を両脇でまとめているゴムひもくらいだ。
　ぼんやりと、由奈は天井から下がる何本もの鎖を見上げた。
　あれを使えば、首くらいは吊れるかもしれない。
　そう考え、由奈はぞっと体を震わせた。一瞬、本当にその気になりかけたからだ。
　が、無理だった。例のビデオを撮られているということもあるが、それ以上に、由奈には自らの命を絶つだけの勇気がなかった。
　もし、そんな勇気があったのなら、こんな場所に連れてこられはしなかったろう。どうにかして、途中で逃げ出していたはずだ。
「しんじゃいたい……」
　それでも、まだそんなことを言っている自分の声が、由奈にはひどく空ろに聞こえた。

「朝だぞ」
　そう言いながら、遼が地下室に入ってきた。
　上に、だぶだぶの黒いワイシャツをまとっただけで、あとは何も身につけていない。しかし股間は、服のすそにかくれている。
　すらりとした形のいい脚に思わず目をやってしまい、由奈は慌てて目をそらした。
　遼は、左手にプラスチックのトレイを抱えていた。その上には、パンとスープとサラダという、ひどく簡単な食事が載っていた。
「食え」
　ベッドから身を起こし、一糸まとわぬ裸体にシーツを巻きつける由奈に、遼が言った。
「食べたくない……」
　うつむいてそう言う由奈の髪を、遼は、ぐい、と掴んだ。
「うぅ……」
　悲鳴をあげる気力もなく、由奈は小さくうめいた。
「お前が食いたいかどうかは問題じゃない。食え、と命令してるんだ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　その理不尽な物言いに、由奈の目にみるみる涙がたまる。
「それとも、すっきりしてから詰め込むか？」
　由奈はあわてて首を振り、トレイを受け取った。

　ひどく時間をかけて朝食を終えた由奈を、遼は鎖につないだ。
　由奈は、かすかに抵抗したが、結局は遼のなされるがままになってしまう。
　犬に使うような首輪を由奈の細い首に巻き、細い鎖で、床にある金具に止めたのだ。
　鎖の長さがあまりないため、自然と、由奈は座り込んでしまう。
「メス犬だな、まるで」
　自分でそうしておきながら、遼はそう言い、部屋のロッカーから何かを取り出した。
「ひ……」
　由奈が、思わず声をあげる。遼が手にしたのは、黒く光る革製のムチだった。それも、先が何本かに分かれたタイプのものだ。
「こいつで、お前をしつけてやるよ」
「そ、そんな……なんでぇ？」
「とりあえず、口のきき方を憶えさせないとな」
　そんなことを言いながら、遼は見せ付けるように手にした房状のムチをゆらしながら、由奈に近づいていく。
「や、やめて……やめてェっ！」
　思わず体を丸め、床に這うようにしながら言う由奈に、遼は容赦なくムチを振り下ろした。
「キャアアアーッ！」
　ばしっ、という派手な音に、由奈の高い悲鳴が重なった。その白い背中に、無残な赤い筋が浮かび上がる。
「ひ、ひああ……あァ……」
　ムチで打たれた痛みもさることながら、自分がムチで打たれるということの理不尽さに、由奈は泣き声をあげた。
　しかし、遼は、そんなことに気を使う様子もなく、一定の間隔を置いて、ムチを振り下ろし続ける。
「んあああ！　……ひあァっ！　……んくっ！　……んあああッ！」
　実際は、房鞭は音の割に一本鞭より痛みは軽い。しかし、生まれて初めてムチで打たれる由奈には、そんなことは知りようもない。
　その背中やお尻の肌に、縦横に赤い跡をつけ、遼はムチ打ちを中断した。
「あぁ……ふぁ……んぁ……うぅぅ……」
　由奈は、泣き声混じりの荒い息をついている。
「痛かったか？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

震えて縮こまってる由奈の傍らに膝をつき、遼は当たり前の事を訊いた。由奈が、こくこくと肯く。
「言葉で言うんだ」
「……い……いたかった……ですぅ……」
「そうか……すまなかったな……」
ひどく優しい声で言いながら、遼は由奈の背中にくちづけした。
「んッ！」
熱く、敏感になった肌への突然の刺激に、由奈が声をあげる。
まるで、今までの暴虐を詫びるように、由奈の小さな背中を抱えるようにして、そのすべすべした肌に唇を押し付け、赤い筋を舌で舐めていく。
「んん……ク……んぅう……」
いつのまにか、由奈の背中を抱えていたはずの遼の手が、前に回されていた。
「あッ……？」
そして、由奈の重たげな乳房を、両手でやわやわと揉みほぐす。
「今度はどうだ？　痛いか？」
背中から口を一時離し、遼が訊く。
「い、いたく、ないです……でも……」
切なげに眉を寄せ、濡れたような声で、由奈が答える。短い間に加えられた苦痛と快感に、由奈の頭には白い霞がかかっているようだった。
「なんだか、ヘンな気持ち……です……」
「気持ちいいんだろ？」
「そ、そんな……ンあっ！」
くい、と遼が由奈の乳首をひねりあげた。
「い、イタい……」
「痛いか……じゃあ、こういうのはどうだ？」
そう言って、遼は指先でひっかくようにして由奈の乳首を連続して弾く。
「あ、あァ、んああ……」
困ったような、すがるような目で、由奈が遼の顔を振り返る。
「コレは、気持ちいいだろう？」
「……」
「答えろよ」
「……き……きもちいい、です」
柔らかな頬を赤く染めながら、とうとう由奈は告白した。
「やっと素直に言えたな、由奈」
そう言って、遼は由奈の耳たぶにキスをする。
「もっと感じさせてやるからな……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

耳のすぐそばでそう囁かれ、由奈はびくんと体を震わせる。
遼は、由奈を膝立ちの姿勢にして、その前に回りこんだ。
そして、とまどっているような表情で、潤んだ瞳を向けてくる由奈に軽く笑いかけ、両手でその豊かな乳房を揉みしだく。白く丸い双乳が、遼の手の中でぐにぐにと形を変えるのは、由奈の幼い顔にはアンバランスな、ひどくエロチックな光景だった。
「い、イヤぁン……」
まるで当の由奈に見せ付けるように、その巨乳を揉みしぼる遼の手首を、由奈の小さな手がつかんだ。しかし、由奈の手の力は、ひどく弱々しい。
遼は、その手を逆に握り返し、由奈の背中に回した。
「あ……」
そして、由奈が声をあげるのにも構わず、後ろ手にして手錠をかける。
「あんまり手間をかけさせるなよ」
笑みを含んだ声でそう言いながら、遼は由奈の胸を愛撫するのを再開した。
「んはぁ……っ」
首輪の鎖を床につながれ、両手まで拘束されては、抵抗することもできない。まるで、そのことを言い訳にしているかのように、由奈は、遼から身をよじってよけることさえ、やめていた。
自らの胸を捧げ出しているかのような膝立ちの姿勢で、遼の狼藉を甘受している。
「あァ……んあ……ふぅン……」
いつしか由奈の声は、快感を訴えるような甘い鼻声に変わっていた。
「どうだ？　由奈」
「は、恥ずかしい……恥ずかしいです……」
その言葉を証明するかのように、顔を赤く染めながら、由奈が答える。
「恥ずかしいだけじゃないんだろ」
そう言って、遼は右手を由奈の股間に差し込んだ。
「んくぅッ！」
びくん、と由奈の体が硬直し、鎖がじゃらりと鳴る。
「もう濡れてるぞ、由奈……どうして、ここを濡らしてるんだ？」
「い、イヤぁ！　イヤです……！」
由奈は、羞恥のあまり激しく首を振った。しかし、遼は容赦しない。
「気持ちいいからだろ。それとも、痛い目にあいたいのか？」
くい、と遼が指先に軽く力をこめる。
「や、やめてください……」
「なら、素直に言うんだ」
そう言って、遼は巧みに指を動かした。由奈の敏感な部分を、こすりあげ、はさみ、優しく撫で上げる。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ふあああああ……ッ！」
　いつしか、はしたなく腰を突き出しながら、由奈の幼い体は快感に震えていた。
「言えよ」
　耳元に口を寄せ、熱い息を吹きかけながら遼が促す。
「き、きもちイイ……きもちイイんです……んあっ、イイっ……」
　甘い喘ぎ声を上げながら、　由奈が舌足らずな声で繰り返す。
「どこが気持ちいいんだ？」
「む、胸と……アソコが……」
　まるで催眠術にかかったように、遼に問われるまま、由奈は答えてしまう。
「可愛いぞ、由奈」
　そう言って、遼は由奈の耳たぶにキスをした。
「んあン」
　ぴくん、と体を震わせる由奈の首筋に舌を這わせ、さらに左の乳首を口でくわえる。
　そして、すでに堅く尖っている乳首を軽く吸い上げ、さらには舌で転がすように舐めしゃぶった。
「んくうぅ〜っ、んあっ、あっ、あああッ！」
　由奈の声が、高く、切羽詰ったものになっていく。
　遼は、ひとしきり左の乳首を刺激した後、右の乳首も同様に口でじっくりと愛撫をした。
「んああ、イイ……すごく、きもちイイの……イイですぅ……ふあぁ〜ん」
　由奈が、互いに共鳴するように高まりあう、乳首と陰部の快美感に翻弄され、うわごとのような口調で言う。
　と、遼はいきなり右手を股間から離した。
「あ……ど、どぉしてェ？」
　由奈が、なんとも情けない声を出して、遼の顔を見る。
「どうした？」
　由奈が分泌した透明な粘液にまみれた右手の指を由奈に見せ付けながら、遼が訊いた。
「何かしてほしいんだったら、きちんと言葉でお願いしないと駄目だろ」
　意地悪くそう言いながら、遼は右手の指を由奈の頬になすりつけた。
「ひ、ひどい……」
　由奈は、顔を背け、涙をこぼした。しかし、その白い太腿は、もじもじともどかしげに動いている。
「つ……続けて、ください……」
　屈辱と羞恥に顔を真っ赤にさせながらも、由奈は、そう言ってしまった。
「何を続けるんだ？」
　なおもそう訊く遼は、由奈の胸を揉み、お尻を撫でさすりながらも、肝心な部分に触れようとしない。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「あそこを……あそこを、いじって……！」
「あそこってのは、オマ×コのことか？」
「そ、そうです……オ、オマ×コを、いじって、ください……」
　あまりの恥ずかしさにひっくひっくとしゃくりあげながら、由奈は卑猥なおねだりをしてしまう。
「よく言えたな。偉いぞ……」
　そんなことを言いながら、遼は由奈のクレヴァスに再び指を滑りこませた。
「ふぅっ！」
　体を支えきれなくなった感じで、由奈は膝立ちの姿勢のまま、やはり膝で立っている遼の胸に体重を預けた。
「ひあッ！　ああ、あ、あアッ！　んっふぅ〜ン」
「由奈、オマ×コ気持ちいいか？」
「はい……オ、オマ×コ、きもちイイ……オマ×コが、きもちイイです……」
　そんな卑猥な言葉を言うたびに、ますます性感が高まってしまうのか、太腿の内側まで愛液で濡らしながら、由奈は悶えた。
　遼は、由奈を左手で抱きしめ、右手を忙しげに動かす。
「あッ、あッ、あッ、あッ、ああァッ！」
　由奈の声が、次第に高く大きくなる。
「イキそうか？」
「わ、わかりません……んあっ、あっ、ふァあああああっ！」
「お前はもうすぐイクんだよ」
　中指で、痛みを感じる寸前の激しさでクレヴァスをこすりあげながら、遼が言う。その手の平はべっとりと愛液で濡れ、ぬるぬるとフードの上からクリトリスを刺激している。
「イクときは、イクって言うんだ」
　そう命じる遼に、由奈はこくんと肯いていた。
　その素直さを褒めるように、遼が由奈の頭を左手で優しく撫でてやる。
「あ、あッ……もう……もうダメぇーっ！」
　昨夜、無理矢理味あわされたものよりも、より強い絶頂の気配が、ぞくぞくと由奈の体を包んでいく。
「すごい……これ、これナニ……？　ん、んあッ！　ああああああああああッ！」
「イクって言えよ、由奈」
「い、イク、イクぅーッ！」
　言いながら、由奈はぎゅっと自分の体を遼に押し付けていた。もし両腕が自由だったら、たまらず遼の体を抱きしめていたかもしれない。
「イク、イクの、由奈、い、イク、イっちゃうううううううぅーッ！」
　一瞬、由奈は純粋に快美感だけが存在する空間に浮かんでいるような気がした。

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

「あ、あああ、あァ……あ……」
　そして、その天国から、すごい勢いで落下するような感覚。
　由奈は、遼の体の上をずるずると滑り、がっくりと横たわってしまった。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」
　絶頂の余韻に体をひくつかせながら、由奈は横たわっている。
　遼は、その頭を両手で抱えるようにして、強引に由奈の上半身を起こした。
「ふぁ……」
　横座りの姿勢で、由奈の半身が起きる。
　空ろだったその大きな目の焦点が、ようやく合ってきた。
「キャッ……！」
　可愛い悲鳴をあげて、由奈は目をそらした。すぐ目の前に、ワイシャツのすそを割ってそそり立つ遼のペニスがあったのだ。
　由奈を絶頂に追い込むことで興奮したのか、赤黒いそれは熱い血液を充填させ、凶暴な角度で屹立している。
「目をそらすな、由奈」
　そう命じながら、遼は由奈の髪を掴んだ。
「う……」
　強引に顔を戻される由奈だが、きつく目を閉じ、遼のそれを見ようとはしない。
「なんだ、初めて見るわけじゃないだろ。……親父さんのを見たことはなかったのか？」
　その遼の言葉に、由奈はびくっと体を震わせた。
　そんな由奈の反応を、遼は興味深げな顔で見下ろした。
「ま、いいさ。何にだって最初があるんだからな」
　そんなことを言いながら、遼は硬くなったペニスを由奈の頬に押し付けた。
「ひ、イヤっ！」
　意外なほどの熱さに驚きながら、由奈が悲鳴をあげる。
「由奈……舐めろ」
「え？」
　由奈は、思わず目を開き、遼の顔を見上げていた。
「フェラチオも知らないのか？　男のコレを、お前の口と舌で気持ちよくするんだよ」
「そ、そんな……」
「お前だけ気持ちいい思いをするのは不公平だろ」
　にやにやと笑いながらそう言う遼の言葉に、由奈が頬を染める。
「それとも、例のビデオを、憧れの先輩とやらに送りつけてやろうか？」

Veon PDF Driver Trial
www.veon.com.tw

「やめてえッ！」
　悲鳴のような声で、由奈が叫ぶ。
「じゃあ、覚悟を決めろよ」
「で、でも……やり方が……」
　目に涙を溜めながら、由奈が訴える。
「そうだな、まずは、舌を出して、こいつを舐めてみろ」
「……」
　由奈は、おずおずとピンク色の舌を突き出した。
　そして、目をぎゅっと閉じ、じれったくなるほどゆっくりと、遼の性器に顔を寄せていく。
　ちょん、と舌先が、亀頭の表面に触れた。由奈は、その感覚に驚いたように、さっと顔を引く。
「おいおい、そんなんじゃダメだ。アイスキャンディーでも舐めるようにしゃぶるんだよ」
「そんなァ……」
　泣き声をあげながらも、由奈は再び遼のペニスに舌を寄せていった。
　そして、静脈を浮かせた竿の部分を、ちろり、ちろりと舌先で舐める。
　その部分特有の牡の匂いに顔をしかめながらも、由奈はけなげにぎこちない奉仕を続けた。
「先っぽだけじゃなくて、舌全体を使え」
　そう言われて、一層舌を伸ばして、舌の腹でペニスを舐め上げていく。そのたびに、遼のペニスは由奈の唾液に濡れていった。
「……今度は、こいつをくわえるんだ」
「くわえる……？」
「こいつをすっぽり口の中に入れるんだよ」
「……」
　遼の残酷な宣告に、ぽたぽたと涙をこぼしながら、由奈はためらいがちに口を開いた。
　そして、可憐な桜色の唇を震わせながら、その小さな口には大きすぎる遼のペニスをくわえようとする。
　しかし、由奈は、亀頭の半分くらいまでを口に含んだ状態で、動きを止めてしまった。
「まだだぞ、由奈」
　そう言われても、目を閉じ、涙をこぼすだけで、動こうとしない。
　遼は、ものも言わずに由奈の頭を抱える手に力を込め、腰を突き出した。
「んうううううっ！」
「口を広げろ、由奈」
　目を見開き、驚きの声をあげる由奈に、遼が言う。
「歯を立てるなよ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　とうとう、遼はシャフトの半ばまでを、由奈の口腔に侵入させた。すでに亀頭は喉にまで届き、これ以上深く咥えさせる事は難しい。
「う、うう、う……」
「歯を立てるな！」
　もごもごと何か言いたげに口を動かす由奈に、再び遼が言う。今の強引な侵入で、由奈の歯が遼のそれに当たったらしい。
「もし、噛みつこうってんなら、俺を殺す気でやれよ。中途半端にやると、かえって後悔することになるからな」
「う……」
　遼にそう言われて、逆に由奈は歯を立てるまいと大きく口を開いた。だらだらと、だらしなく唾液が口からこぼれる。
　遼は、ゆっくりと腰を動かした。
「ん、んぶっ？」
　生まれて初めて口腔を犯される感覚に、由奈が声をあげる。
　しかし、遼は容赦せず、由奈の小ぶりな口を蹂躙した。
　唾液に濡れた遼のペニスが、由奈の柔らかそうな唇を出入りする。
「ん、んぐ、んう、んぶうううぅ……」
　由奈は、犯され続けている口から、くぐもった泣き声をあげていた。それでも、どうにか遼のペニスを傷つけまいと、けなげに努力する。
　ぎこちない、技術のかけらもない口腔の感覚より、その由奈の態度が、遼の歪んだ性感を昂ぶらせた。
「いいぞ、由奈……初めてにしては、上出来だ……」
　そんなことを言いながら、由奈の髪を撫で、さらにはペニスの角度を調節して舌にこすりつけるようにする。遼のペニスから、奇妙に苦い液が分泌されるのが分かる。
「んうううううっ！」
　だが、由奈は、声をあげることしかできない。
　そんな、由奈にとっては拷問よりも辛い時間が、延々と続いた。
「……くっ」
　唐突に、遼は腰を引いていた。
「あ……」
　由奈の空ろな目に、ひょこんと跳ねあがるペニスが映る。
　遼は、左手で由奈の頭をしっかりと押さえ、右手で忙しげに自らのペニスをしごきあげた。
（な、なに……？　なにしてるの……？）
　男の生理についてほとんど知識のない由奈は、思わずその行為に見入ってしまう。
「くぅっ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

遼が、とうとうその溜まっていた性感を爆発させた。
「きゃあっ!?」
大量の白濁液が、痛いほどの勢いで、何度も由奈の顔を叩く。
その液体は、ねっとりと由奈の顔をよごし、顎を伝って、豊かな胸に滴った。
由奈の上半身は、彼女が今まで嗅いだことのないような異臭にまみれてしまう。
「え、えええ……？」
男の器官から吐き出されるその液体が、精液であることを思い出し、由奈は声をあげていた。
「え……ふえええ……ふえええええええ……」
その精液を顔にかけられたという事実に、声はすぐに泣き声になる。
「ひどい、ひどいぃ……ひどいよおォ……」
後ろ手に手錠をかけられているため、顔をぬぐうこともできず、童女のように由奈は泣き続けた。
そんな由奈の顔を、遼はウェットティッシュでぬぐってやろうとする。
「イヤ、イヤ、イヤあ！」
由奈は、むずがる子供のように、全身を振って遼の手から逃れようとした。
遼は、そんな由奈を、ぎゅっと両腕で抱きしめた。
「ふあ……」
意外と厚い遼の胸の感触に、思わず由奈は泣くのをやめてしまう。
「よく頑張ったな、由奈……」
そう言いながら、遼は由奈の髪を撫で、その広い額にキスをする。そして、耳たぶから首筋へと、唇をゆっくりと這わせた。
「あ、あン」
思わず声を漏らしてしまう由奈の胸を優しく揉み、指先で繊細な刺激を全身に与えていく。
「ご褒美に、また、気持ちよくしてやるからな……」
「あ、そ、そんなァ……やめ……ああァ……んあン……」
遼の巧みな愛撫に、一時収まっていた由奈の性感が、また熱く燃えていく。
「あ、ヤダ……あぁン……だ、ダメぇ、ダメです……っ」
そんな、由奈の抗議の声はひどく弱々しく、いつしか、甘い喘ぎ声の中に埋没してしまう。
「んあ、あああ……ふあッ……ふぁあ〜ン……んあああァ……」
いつしか、由奈は遼の愛撫に身を任せきっていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　その日、由奈は何度も何度も、間を置いて絶頂に追い込まれた。

　けだるい疲労感を抱えつつ、けだるい表情で店に顔を出した遼を待っていたのは、乾だった。
「よう」
　手を上げる乾のごつい顔が、どことなく堅い。
「どうした？」
　平気な顔で更衣室にまでついてきた乾を横目で見ながら、遼はバーテンにふさわしい白いワイシャツと黒いベストに着替える。
「……一ノ瀬が、いなくなった」
「結花里が？」
　思わず、遼は振り返った。
「まさか、逃げ出したのか？」
「だったら、お前さんのペナルティーになったんだがな」
　乾は、面白くもなさそうに笑った。
「残念だが、違う。この店に、木原とかいうのが出入りしてたろ」
「ああ。たしか、議員のガキだったな」
「そいつが、セリの後で、無理矢理に連れ去った。そうとうご執心だったようだな。要するに、警備担当である俺の責任さ」
「安心したよ」
　遼が、芝居がかかった仕草で、両手を広げた。
「俺の調教が甘かったのかと心配したぜ」
「……木原の奴がどこに潜伏してるかは、目星がついてる」
　無表情に、乾は言った。
「結花里なら、あのガキを一晩で骨抜きにできるさ」
　一方、遼は口元に笑みを浮かべている。
「踏み込めばすぐにカタはつくだろうよ」
「かもな。だが、問題はその後だ」
　乾は、ゆっくりと遼に近付き、低い声で言った。
「ウチの幹部の誰かが、西の佐久間に寝返ろうとしてるってことは、話したな」
「ああ」
　そう答える遼の表情は、動かない。
「木原議員は、佐久間と深い関係がある。もし、木原の息子を俺達が捕らえれば、間違いなく佐久間を刺激するだろう」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「……それで？」
　とぼけたように、遼が訊く。
「この件は、ちと微妙なことになる。前も言ったと思うが、裏切り者の依頼を受けるのは止めろ。知らせてくれれば、俺がいいように処理をする」
「……あんたに借りを作るのは、ぞっとしないな」
　しばらく考えた後、遼は言った。
「貸し借りは、ゼロだ」
「先走りすぎだよ、乾さん」
　ぽん、と軽く、遼は乾の肩を叩いた。そのまま、脇をすり抜けるようにして、更衣室から出て行く。
「まずは結花里を助けてやるのが先だろ」
「それは……そうだな」
　しぶしぶ、と言った調子で、乾が認める。
「結花里を助けたら、知らせてくれるかい？」
「分かった」
「悪い」
　言いながら軽く手を上げ、遼は店に入る。
　更衣室のドアの前で、乾は、そのごつい顔に似合わない、困ったような苦笑を浮かべた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第３章

　３日、経った。
　その３日の間、由奈の小さな体は、何度も何度も、苦痛と羞恥、そしておぞましい快楽にさらされた。
　ムチの痛みや、口唇奉仕の屈辱の後には、決まって、たまらない絶頂の感覚が、由奈の精神をとろかせる。
「お前は、俺の奴隷だ」
　快感に脳を痺れさせる由奈に、遼は繰り返し、命じた。
「奴隷は、主人のことをご主人様と呼ぶんだ」
「ごしゅじん……さま……」
　由奈は、なんとも曖昧な表情で、ぼんやりとその言葉に応じたのだった。

　全裸のまま、朝食と洗顔を終えた由奈は、鉄パイプ製のベッドの上の堅いマットレスに膝立ちになり、目の前に立つ遼の股間に顔を埋めていた。
　両手は、自由である。その、白い小さな手を、軽く遼の腰に添えながら、由奈は、けなげに顔を前後させている。
　まだ、自分から遼のペニスにしゃぶりつくのは抵抗があるのか、その仕草はぎこちなく、ともすれば動きが止まってしまう。
　その度に、黒いワイシャツを羽織っただけの遼が、軽く腰を突き出し、熱い剛直で、由奈の口内をつつき、奉仕の続きを促す。
　そんな屈辱的な催促に、力なく恨みっぽい眼を投げかけながらも、由奈は動きを再開するのだ。
　悩ましく眉をたわめ、目尻に涙をにじませながら、その桜色の唇をいっぱいに広げ、凶暴な外見のペニスをしゃぶり、舐め上げる。
「いいぞ、由奈……」
　唇や舌が、雁首のくびれや、竿の裏筋など、男の感じる部分を捉えるたびに、遼は、由奈の頭を撫でながらそう言う。
　こんな状況であっても――いや、こんな状況であるからなのか、遼に褒められると、なぜか由奈の胸の中が熱くなった。
（どうして……？　あたし、こんなコトで褒められて……悦んでるの……？）
　そう思いながらも、意外なほどの優しさで髪を撫でられると、どうしても奉仕に熱が入ってしまうのだ。遼に教えられた通り、口の中で舌を回すようにして亀頭を刺激し、ペニ

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ス全体を咥えて、頭をねじるようにして刺激する。
（この人、感じてる……あたしがしてあげてることで、気持ちよくなってる……）
　そんなことを考えると、ペニスから先走りの汁がにじみ出ることさえ、次第に嫌でなくなってくる。
「んん……んふン……んうぅ……くふン……」
　いつしか、由奈は、媚びるような鼻声をあげていた。
　遼の呼吸が少しずつ早くなっていくのを、由奈が何とも奇妙な気持ちで聞いていた時、不意に、遼が腰を引いた。ちゅぽん、という音ともに、赤黒く膨張した遼のペニスが解放され、鋭い角度で天井を睨む。
「え……」
　由奈は思わず不審の声をあげた。今までの経験から、遼が未だフィニッシュには程遠いことが分かったのだ。が、自らの唾液に濡れるペニスを見せ付けられ、由奈は耳まで赤くしながら、うつむいてしまう。
　そんな由奈の、豊かすぎる胸に、立った姿勢のままで遼は手を伸ばした。
「ああン」
　ほとんど抗うそぶりも見せず、由奈は遼の愛撫に身を任せた。
　ぐにぐにと感触を楽しむように、遼の手が、由奈の双乳を揉みしだく。
「んはァ、ああァん……」
　由奈は、諦めとともに声を漏らしていた。今更、感じていないふりをしたところで、どうなるものでもない。
「気持ちいいか？」
「はい、気持ちイイです……ご主人様……」
　教えられた通りの台詞を、由奈は言う。しかし、全く心にも無いことを言っているわけでは、けしてなかった。
「続きは、このでかい胸でするんだ」
「えっ？」
　目をぱちくりさせる由奈の体を、両腋に手を差しこんで一度持ち上げ、ベッドの上に横たえる。
　その由奈の上半身に、まともに体重をかけないように注意しながら、遼はまたがった。
　そして、両手を左右の乳房に添えて、その谷間にペニスを挟みこむ。
「あ、熱い……」
　由奈は、思わず声に出して言っていた。
　その言葉通り、高い温度をもった剛直を、遼は前後に動かしていた。
「あ、あ、あぁ、あっ……」
　自分の胸の谷間から、赤黒い亀頭が出入りするところをまともに見せ付けられ、由奈は声をあげ、思わず顔をそらしていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「見ろ」
　遼の低い声に、由奈は垂れ気味の大きな目に涙をためながらも、ペニスに犯されている自分の胸に目をやってしまう。
　それを確認して、遼は、自分のペニスを挟んでいる白く柔らかな双乳を、再び揉みしだいた。由奈が痛みを感じるほどに指を食いこませ、さらには、指先で乳首をころころと転がす。
「ん……ンはぁ……あぁン……！」
　胸を弄ばれる快感と、目の前で蠢くペニスに、由奈の声が濡れていく。
　次第に、遼の腰の動きが早くなっていった。息も、荒くなっていく。
　遼は、どうしていいか分からない、といった顔の由奈の両手を、彼女の胸に導いた。
「自分でも押さえるんだ」
「こ、こうですか……？」
　言いながら、由奈は、肘から先で、自分の巨乳を挟み込むようにした。幼い顔の下で、白い乳房が、縦長の楕円に歪む。
「そうだ……いいぞ……」
　胸でペニスを圧迫する役を由奈自身に任せた遼は、由奈の乳首をつまみ、しごいたり、ひねりあげるようにして刺激する。
「あッ、ああ、ふあ〜ン」
　由奈が、男の脳と腰を痺れさせるような泣き声をあげた。両手とペニスで犯された胸は、亀頭からにじみ出る粘液に濡れ、汚されている。
　そして、とうとう遼が限界を迎えた。
「くッ……由奈っ！」
　そう言うと、膝立ちになって、柔らかな刺激によって導かれた欲望を、一気に解放する。
「あ！　い、イヤっ！」
　ぴしゃっ！　と音をたてそうなほどの勢いで精液が顔を叩く感触に、由奈は悲鳴をあげていた。今まで育っていた快感よりも、顔に牡の粘液をかけられることのおぞましさの方が勝ったのだ。
　しかし、遼は、容赦なく由奈の上半身全体に、精液の弾丸を打ちこんでいく。
「ああ……イヤ……イヤあ……っ」
　額も、頬も、唇も、胸の谷間も、大量の白濁液で汚されていくその感触に、由奈は弱々しい泣き声をあげた。
　何度されても、由奈は、未だに精液を顔にかけられる汚辱には慣れることができないでいる。
「センパイ、助けて……」
　思わずそんなことをつぶやいた由奈を、膝で彼女をまたいだ遼が、無表情に見下ろしていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

遼は、手際よく由奈の緊縛を完成させた。
豊かな胸のふくらみの上下に、二重にした縄をかけ、背後に余った分で、由奈の両手首を後ろ手に縛る。
いわゆる、高手小手と言われる形だ。ただでさえ、その幼げな体にはアンバランスな巨乳が、いびつに突き出されて、ますます淫猥に強調されている。
縄の感触に呻き声をあげつつも、由奈は抵抗しようとしなかった。ただ、うつむいたまま、なされるがままに縄がけされていく。
「おとなしくなったもんだな」
言いながら、遼は、由奈の顎に手をかけ、顔をあげさせた。
「だが、まだまだその目は反抗的だ。胸やアソコをいじられてるときは、あんなに素直なのにな」
遼の言葉に、由奈は意地になったように答えない。
「まさか、まだ憧れの先輩が助けに来てくれるとでも思ってるのか？」
単純な嘲弄以上の何かが、遼の声には混じっているようだった。しかし、由奈は沈黙を続けている。
ふん、と小さく鼻を鳴らし、遼はまだはおったままのワイシャツの胸ポケットから、何かを取り出した。
赤い、女物のパスケースだ。
「そ、それ……」
びく、と由奈の体が震えた。
「やっと見つけたよ。お前の大事な先輩をさ」
遼が右手で弄ぶパスケースの内側には、高校生らしき少年の写真が入れられていた。バスケットボールのユニフォームを着て、カメラに笑いかけている写真である。
「無内容な顔で笑ってやがるな」
「か、返して！　返してください！」
「別に男の写真なんか取ったりしないさ」
必死で訴える由奈に薄く笑いかけながら、遼はパスケースをベッドの傍らの棚に立てた。ちょうど、パスケースの内側の写真が、由奈の方を向く。
「ただ、これから起こることを、きちんと見てもらおうと思ってね」
「え……？　きゃッ！」
突然、遼は、上半身の自由を奪われた由奈を抱きしめた。
「は、放してッ！　放してえ！」
由奈の悲鳴を、遼は、まるで耳に心地よい音楽を聴いているような顔で堪能した。
そして、乱暴に由奈の体をマットレスに押し倒す。
「やアあああッ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

痛みと恐怖に、由奈が悲鳴をあげる。
が、そんなことには一向に構わず、遼は由奈の脚の間に、右手を差しこんだ。そして、そのまま手の平全体で、恥丘を包み込むようにする。
「んくッ！」
ひくん、と由奈の体が可愛く跳ねた。遼が、右手でその部分をじんわりと愛撫しながら、由奈の右の乳首を口に含んだのだ。
短期間のうちに開発されてしまった由奈のその部分は、確実に性感を生じさせ、由奈の脳に伝えた。そしてそれは、さきほどまでの愛撫に感じてしまっていた体の奥底の官能の火を、再びよみがえらせてしまう。
遼は、ちゅぱっ、ちゅぱっ、と音を立てながら、ソフトに由奈の乳首を吸い、ころころと舌で転がした。
「ンんん……んう……んくぅ……」
想い人の写真の視線にさらされ、必死で唇を噛む由奈だが、わずかに漏れ出る声は、すでに濡れている。
右手の中指を、愛液にうるんだクレヴァスに潜り込ませながら、遼は由奈の胸から口を離した。しかし、唾液で濡れ尖った乳首は、左手の指でいじくり、刺激を絶やそうとはしない。
「あの先輩とやらとは、付き合ってたのか？」
左の乳首に顔を寄せ、軽くついばむようにしながら、遼は訊いた。
由奈が、消え入りたげな顔で、ふるふると首を振る。
「片想いか……」
言いながら、遼は右手の動きを少しずつ速めていった。
「告白は、したのか？」
確実に由奈の体を追い詰めながら、遼が無遠慮にそう訊く。
「し、してません……んあっ！」
愛撫に反応しながらも、由奈は遼に答えてしまう。
「だってあたし……チビだし、カッコ悪いし……んあァ！」
ちゅぱっ、と音をたてて、由奈の首筋にキスをし、舌を這わせる。
「お前は、可愛いぜ」
耳たぶやうなじ、鎖骨のくぼみなどを刺激する口元に笑みをためながら、遼は言った。
「ウ、ウソ、ウソです……！」
「嘘なんかついてないさ」
遼は、両手でたわわな由奈の乳房をすくいあげた。
「ふアああン」
「おおかた、胸のことでも、からかわれたことしかないんだろ？」
まるでパン生地でもこねるようにぐにぐにと揉みしだいたかと思うと、繊細な指使いで

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

肌をなで、乳首をつまんでくりくりと動かす。
「ンあ……あいッ……いいイ……」
「お前は可愛いよ。特に、そうやって感じてるときの顔がな」
「イヤあ、イヤあぁン」
　卑猥な言葉で褒められ、頬を赤く染めて頭を振る由奈に、遼は前髪に隠れた目を細めた。
　そして、両手を胸から離し、由奈の小さな体に覆い被さる。
「あ……」
　前髪が下に垂れ、遼の顔が露になる。その切れ長の目は大きく黒目がちで、意外なほど優しい表情を浮かべている。
「由奈……」
　腕の中の捕われの少女の名を呼びながら、遼は自らの腰を彼女の白い両脚の間に割り入れた。由奈の脚は、遼の力に逆らえず、はしたなくも大きく広げられてしまう。
「い、イヤ……」
　これから遼がしようとすることを悟って、由奈は弱々しくかぶりを振った。緊縛された体が、目に見えて緊張する。
「怖いか？」
　遼の問いに、由奈が童女のような素直さでこくこくと肯いた。目が、涙でうるうると潤んでいる。
　ぎゅっ、と遼は由奈の体を抱く両腕に力を込めた。そして、まるで愛しいペットにでもするように、目を閉じて頬ずりをする。
「はぁン……」
　由奈が、なんとも複雑な情感のこもった息を漏らす。
「大丈夫だ、由奈……」
　言いながら、遼は由奈の恥丘に、再び右手を伸ばした。
　そして、体を密着させた状態のまま、巧みにその部分の快楽を指先で育て上げていく。
「ン……んあァ……んくッ……ふあァん……」
　中指を、すでに大量の愛液をたたえているスリットに潜り込ませつつ、指の間に左右の肉襞を挟みこみ、柔らかく動かす。そして、親指は、フードから慎ましやかにちょっと顔を出したクリトリスをさぐり、強すぎる刺激を与えないように、その周囲や包皮の部分を優しく撫でさすった。
　遼の抱擁と愛撫に、硬直していた由奈の体から、くたくたと力が抜けていく。
「そうだ、由奈……」
　首筋や額に軽いキスを繰り返しながら、その合間に、遼は由奈の耳元に熱い息を吹きかける。
　そして、遼は、由奈の愛液に濡れた右手で、ずいぶん前から勢いを取り戻したペニスを、由奈の、最も秘めやかな粘膜に導いた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「あッ……」
　その剛直の温度に、思わず由奈が声をあげる。
「だ、ダメ、あたし、やっぱり……」
　そう言って不自由な体をよじらせようとする由奈の肩を、遼はしっかりと固定する。
「いくぞ、由奈」
　そう言って、遼はゆっくりと腰を動かした。
「あ、あ、あああああああ……ッ！」
　入り口の肉襞をかきわけ、ペニスの先端が侵入してくる感触に、由奈は細い声をあげた。
　純潔のしるしの膜が、その侵入を押しとどめようと、はかない抵抗をしめす。
　遼は、一瞬だけ、体の動きを止め……
　そして、激しくはないが確実な動きで、腰を進ませた。

「きゃアあああッ!!」

　由奈が、絶叫した。
　その幼い腰には無理かと思われるような仕打ちに、体を弓なりにそらせて、大きく見開いた目から涙をふきこぼす。
「いッ……いた……い……いイイ……やァ……」
　悲鳴で肺を空っぽにしてしまった由奈は、呼吸もままならない様子で、必死に痛みを訴えた。
　遼は、まるで子供をあやすような手つきで、由奈の髪を撫でた。
「ひン……ひ、ひどい……ひどいよォ……ひああ……やあァ……」
　由奈の力ない悲鳴は、そのまま情けない泣き声になっていく。
「由奈……」
　遼はそう呼びかけ、半開きのままあえいでいる由奈の小さな口に、唇を寄せた。
「ぁむ……」
　何か言いかけた由奈の唇に、遼の唇が重なる。
　由奈は、何かに驚いたように、目を見開いた。
　遼が、由奈の舌に自らの舌を触れ合わせる。
「んむゥ……ン……」
　そのまま、口内に侵入した舌は、由奈の舌を絡めとり、口腔粘膜を小刻みに刺激する。
「ん……ん……んふっ……うン……」
　いつしか、由奈は目を閉じていた。
　そして、遼が由奈の舌を吸い上げると、おずおずといった感じで舌を突き出し、巧みな唇による愛撫を受け入れる。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ちゅぱ、と妙に可愛い音を立てて、二人の口が離れた。細い唾液の糸が、一瞬だけ、唇と唇をつなぐ。
「ンう……」
まだ残る苦痛と、そして切なさとにたわんだ眉の下の大きな目を、由奈はゆっくりと開いた。
「落ち着いたか？　由奈」
その問いに、由奈がぼんやりとした顔で肯く。
「もしかして、ファースト・キスだったのか？」
再び、由奈はこくンと肯いた。
「そうか……ちょっと順番が狂ったな」
遼は軽く笑い、由奈の口をついばむようにして、軽いキスを繰り返す。その度に、由奈の顔が穏やかになっていくようだった。
「動かすぞ、由奈」
「え……」
遼の宣言に、由奈の顔が泣きそうになる。
「大丈夫だ、由奈。さっきほどは痛くないはずだ」
そう言われても、由奈は不安そうな表情を浮かべたままだ。
しかし、遼はゆっくりと体を動かし始めた。
「ン……んぐ…う……」
膣内粘膜がこすられる、ひりつくような痛みに、由奈がうめく。しかし、先ほどのような、切迫した調子ではない。
「我慢できるな、由奈」
言われて、由奈はまた素直に肯いてしまう。
そんな由奈の髪や頬を、遼は優しく撫でてやった。
由奈のそこは、まるで自分自身を守ろうとするかのように、とろとろと血の混じった粘液を分泌し続けている。
「ん……んく……うぅ……んうぅ……うッ……」
少しずつ、少しずつ、由奈の声の質が変化していった。
「んふっ……ふア……んんン……んくぅ……ッ」
遼が、由奈のうなじや耳たぶに舌を這わせ、さらには、恥骨をおしつけるようにして、由奈の幼い恥丘を圧迫して刺激する。
「もう、痛いだけじゃないだろ、由奈」
熱い息とともに、そんな言葉を、由奈の耳にふきかける。
「ハ、ハイ……」
ぞくぞくっ、と体を震わせながら、由奈が答えた。
（イタい……イタいのに……イタいのに、気持ちイイ……）

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

体中を入念に開発されたのと、苦痛と快楽の境が曖昧になるほどに責めつづけられたために、由奈の体は、破瓜の痛みにさえ、はしたない反応をするようになってしまっている。
「初めてなのに感じてるんだな、由奈……」
「そんなァ……そんなコト、言わないでください」
「あの先輩も、お前がそんな娘だとは知らなかったろうなあ」
「イヤ、イヤあ！」
視界の端にあるパスケースの中の写真に注意を向けさせられ、由奈は激しく首を振った。
しかし、遼は、次第に苦痛に勝りつつある快感を、容赦なく煽っていく。
顔や首筋にキスの雨を降らし、その大きな胸を両手で揉みながら、口と指先で乳頭を刺激する。
そして、その腰の動きは、次第に大胆になっていった。
「あ、ああッ！　ああ、んあああ、あいいぃぃ……っ！」
由奈は、下半身に湧き上がる熱く激しい快楽から逃れようとするかのように、その小さな体をよじらせた。
しかし、遼はけして由奈を逃がそうとはしない。
「気持ちいいんだな、由奈」
「ハ、ハイ……気持ちイイ、気持ちイイの、ご主人様ア……」
自分を見下ろす遼の顔を、すがるような涙目で見つめながら、由奈が言う。
「お前はもう、戻れない」
口元に強烈な笑みを浮かべながら、遼は宣告した。
「お前はもう、引き返すことはできないのさ。初めてなのに腰を振るような、イヤらしい変態娘なんだ」
「イヤあ、い、イジワル言わないでえ」
そんな泣き声をあげながらも、遼の言葉通り、由奈はあそこから血を滴らせながらも、はしたなく腰を浮かしている。
「あんなガキには手におえないような淫乱なんだよ、お前は」
「お願いです、せ、センパイのことは、もう、言わないでください……ッ」
ぽろぽろとその大きな目からこぼれる涙を、遼はキスでぬぐった。
「安心しろ、由奈……俺が、もっともっと、お前をイヤらしいメス奴隷にしてやるよ」
「ああッ……そんな、そんなァ……」
遼の言葉よりも、その言葉通りになってしまうであろう自分自身の運命に、由奈は悲痛な快楽の声をあげた。
自分自身の運命が堕ちていく、被虐にまみれた快感だ。
自由を奪われ、無理矢理に処女を散らされる苦痛と屈辱が、そのまま、体を甘く痺れさせる。それは、由奈がかつて味わったことのなかった、存在さえも知らなかった種類の快美感だった。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ああァ……あたし……へ、ヘンになる、ヘンになっちゃうゥ！」
　ふるふると頭を振りながら、由奈が訴える。その白い脚は、いつのまにか、しっかりと遼の腰に回され、緊縛された腕の代わりに、けなげに絡み付いていた。
「何も考えるな……お前はただ、俺を感じればいいんだ……」
　次第に熱く、荒くなっていく息遣いの合間に、遼はそんな言葉を、由奈の耳に吹きかける。その腰使いは、しだいに遠慮のないものになっていき、由奈のそこは、血の混じった蜜をこぼしながら、遼のペニスに肉襞をまとわりついた。
「ンあああああああああッ！」
　びくん、と由奈の体が、大きく跳ねる。
「あうッ！　んあッ！　んくううッ！」
「イクのか？　由奈」
「んあァあ……イク、由奈、イっちゃいますゥ……！」
「初体験でイクなんて、欲張りな奴だな、お前は」
「だって……あ、あついの……アソコが……もう……もう、ダメえ……ッ！」
　遼の嘲弄も、もはや快楽に支配された由奈の脳には、きちんと届いていない様子だ。
「くうッ……！」
　絶頂に向けて、きゅうっ、と収縮する靡肉の感触をペニス全体で感じ、遼は小さくうめいた。
「由奈……」
「ご主人様、もう……ッ！　イ、イク、イクの、イっちゃう、イっちゃうゥーっ!!」
　由奈の体が、弓なりに反った。
「由奈ッ！」
　その小さな体をきつく抱きしめ、遼が、由奈の最も深いところまで、ペニスを突き入れる。
「ああッ！　あッ！　あッ！　んあああああああああああああああああああああああああアアアアアアアアアアアアっ!!」
　由奈が、ひときわ高い声で絶頂を告げた。
　その声に誘われるように、遼が、大量の精液を由奈の体内に注ぎ込む。
「あひッ！　ひあああっ！　あ、あ、ああ、あア……」
　どくん、どくんとペニスが律動し、勢いよく射精を繰り返すたびに、由奈はまぎれもない歓喜の声をあげた。
「ああ……ふああアア……ンあァ……」
　マットレスの上に浅いアーチを描いていた由奈の体から、がっくりと力が抜けた。
　その瞳は、強すぎた快楽の余韻に茫然としているように、ぼんやりとして何も映していない様子である。
　その視線の先に、赤いパスケースに入った写真があった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

しかし、由奈の顔には、いかなる表情も浮かんでこない。
由奈の瞳は、ただ、失われた過去を映しているようだった。
遼が、そんな由奈の様子を見下ろしながら、ゆっくりとペニスを引き抜いた。ぴくん、と由奈の体が、本人の意思とは関係なく痙攣する。
由奈のそこから、血の混じったピンク色の精液が、どろりと溢れ出た。

深夜に、遼の部屋の電話が鳴った。
遼の店は、今夜は定休日である。
コール３回目で、遼は電話を取った。
「乾だ」
不吉な、と言ってもいいくらい、暗く低い声がそう告げる。
「一ノ瀬を保護した」
「それは、どうも」
カップの中の、濃いブラックコーヒーの芳香に鼻をくすぐらせながら、遼が言った。
「様子は？」
「いたって無事だ」
「……俺の、言った通りだったろう？」
「何？」
「結花里は、木原とかいうガキを、骨抜きにしてなかったかい？」
「……おっしゃる通りさ。もう、ただの抜け殻だ、あいつは」
乾の声が、堅い。
「木原議員は、佐久間に話を持ちこむだろう。うちと西の関係は、ますます険悪になる」
「まずい状況なのか？」
「……」
乾は、微妙な沈黙の後、続けた。
「実は、悪くない。これで、裏切り者をあぶりだせるかもしれん」
「それはよかった」
遼は、澄ました口調で言った。その口元に、皮肉な笑みが浮かんでいる。
「じゃあ、その功績に免じて、頼みたいことがあるんだがね」
「功績、か……」
受話器の向こうで、乾が苦笑しているらしい気配が、遼にも伝わった。
「一日か二日、結花里を貸しといてほしいんだが」
「ほお……」
乾が、低く声をあげる。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「ダメかい？」
「いや、どのみち、お前さんには一回、商品の様子を点検してもらおうと思ってたからな。顧客には、俺のほうから話をつけとこう」
「悪い。……これは、借りかい？」
「そこまではいかないさ」
「それはどうも」
　そう言って、遼はコーヒーをぐっとあおった。
「しかし……調教済みの女なんか、どうするつもりだ？　まさか、女に飢えてるわけでもないだろう」
「笑えない冗談だな、それは」
　遼は、まるでコーヒーの苦さに閉口したかのように、その口元を歪めた。そして、その表情のまま、言う。
「仕事で使うのさ」
　窓の外、初夏の夜空は、雲に覆われていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第４章

「お久しぶりです、ご主人様」
　そう言って微笑んだのは、先日、遼の店でオークションの対象となっていた、あの黒髪の美女だった。
「ああ……大変だったみたいだな、結花里」
　遼が、二人分のコーヒーを用意しながら、言う。昼下がり。遼の家の、応接室である。
「そんなことは、なかったですよ」
　結花里は、花がほころぶようなあでやかさで、笑った。腰にまで届きそうなその髪はつややかで、肌はあくまで白い。それが、身にまとった青紫のスーツによく似合っていた。さらには、涼しげな目元や通った鼻筋が、とても上品な印象を人に与える。
　とても、あらゆる技術を体の奥底まで染み込まされた性奴隷には見えない。
「木原とかいう男を、落としたそうだな」
　無表情な顔で、遼が言う。しかしその声は、どこか微妙な響きを帯びていた。
「いやですわ」
　ぽっ、と結花里の頬が桜色に染まった。
「あの人は、とても激しく、私をお求めになりました。私は、それに応えたに過ぎません」
　結花里も、乾に捕らえられた木原という男の運命については、知っているはずである。しかし、その表情に何らかげりはない。
「それで、私に頼みって、なんですの？」
「……実は、仕事を手伝ってほしくて、な」
「お仕事を、ですか？」
　結花里が、少し、目を見開く。
「思わしくないんですの？」
「いや、そういうわけじゃないが……」
　コーヒーカップに目を落としながらそう言う遼に、結花里は、ふふ、と笑いかけた。
「いいですわ。他ならぬご主人様の頼みですもの」
「助かる」
　そう言いながら、遼は、熱く苦いコーヒーをすすった。

　由奈は、ぼんやりとした目で手の中の写真を見ていた。
　バスケットボールのユニフォームを着た、すらりとした長身の少年が、こちらに笑いかけている。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

その笑顔は、今の由奈には、何も語りかけはしなかった。
誰に向けられ、どんな意味を有するのかも分からない、爽やかな笑顔。
「バカみたい……」
由奈は、感情を感じさせない声でそうつぶやき、何のためらいもなく、写真を引き裂いた。
引き裂いた紙片を重ねてさらに引き裂き、もとの画像が分からないくらいの小片にする。
そして、由奈はバスユニットまで歩き、それを、便器に流してしまった。
レバーを倒し、渦巻く水が下水めがけ流れていく様を、乾いた目で見つめる。
「バカ、みたい……」
誰に対する言葉なのか、由奈は、再び、そう言った。
「……どうしたんだ？　由奈」
その時、ドアが開く音に続いて、遼の声が、地下室に響いた。
「あの……写真を、捨ててました」
「お前の王子様の写真をか？」
遼の声には、相変わらずの嘲弄の色がある。
「王子様なんかじゃ、ありません」
言いながら、バスユニットから出て、由奈は絶句した。遼の傍らに立つ結花里の姿を認めたのだ。
（きれいな……ひと……）
ぼんやりとそう思った後、はっと気づいて、由奈は大きな胸を腕で隠して、しゃがみこんだ。自分が、遼に与えられた首輪以外は、何も身につけていないことを思い出したのである。
「王子様の写真て、何ですの？」
そんな由奈の様子に頓着せず、結花里が、おっとりした声で遼に訊く。
「憧れの先輩の写真さ」
「ふうん……」
結花里は、にっこりとその黒目がちな目を細めた。そして、ひどくやさしい調子で、由奈に語り掛ける。
「それは、仕方ないわね。初恋って、たいがいは実らないものだもの」
そんなことを言いながら、ちらりと、遼に視線を向ける。
その視線に気づいているのかいないのか、遼は表情を動かさない。その無表情のまま、遼は由奈に近付いていった。
自らの傍らに片膝をつく遼に、由奈は、しゃがみこんだまま、涙の浮かんだ目を向ける。
「お前も、女になったばかりだからな」
言いながら、遼は、ポケットから犬をつなぐための細身の鎖を取り出した。それを、由奈の細い首にはまった赤い革製の首輪に取りつける。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「今日のところは、見学だ」
　そして立ちあがり、まさに犬を引くような要領で、部屋の隅に由奈を導こうとする。
「んうっ……」
　由奈の喉に、首輪が軽く食い込む。由奈は、真っ赤になってうつむきながら、遼に従った。
　遼は、部屋の壁にある手すりに鎖を結びつけた。鎖も首輪も、外そうと思えば、外せないことはない。これは、今の由奈の立場を象徴しているのに過ぎないのだ。
　その立場に甘んじるように、由奈は、鎖で手すりに繋がれたまま、そこに、いわゆる体育座りで腰を下ろした。
「先輩奴隷のやり方を、よく見ておけ」
　数歩下がりながらそう言う遼の傍らに、結花里が、そっと寄り添った。
「ご主人様……」
　囁くようにそう言いながら、目をうっとりと閉じ、遼の胸元に顔を寄せる。
（せんぱい……どれい……？）
　由奈が、その言葉の意味するところを完全に理解する前に、結花里は、遼の前でひざまずいていた。
「失礼いたします、ご主人様……」
　そう言いながら、遼の腰に手を添え、そのスラックスのジッパーを咥え、口だけで下ろしていく。
「んふっ」
　小さく微笑んで、結花里は、遼の股間の布地の間に、顔をうずめた。
　そのまま、顔をねじるようにして、遼のその部分を刺激しつつ、スラックスの下のトランクスから、口だけでペニスを外に導こうとする。
「はァっ……」
　ようやく、半ば血液を充填させた褐色の肉茎が現れたとき、結花里は情感たっぷりにため息をついた。
「お久しぶりです」
「どこに話しかけてるんだ、お前は」
「うふふっ」
　結花里は、口元に軽く笑みを浮かべたまま、愛しそうに、すりすりと遼の男根に頬ずりした。グロテスクな牡器官と美しく整った白い顔が、異様なコントラストを形成している。
「あぁ、すてき……ご主人様の、匂いがします」
　言いながら、結花里は、反りかえりつつある遼のペニスの裏側に、唇を寄せた。
　そのまま、顔を上にもっていき、その朱唇を大きく開いて、赤黒い亀頭をぬるりと咥えこむ。
「んっ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

その口腔で、いかなる技術が駆使されたのか、遼はかすかにうめいていた。
結花里は、そんな遼の反応に嬉しそうに目を細めながら、深々と遼のシャフトを口内に収めていった。
（スゴい……）
由奈は、その垂れ目を大きく見開いていた。今まで、自らしたことはあっても、人がフェラチオをするところをまともに見たことはなかったのだ。
（……あんな綺麗な人が、あんなエッチな顔で……あの人の、おしゃぶり、してる……）
結花里は、ゆっくりとしたペースで、自らの頭をピストンさせ、遼のペニスを唾液で濡らしていった。かと思うと、時々、ペニスを口から解放し、長く伸ばしたピンク色の舌で、逞しく反り返ったシャフトをちろちろと舐めあげる。
そんな淫らな奉仕を続けながらも、結花里の顔の上品さは、いささかも損なわれてはいない。
結花里は、その長いまつげにふちどられた目を上目遣いにして、遼の表情をうかがっていた。伸ばした前髪の奥に隠された遼の目が、その欲情に濡れた視線を受け止めている。
なぜか、由奈は胸がきゅうんと苦しくなった。
少しずつ、結花里の頭の動きが速くなっていく。
「んんン、んむ、んふン、んぅン……」
遼の雁首が口腔粘膜をこすりあげるたびに、結花里が、さも嬉しげな鼻声をあげる。
結花里は、いつのまにか、自らの衣服を一枚いちまい脱ぎ捨てていた。
青紫のスーツの上を脱ぎ、ブラウスを脱ぎ、まだ履いていた黒のハイヒールを脱ぎ捨てる。
スーツと同系色の、レースをあしらった高級そうなブラジャーが、その形のいい乳房を包んでいるのが、由奈にも見えた。くびれた腰といい、未だ身につけているスカートの上からもうかがえる張りのあるヒップといい、同性の由奈が見ても、ため息が出そうなほどに、綺麗なボディラインである。
結花里が、ちゅぼちゅぼと淫猥な音をたててペニスを口に出入りさせるたびに、癖のない豊かな黒髪が、白いなだらかな背中で踊った。
遼の手が、そんな結花里の頭を撫でている。
由奈は、体内に湧き上がるざわつきを抑えるかのように、ぎゅうっと、自らの膝を抱いた。目をそらしたいのに、どうしても、結花里の奉仕から目をそらすことができない。
「ご主人様ァ……」
はぁはぁと息をつきながら、遼のペニスから口を離し、結花里は甘い声をあげた。
「お願いです……結花里のイヤらしい体を、慰めてください……」
目元をぽおっと染めながら、あくまで上品な顔で、はしたないおねだりをする。
「どうしてほしい？」
「あぁン……結花里、おっぱいを、ご主人様にいじってほしいんです……」

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

言いながら、すがるように、遼の腰を抱き、その右脚に自らの胸を押しつける。
「しょうのないヤツだな」
遼は苦笑いしながら、立ったまま上体を倒し、カップの中の結花里の乳房を、その手に収めた。
「嬉しいです、ご主人様」
結花里が、再び遼への口唇奉仕を再開する。
ブラのカップの中に侵入した遼の手の平は、少し手に余る感じの結花里の左右の乳房を、ぐにぐにと無遠慮に揉みしだいた。
「ふうン、うン、ンうううぅ〜ン」
たまらない声をあげて、結花里はいっそう激しく奉仕を行い、体を遼の脚にこすりつける。
粘膜同士が、唾液を潤滑液にしてこすれ合う、なんとも卑猥な音が、コンクリートむき出しの部屋の中に響いた。
次第に、遼の呼吸がせわしないものになっていく。
（あの人……もうすぐ、イクんだ……）
何度も自らの体で射精へと導いた男が、別の女の手によってフィニッシュへと追いこまれつつあるのを、由奈はどこか熱っぽい目で見つめていた。
「くッ……！」
不自然な姿勢のまま、遼は、さらに深く上体を倒し、結花里の頭を抱え込んだ。
結花里も、そのしなやかな白い腕で、遼の腰を抱きしめる。
遼の体が、断続的に、震えた。結花里の口の中に、大量の精を放っているであろうことは、由奈にも分かる。
（あ……）
由奈は、声にならない声をあげていた。
切ないような、辛いような、説明のつかない気持ち。
そのままの姿勢で、遼と結花里の動きが止まっている。
（早く……はなれてェ……）
何かに祈るような気持ちで、由奈は思った。
しばらくして、じれったくなるほどゆっくりと、結花里は遼かから体を離した。
そして、濡れた黒い瞳を、由奈に向ける。
「どうした？　由奈」
しかし、由奈に声をかけたのは、遼だった。
「なんだか、物欲しそうな顔してるぞ」
「……」
由奈は、唇を噛み、目をそらした。遼に、心の奥底を見透かされたような気がしたのだ。
自分でさえも整理がついていない、自分自身の心。

Yeom PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「いいの？　由奈ちゃん」
　しばらくして、女の由奈が聞いてもぞくっとするような艶っぽい声で、結花里が言った。
「そこで、おとなしくしていられる？」
「あ、あたし……」
　由奈は、遼と結花里に視線を戻した。スカートを脱いで下着姿になった結花里が、立ちあがって遼の体にしなだれかかり、細い両腕を絡めている。
「お願いします……あたしも……あ、あたしにも……」
　由奈は、自分で自分が何を言おうとしているのか、分からなかった。
　ただ、突き動かされるように、言葉が勝手に口から出てしまう。
「……由奈にも、ご主人さまに、ご奉仕、させてください……」
　ムチによる痛みと、愛撫による快楽によって、無理やりに言わされていたはずの言葉。それを、由奈は、顔を赤く染めながらも、はっきりと口にしていた。
　由奈は、まるで叱られている子どものように、目に涙を溜めながら、下を向く。
「結花里」
「はい、ご主人様」
　軽くあごをしゃくっただけの遼の意思を、結花里は充分に察し、軽やかな足取りで由奈に近付いていった。
　すぐそばに両膝をついた結花里の気配に、由奈はびくっと顔を上げる。
「あ、あの……」
「いっしょに、ご主人様にご奉仕しましょう、由奈ちゃん」
　にっこりと笑いながら、結花里は、その白く細い指で、由奈の首輪から鎖を外す。
　由奈は、均整のとれた結花里の肢体を盗み見ながら、その幼い顔に似合わない複雑な表情で肯いた。

　遼は、鉄パイプ製のベッドの上で、頭の後ろに両手を組んで、仰臥していた。
　その体を、二人の女奴隷が、指と舌と唇で愛撫している。
「んんン……んぶ……んぐ……ンふん……」
　四つん這いになって遼のペニスを咥え、竿の部分に舌を絡めているのは由奈だった。
　辛そうに眉を寄せながらも、その小さな口をいっぱいに開いて、けなげに奉仕を続けている。精を放ったばかりのはずの遼のその部分は、すでに堅く反りあがっていた。
「上手よ、由奈ちゃん……」
　結花里は、遼の右脚をまたぐようにしている由奈の横で、左の脚をまたいでいる。そのしなやかな指は遼の腿を撫で、陰嚢をやわやわと揉みほぐしていた。
　その結花里の指までが濡れるほどに、遼のペニスは由奈の唾液にたっぷりと濡れている。
「さすが、ご主人様が教え込んだだけあるわね……」
　結花里は、由奈のピンク色の唇を、てらてらと光る遼のシャフトが出入りする様を、う

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

っとりと濡れた瞳で見つめていた。それは、由奈の口が可憐な分、無残とも言えるような姿である。
　しかし、由奈は、何かに憑かれたように、情熱的に遼のペニスを刺激し続けた。もし、一度精を放っているのでなかったら、遼はあっけなく陥落していたかもしれない。
「ふふ、由奈ちゃん、一生懸命ね。……でも、追いつめるばっかりじゃ、ダメよ」
　結花里は、そっと由奈の丸い小さな肩に手を置いた。唇を半開きにした由奈が、え、といった感じで結花里に顔を向ける。
「たまには焦らしてさしあげたほうが、男の方は、もっと感じてくださるのよ……」
　結花里は、ちろりと自分の唇を舐めた。ぞく、と由奈の体がかすかに震える。
「さ、今度は、二人でお舐めしましょう」
　そう言って、結花里は、まだ亀頭に口を近づけたままの由奈の顔に、自分の顔を寄せるようにした。長い黒髪が、遼の脚の内側と、そして由奈の肩を撫でる。
　ちゅっ、とかるく口付けした後、結花里は赤黒い亀頭にぺろぺろと舌を這わせ出した。
　少し遅れて、由奈も亀頭に舌を寄せる。
「うっ……」
　二枚の舌が、別々の動きで敏感な粘膜を刺激する感覚に、遼は思わず声をあげていた。
　結花里と由奈は、半ば開いた口から、はァはァと切なそうな息を漏らしながら、遼のペニスに舌を絡めていく。
　遼のペニスの先端からにじみ出る透明な雫を、由奈は、ぺちゃぺちゃと音を立てながら舐めとった。
　一方、結花里は、顔を深く沈め、遼の陰嚢に唇を寄せている。
「男の方はね、ココも感じるのよ」
　不思議そうな顔で自分の方を見る由奈に、結花里は笑みを含んだ声でそう言った。
「由奈ちゃんも、おしゃぶりしてみる？」
　由奈は、こくンと肯き、結花里の反対側から、クルミを思わせるその器官にキスをした。
「きつくしてはダメよ。ココは、優しくしてあげるの……」
　そのことばをまるで実践するかのように、結花里が、その袋の中の睾丸を、柔らかく口に含んだ。
　由奈も、その様子を見て、おずおずと自分でも試してみる。
　そして、結花里の指示に従い、むぐむぐと唇や舌を動かしながら、口内で睾丸を転がすようにした。
　もどかしいような快感に、遼のペニスが、断続的にひくつく。
　そうやって、ひとしきり遼の陰嚢を刺激した二人は、再びシャフトに舌を這わせ始めた。
　先端を指で刺激しながら、ハーモニカを吹くように横咥えに刺激したり、舌の裏側の柔らかい部分で亀頭粘膜を刺激するなど、様々なテクニックを結花里は由奈に教えていく。その度に、遼のペニスは、ひくひくと動いてしまった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「可愛いでしょう、由奈ちゃん」
　遼のペニスに熱心に舌を這わせる由奈の耳に、結花里は息を吹きかけるようにして話しかけた。その白い腕は、由奈の背中を優しく抱くようにして撫でている。
「ご主人様って、なかなかお声をあげてくださらないんだけど……オチンチンは、正直に感じてるって言ってくださるのよ……」
「余計なことを言うな、結花里」
「申し訳ありません、ご主人様」
　苦笑しながら言う遼に、結花里は丁寧に謝った。しかし、その顔にも笑みが浮かんでいる。
　いつのまにか、由奈は、遼のペニスに奉仕を続けながら、その体を遼の脚にこすりつけるようにしていた。
「んふぅ……んあぁ……はぁァア……」
　頬を染め、目を涙で潤ませながら、悩ましい声をもらす。
「感じてしまってるのね、由奈ちゃん」
「えっ……そ、そんな……」
　結花里の指摘に、赤くなった顔をさらに赤く染め、由奈はうつむいてしまった。
「いいのよ、由奈ちゃん。その大きな胸を押しつけられるのも、男の方は嬉しいんだから……」
「で、でも、あたし……」
「自信を持っていいのよ、由奈ちゃん」
　言いながら、結花里は由奈の背中を抱く腕に、優しく力を込めた。
「ほら、ご主人様のアレだって、由奈ちゃんに、あんなに興奮なさってるのよ……」
　そう言う結花里の視線の先に、唾液に濡れ、臍の方まで反り返った遼のペニスがある。
「あたし……」
「素直に、おねだりしてごらんなさい。それに応えられるかどうかは、ご主人様がお決めになることだけど……」
「あ、あっ……」
　由奈が、うろたえた声をあげた。結花里が由奈の乳房を、後から手の平に包んだのだ。
「柔らかくて、気持ちいいおっぱいね……私、うらやましいわ……」
　細い指先でくりくりと乳首をいらいながら、結花里が言う。
「あ、あたし……あたし……ッ」
　結花里に抱え起こされるようにして、遼の足元で膝立ちになった由奈が、熱っぽい声で繰り返す。その大きな瞳は、すがるような感じで遼の顔とペニスを交互に見つめていた。
「ご主人様……あたし……あたし、欲しいです……」
「ダメよ、由奈ちゃん」
「きゃン！」

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

唇で背中をすぅーっと撫でられ、由奈が可愛い悲鳴をあげる。
「ご主人様に、言われてるでしょう。おねだりは、もっとはっきり言わなくちゃ……」
ぞくぞくと震えてる由奈の小さな体に、背後から手と口を這わせながら、結花里は続けた。
「ココは、もうガマンできないみたいよ……」
「んあああああ〜ン」
くちゅ、と音をたてて結花里の指が処女を失ったばかりの由奈のクレヴァスに潜り込む。そこは、しっとりと蜜を分泌し、むれそうなほどに熱く息づいていた。
ちゅくちゅくと音をさせ、優しく、しかし残酷に、結花里はそこで指を遊ばせる。
「ああ、あ、あぁン……ダ、ダメ……ダメです……ッ」
「私の指なんかでイっちゃっていいの？」
後から由奈のうなじに唇を這わせながら、結花里が訊く。由奈は、ふるふると首を振った。
「ご主人様……あ、あたしのアソコに、ご主人様のを、下さい……ッ！」
「も・っ・と・は・っ・き・り・♪」
結花里が、意地悪く追い討ちをかける。
「オ……オ×ンコ……オ×ンコに、ご主人様のオチンチン……い、入れて、ください……」
耳まで赤く染め、目尻に涙をにじませながら、由奈が哀願する。
「好きにしろ」
遼は、自らの組んだ指を枕にした姿勢のまま、鷹揚に言った。
「ハ、ハイ……」
そう返事をしつつも、由奈にはどうしていいか分からない。
「由奈ちゃん、膝で、ご主人様の腰を、またいでみて……」
そう結花里に言われるまま、由奈は、おずおずと自らの膝の間に遼の腰をとらえた。
「そのまま、ご主人様のオチンチンに手を添えて、由奈ちゃんのアソコに当てるの」
「こ、こう、ですか……？」
強い力で反り返っている遼のペニスの角度を、おっかなびっくりといった調子で、由奈が両手で調整する。
「そう、そうよ……さあ、ゆっくり、腰を落として」
ぴと、と遼の亀頭が、由奈の膣口に接触した。
「ああ……由奈、怖い……」
何と言っても、昨夜、処女を失ったばかりなのだ。由奈の動きはぎくしゃくと堅く、ともすれば動きが止まりそうになる。
「大丈夫よ……」
結花里が、由奈の緊張をほぐすように、その豊かな胸を揉む。そして、その姿勢で、ゆっくりと由奈の体を下に導いてやる。

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

「あ、ああア、うあああああああああア……ッ」
　ずるり、とまだ固い膣肉を、遼のペニスがこすりあげる感触に、由奈は悲鳴のような声をあげた。
　それでも、由奈のそこは、遼の剛直を飲みこんでいく。
「ス、スゴい……いっぱい、いっぱい、入ってくるゥ……」
　ぴったりとした靡肉が、半ば強引に遼のペニスによって割り広げられる感覚に、由奈は圧倒されていた。
　ようやく、遼のペニスが、すべて由奈の中に収まる。
　だが、無毛に近い幼げな恥丘は、とてもそんな仕打ちに耐えられるようには見えず、今にも凶暴なペニスが下腹を突き破りそうな感じだ。
「はア、はア、はア、はア……」
　騎乗位の姿勢で、由奈は、がっくりとうなだれ、半開きの口から舌をのぞかせながら、荒い息をついている。
「さあ、由奈ちゃん、動いてみて」
　ともすれば、そのまま遼の体の上に倒れこんでしまいそうな由奈の体を支えるようにしながら、結花里が言う。
「そ、そんな……」
　弱々しく抗議めいたことを言いながらも、由奈はゆっくりと腰を前後に動かし始めた。
「あッ……ん……んぁ……ッ……んくッ……」
　その刺激によって、由奈のその部分が、さらに愛液を分泌する。そしてその愛液が潤滑液になり、由奈の動きは少しずつスムーズになっていった。
「あ……ああァ……あひっ……ひ……ひああぁ……」
　由奈の体内で、きつい、ひりつくような痛みが、次第に快感に駆逐されていく。
「由奈ちゃん、気持ちイイ？」
　その両肩に手を添えて、後からのぞきこむようにして、結花里が訊く。
「わ、分かりません……で、でも……なんだか、だんだん……ひあッ……！」
　不意に、快感が、苦痛を凌駕した。いや、苦痛が快感に変換されたのか。
「あ、ああァ……あくう……んんんッ、んッ、んふゥ……」
　由奈の腰の動きが、次第に大胆になっていった。その体が動くたびに、巨乳が、ふるん、ふるんと震える。
　遼は組んでいた指を解き、両手を由奈の胸に伸ばした。
「ふあァっ！」
　かなり乱暴に乳房に指を食い込まされたのに、由奈は、甘い嬌声を上げていた。
　遼は、きれいな半球型を保った由奈の双乳の感触を楽しむように、手で円を描くようにして揉みしだく。
「はああァン、き、気持ちイイ……気持ちイイですゥ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　由奈は、まるで夢を見ているような頼りない表情で、うっとりと快感を訴えた。
「まだ二回目なのに、もうそんなに感じてるのね……うらやましいわ……」
「い、言わないでください……恥ずかしい……」
「でも、自分だけ感じてはダメよ……ご主人様にも、感じていただかなくちゃ……」
　結花里の言葉に、由奈は素直にこくンと肯く。
「もっとリズミカルに、腰を動かすのよ」
「こ、こう、ですか……？」
　由奈は、息を荒げながら、精一杯、結花里に言われたように、腰を動かそうとする。
「あ、ああン……んく、んんん、んうぅ……」
　しかし、その動きによる快感のために、かえって由奈の腰は止まりかかってしまった。
「感じすぎちゃってるのね、由奈ちゃん」
「だって、だってぇ……」
　由奈は、子どものような舌足らずな声をだしてしまう。
「しばらくはガマンして、夢中で腰を動かすの。それで、もうダメ、って思ったら、一休みするのよ」
「そ、そんなの……」
「そうすれば、ご主人様もとても感じてくださるし、由奈ちゃんももっと気持ちよくなれるのよ」
「……」
　由奈は、結花里に導かれるようにして、くにくにと再び腰を動かした。その眉は切なげにたわめられ、可憐な口からは絶え間なく喘ぎが漏れる。
「あ、ああン、んあン、あン、あッ、あッ、あああア〜ッ」
「いいわ。腰の動きを、休めて」
「ふあァ……ん……んく……くうぅ……」
　汗をうっすらとにじませ、かくんかくんと頭を振りながら、非常な努力をもって、由奈が自分の腰の動きをコントロールしようとする。
　そんな試みを繰り返しているうちに、由奈の体内で、快感がたまらない苦痛となり、さらにまた一段高い快感になっていった。
「も、もう……もうダメ……これ以上は、もう……おかしく、なるぅ……」
　本当に、ちょっと心配になるくらい辛そうな顔で、由奈は訴えた。
「可愛いわ、由奈ちゃん」
　ひし、と結花里は後から由奈の首に抱きついた。
「もういいわよ。由奈ちゃんが、一番感じるように動いてみて」
「んあああああア……ン」
　由奈は、背後の結花里に体重を預けるような感じで、上体を反らせた。結花里が、その熱く火照った体を優しく抱きとめてやる。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

「あ、あひ、あひ、あひぃ、ひああァン……由奈、ココが、ココが感じるの……」
　うわ言のような口調で言いながら、由奈は、そり返る遼のペニスの亀頭の部分に、ざらつくような感触の膣壁をこすりつけた。
　いわゆるＧスポットと言われる個所だが、由奈はその部分の名前など知らない。今までの行為で、偶然に発見したのだ。
「スゴい、スゴいの……スゴくイイの……由奈、コレ好き、好きィ……」
　大きく腰をグラインドさせ、かつてないほどの快美感を貪る由奈。
「んわッ！」
　一際おおきな声を出し、由奈は体をがくンと反らした。
　遼が、由奈の胸から離れた手を幼げな腰に添え、腰を突き上げたのだ。
　そのまま、下から激しく由奈のそこを責める。
「ダ、ダメ……ダメ、です……そんな、に、したらァ……」
　そんな、弱々しい由奈の抗議など耳に届いていない様子で、遼は、ますます激しく腰を動かす。
「はうッ！」
　由奈が、何かに驚いたように、大きな目を見開いた。
「ダ、ダメぇ、ダメえーッ！　おねがい、おねがいィーッ！」
　見開いた目を、今度はぎゅっと閉じ、いやいやをするように首を振りながら、その身をよじる。
「あふれちゃいそうなんでしょ？　由奈ちゃん」
　くすくす笑いながら結花里が訊くと、こんどはこくこくと肯いて見せる。
「大丈夫よ、それ、おしっこじゃないから」
「でも、でもォ……あ！　も、もれちゃう、もれちゃうゥ〜ッ!!」
　しかし、遼はがっしりと腰をつかんだまま離そうとしない。
「ご主人様は、ご覧になりたいようよ。由奈ちゃんが、あふれちゃうトコ♪」
「そ、そんなの、イヤ、イヤですゥ……ッ！」
　しかし、遼と結花里に挟まれた由奈の体に、逃げ道はない。いや、あったとしても、官能の鎖にとらえられた由奈が、逃げることができたかどうか。
「い、ヤあああああああああああああああああああああアアアアアアァ〜ッ！」
　その由奈の悲鳴をきっかけにしたかのように、二人の結合部分から、驚くほど大量の液がしぶいた。
　絶頂のしるしの透明な飛沫が、遼のひきしまった腹を濡らしていく。
　たとえ、それが小水でないにしても、人前で排尿同然の姿をさらすのには変わりはない。由奈は、羞恥と、そして名状しがたい快感に、がくがくと体を震わせながら、潮を吹きつづけた。
「くぅッ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

今まで、歯を食いしばって耐えていた遼も、とうとう最後を迎えた。
股間に溜まっていた精液が、輸精管をすさまじい勢いで昇り、由奈の体内に放たれる。
「あ!!　イ、イク！　また、またイっちゃう〜ッ!!」
熱い粘液の小爆発が、由奈をさらなる高みへと舞い上げていく。
「んあッ、ああう、あう、ンうううううううぅ……」
ぴくん、ぴくんと、硬直した由奈の体が、痙攣した。
そして、しばらくして、由奈の体からぐったりと力が抜ける。
結花里は、にっこりと微笑みながら、その由奈の体を、未だ荒い息をついている遼の体の上に重ねてやった。
遼は、どこかぼんやりとした顔で、そんな結花里の顔と、眠っているような由奈の顔を、交互に眺めている。
ぬるり、と力を失った遼のペニスが膣圧によって由奈の体の外に出され、あふれる白濁液が、それに続いた。

「私、お役に立ちまして？」
どこか寂しそうな顔で、結花里は訊いた。
二日後の夕刻。結花里が、遼の館から去るべき日である。
玄関口で、結花里と遼が向かい合っている。
「どうだかな」
両目を隠すほどに前髪を伸ばした遼の顔からは、表情を読み取るのは難しい。
「あいつは、俺以外の誰とでも、できるようにならなくてはならない」
やはり、感情を読み取りにくい声で、遼が続ける。
「だから、私をお使いになったんでしょう？」
「ああ……少しずつでも、他人とすることに、慣れさせなくてはならないからな」
「……」
結花里は、そのしっとりと濡れた黒い瞳で、じっと遼の顔を見つめている。
「それで、いずれは、ご主人様以外の誰かに、由奈ちゃんを抱かせるんですのね」
「ああ」
「……私に、そうしたように」
「そうだ」
遼の表情は、動かない。
「まだ、期限まで半月以上ある。問題ないさ」
結花里は、優雅な動作で振り返った。その視線の先に、組織のよこした迎えの車がある。
「問題は、由奈ちゃんだけにあるんじゃ、ないですわね」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　意味ありげにそう言いながら、結花里が車に歩み寄る。
「どういう意味だ？　それは」
「私の、失われた希望です」
　謎かけのようなことを言いながら、結花里は車に乗りこんだ。
「……」
　何か訊こうとした遼だが、結局は、口をつぐむ。
　そんな遼に、結花里は車のガラス越しにちらりと視線をよこした。何か言ったように口が動いたが、その声は遼の耳に届かない。
　そして、車が走り去る。
　館には、また、遼と由奈だけが残された。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第５章

「よろしくお願いします、ご主人様」
　由奈の調教は、この言葉から始まる。
「今日も、このイヤらしいメス奴隷の由奈を、厳しくしつけてください……」
　冷たいコンクリートの床に正座をして、深々と頭を下げる。身につけているのは、犬にでもするような、赤い革製の首輪だけ。

　そして、由奈の調教が始まる。
　遼の平手や、様々な種類のムチが、由奈の白い肌を赤く染め、熱く燃やす。
　かと思えば、疲れを知らない器具が、由奈を幾度となく、おぞましい絶頂へと導く。それらによる蹂躙は、由奈の大きな乳房や幼い性器だけでなく、秘めやかな肛門にまで及ぶのだ。
　無論、男に対する奉仕についても、教え込まれる。指で、舌で、胸で、そして性器で、体中を使って、牡の器官を刺激し、快楽を与え、絶頂へと導く訓練……。
　それらの調教が、由奈の新しい日常だった。

「ありがとうございました、ご主人様。これからも、このいやらしいメス奴隷を、うんと可愛がってください……」
　調教が終わったときは、どんなに体力を消耗していても、この言葉を言わされる。
　挨拶は、しかし単なる挨拶ではない。由奈の、奴隷としての覚悟を示すセリフだ。
　そして由奈は、この言葉を口にするときに、言い知れぬ快感を感じるようになりつつあった。

「はアん……」
　挨拶が終わった後、由奈の白く小さな裸体に、遼は、縄をかけていく。
　その痛みよりも、大きな乳房がさらに大きく強調されることに、由奈は悩ましげなため息を漏らすのだ。
「ご、ご主人様……」
　乳房の上下に回された縄を、背中で結び、さらに後手にした両方の手首に縛り付けている遼に、由奈が流し目で訴える。
「由奈、イヤがったり、逃げたりしませんから……手を縛るのは、できれば、やめて下さい……」

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「？」
　かすかに不審そうな顔をして、遼が顔を上げる。
「あたし……あたし、されてると、ご主人様のこと、抱きしめたくなっちゃうんです。なのに、手が縛られてると、切なくて……」
　しばらく黙っていた遼は、いきなり、ぐい、と由奈の前髪をつかんだ。
「ひあッ！」
　悲鳴をあげながらも、由奈はなされるがままだ。
「お前が俺をどうしたいのかは、問題じゃない」
　髪をつかんだまま後から顔を寄せ、囁くような低い声で、遼は言った。
「縛られている間、お前に許されているのは、主人がすることを、全て受け止めることだけだ」
「は、はい……」
　痛みと屈辱と、そして被虐の淡い快感に涙を浮かべながら、由奈は素直に返事をする。
「……体に言い聞かせる必要があるな」
「あうぅ……」
　ようやく手を放した遼の言葉に、由奈はがっくりとうなだれた。
「それとも、もしかして、罰を受けたくて、俺に口答えしているのか？」
「そんな……そんなこと、ありません……」
「どっちでもいいさ」
　遼はそう言い、かちゃかちゃと音を立てながら、冷たいガラス製の、円筒形の医療器具を用意した。
「お……お浣腸……」
　由奈の大きな瞳に、怯えの色が浮かぶ。
　スパンキングや鞭打ちには、最終的には体を熱くさせてしまうまでに調教された由奈だったが、体内で暴れ狂うあの感覚には、まだ慣れることができていない。
「さあ、準備しろ」
「ううッ……」
　嗚咽を噛み殺しながらも、由奈は逆らうことができない。手を後で縛られた姿勢のまま、うつぶせになり、膝を立てて丸いお尻を上げる。
「もっと尻を高く上げるんだ」
「ハ、ハイ……」
　羞恥と恐怖に声を震わせながら、由奈は、頬と両膝で体を支え、必死で遼の言う通りにする。
　遼は、まるで感触を楽しむように、そのヒップの曲線にそって、右手を這わせた。
「今朝は、出たのか？」
「……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　由奈が、一瞬、答えを躊躇した。すかさず、遼の張り手が由奈のお尻をたたく。
「ひッ！」
　ぱァん、という小気味のいい音が、閉ざされた地下室に響く。一度や二度では、由奈の体は快感を感じない。ただ、痛いだけだ。
「ま、まだ、です……」
　再び、スパンキング。
「あひッ！　……ゆ、由奈、まだ、今朝はウンチ、してません……」
　由奈は、血を吐くような思いで、恥ずかしい報告をした。
「なら、きれいにしないとな」
「ハイ……由奈に、お、お浣腸、してください……ご主人様……」
　遼は、また軽く由奈のお尻をひと撫でした後、たっぷりと薬液を充填させた浣腸器を、由奈の肛門に当てた。
　まるで差しこまれるのを待ちわびているかのように、その慎ましやかな器官は、ひくひくと震えている。
「んンッ……！」
　つぷっ、と菊門に異物が挿入される感触に、由奈は小さく声をあげてしまう。
　遼は、ことさらゆっくりと、浣腸器のピストンを押し下げていった。
「ふあ、ああァ……あ……あう……」
　由奈の口から、苦しげな、しかしけして苦しいだけとは思われないような声が、漏れる。
「はあゥ……」
　全ての薬液が体内に注がれ、浣腸器が抜かれたとき、由奈は安堵したようなため息を漏らした。
「もう一本だ」
　そんな由奈に、遼が残酷に告げる。
「え……そ、そんな……」
　由奈は、床に押しつけられた顔を不自由にねじって、涙に濡れた瞳を遼に向けた。
　しかし、遼は無言で、二本目の用意をする。
「お、お願いです……由奈、そんなの、ムリですゥ……お願いですから……あひッ！」
　そんな泣き声をＢＧＭに、遼は、二本目の浣腸を由奈の肛門に差しこんだ。
「ああァ、ダメ、ダメですぅ〜ッ！　イヤあああああああッ！」
　かつてないほどの大量の薬液で腸内が満たされていく感覚に、由奈が高い悲鳴をあげる。
　遼は、慎重に、浣腸器を引き抜いた。
　由奈のすべすべの腹部が、ぽこんと無残にふくれている。
「あ、あいい……ッ……ひぎ……んぐうぅぅぅぅゥ……」
　腸が蠕動し、最も人に聞かれたくない音が、響く。
　しかし、由奈はそれどころではなかった。今にも体が破裂するのではないかというよう

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

な苦痛に、歯を食いしばり、冷たい汗で全身を濡らしていく。しかも、その苦痛は、時が経つにつれ、次第に強くなっていくのだ。
　まるで、体内で何匹もの奇怪な動物が蠢き、暴れ狂っているような、そんな感覚が、断続的に由奈の腹部を襲う。
「し、ぬ……しん、じゃ、う……」
　半ば本気で、由奈は言った。
　その可憐な菊門はひくひくとうごめき、今にも汚物の濁流を噴出させそうだ。
「まだ漏らすなよ。お前が、掃除することになるんだぞ」
　そんな遼の声も、由奈の耳には届いていない。
　いつもであれば、「おトイレに行かせてください」と懇願するはずの由奈だったが、今はその余裕さえないようだ。
　かちかちとその小さな歯が鳴り、口の端からは涎がこぼれている。
「も、う……ダ……メ……」
　力なく開かれた由奈の目には、何も映っていなかった。
「あ！　出るッ……！」
　びくん、と由奈の体が痙攣する。
　遼は、その由奈の脚の間に、ブリキのバケツを蹴りこんだ。
　褐色の滝のような奔流が、バケツをあふれさせんばかりに、放たれる。
「あ、あァ、あああアアア……ッ！」
　目のくらむような解放感に、由奈は、まるで絶頂を迎えたときのような声をあげていた。

　さらに二回、由奈は立て続けに浣腸をされた。
　最後には、その肛門から溢れるのは、ほとんど透明な薬液のみとなった。
　今、由奈は、緊縛されたまま、バスユニットでシャワーの湯を浴びせられている。
　膝を折り、その上に体を横たえるようにして、うつぶせになる姿勢だ。
　その背中やお尻を、温かなお湯が打ち、流れていく感触に、由奈はうっとりと目を閉じていた。
「キツかったか、由奈」
　いつもの、すさまじい苦痛の後の優しい言葉が、由奈の壊れかけた心にじんわりと染み込んでいく。全ては、遼の計算通りのことだ。
「ハイ……でも、由奈、ガマンできます……」
　けなげに、由奈は答えてしまう。
「偉いぞ、由奈」
　言いながら、遼は由奈の背に覆い被さるようにして、その、濡れた髪が張り付いたうなじに口付けした。
「あふゥ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

それだけで、由奈は声をあげる。
遼は、由奈の脇腹をそおっと撫でながら、ゆっくりと頭をずらしていった。そして、まだ縛られたままの腕や、腰の辺り、そして丸く小ぶりなお尻に、舌を這わせる。
「ふァ、ああ、んああァ〜ん」
媚びるような甘い声で快感を訴えながら、由奈はその幼げな体をおののかせた。もどかしげに、その縛られた小さな手を、開いたり閉じたりする。
そして、遼の口が、由奈の尻の割れ目に到達した。
これまでの暴虐のために、わずかに赤い色をにじませながらも、由奈のそこはあくまで慎ましやかだ。
「あ……ご主人様、ソコは……」
由奈が、頬を赤く染めながら、肩越しに遼の顔を見ようとする。
「ソコは、ダメ……汚いです……」
屈辱や羞恥よりも、主人の口を汚してはいけないという隷従の気持ちから、由奈は体をよじる。
「今、中も外もきれいにしてやったろ」
「でも、でもォ……ひあッ！」
いきなり菊門をきつく吸われ、由奈はびっくりした声を出した。
「あ、いやン、いや〜ン、ソコは、ソコはぁ……」
ちろちろとその周囲を舐められ、さらには堅く尖らせた舌をねじ込まれて、由奈は可愛い喘ぎ声を漏らす。
遼は、由奈のお尻を高く持ち上げ、アヌスと、すでに愛液でぐっしょりと濡れたクレヴァスとを交互に口で責めた。
「んはァ……ゆ、由奈、ヘンになる……おかしくなっちゃうゥ……」
頬を、合成樹脂製のバスユニットの床に押しつけるような姿勢で、由奈が舌足らずな声をあげる。
ちゅば、と音を立てて、遼が口を離した。
「続きは、体を拭いてからだ」
ぐったりとした由奈の体を抱き起こしながら、遼が言う。
「ハイ……」
由奈はそう返事をし、寄せられた遼の唇に唇を重ねた。そのまま、自分の口で遼の口を清めようとするかのように、ぺろぺろと遼の口内や舌を舐めしゃぶる。
「ンン……」
うっとりとした鼻声を、由奈は漏らす。
その行為で、由奈ははっきりと被虐と隷従の味を感じていた。

堅いマットレスの上で、由奈は、再びうつ伏せになり、膝をシーツに付いてお尻を上げ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ていた。
「こいつを入れてやるぞ、由奈……」
　そう言いながら、遼は、ローションに濡れるアナルバイブを、由奈の菊門にあてがった。いくつかの球体が連なった形の、細身のバイブである。
　しかし、普通のバイブに比べて細いというだけで、肛門に挿入する異物としては充分に大きい。
「あァ……お願い、します……」
　しかし、そう、うっとりと懇願するほどに、由奈のアヌスは開発されていた。
　ぬるり、と最初の球体が由奈の肉のすぼまりに侵入していく。
「あはン」
　ぴくん、と、縄で縛られた由奈の体が跳ねる。
　遼は、由奈の肛門に浅く潜らせた状態で、くりくりとバイブを動かした。
「あ、あ、イヤ〜ん」
　由奈が、媚びるような声をあげる。
「どうした？　奥まで入れてほしいのか？」
「は、恥ずかしい……恥ずかしいですゥ……」
「抜いてほしいのか？」
「い、イヤっ！　ぬ、抜かないで、抜かないで下さいッ！」
　バイブをアヌスから引き抜こうとする遼に、由奈が慌てたような声をあげる。
「じゃあ、入れてほしいのか？」
「そ、そう、です……バイブを、由奈のお尻に……ください……」
　排泄器官への愛撫をねだってしまう自分の浅ましさに、由奈は、耳まで赤く染めながらシーツに顔をうずめた。
　遼が、左手を由奈の丸いお尻に当て、右手に握ったアナルバイブに力を込める。
　つるん、つるんと、まるで、原始的な生物が捕食活動をしているような感じで、由奈のアヌスが、アナルバイブの球体を次々と飲みこんでいく。
「あウ……んはァ……あひッ……」
　そのたびに、由奈は短く甘い悲鳴をあげた。
　とうとう、アナルバイブの稼動部分が、由奈の直腸にすっかり収まった。きつい締め付けが、バイブごしに遼の手にも伝わってくる。
「動かすぞ」
　一応、そう告げながらも、返事を待たずに、遼はバイブをピストン運動させる。
「あ！　あ！　ア！　ああアァーッ！」
　排泄感にも似たおぞましい快感に、由奈は高い声をあげた。
　しばらくその嬌声を楽しんだ後に、遼は、バイブの振動スイッチを入れた。
「うあぁ、あ、あぁぁ、アぁぁぁぁアアアアアアア……」

Tom PDF Driver Trial
www.tom.com.tw

声とともに、バイブをくわえ込んだ由奈のヒップが、ゆらゆらと揺れる。
遼は、そんな由奈の前に回りこみ、髪をつかんで上体を起こした。
由奈は、後で手を縛られたまま、正座するようなかっこうになる。
その、菊門への刺激に半ば開かれた口に、遼のペニスが押しつけられた。
何も言われないうちに、由奈が遼の亀頭をぱっくりと咥える。
ぬるりとした感触が、遼の、熱くたぎった亀頭を包みこんだ。
「んぐ、んぐ……んんン……」
由奈は、けなげにも、物を飲みこむような要領で、遼のペニスをその小さな口の中に収めていこうとする。
そして、ぴったりと唇で締めつけ、舌を這わせるようにしながら、喉奥まで迎え入れた牡器官に対するピストン運動を始めた。
口腔粘膜の柔らかく滑らかな感触が、腰が砕けそうな快感を、遼の下半身に送りこむ。
遼は、由奈の髪を優しげな手つきで撫でながら、その奉仕を堪能した。
時折、遼は、わざと腰を動かし、由奈の口内を犯すようにイマラチオをする。しかし由奈は、目に涙を浮かべながらも、恍惚とした表情を崩さなかった。
ふン、ふン、ふン、という、まるで主人に甘えるペットのような鼻声を、由奈は漏らしている。
が、その息も、肛門に与えられるアブノーマルな性感の高まりとともに、次第に苦しげなものになっていった。
「ぷはっ」
由奈は、とうとう、自分の唾液にたっぷりと濡れた遼のペニスを口から出してしまった。
「ご、ごひゅじんひゃまあ……」
はァはァという荒い息の合間に、それでも遼のペニスに口を寄せながら、由奈がくぐもった声をあげる。
「どうした？」
「ゆ、由奈……お尻、きもひよくって……うまくごほうひ、できまふぇん……」
その言葉通り、幼い顔に悩ましげな表情を浮かべた由奈は、もはや遼のペニスを口でとらえることができず、ただいたずらに、自分の唾液と、鈴口から溢れている先走りの汁で顔を汚すだけだ。
「仕方ないな……」
拍子抜けするほどあっけなく、遼は腰を引いた。
「あン……」
遼の、天を向いて屹立したグロテスクな陰茎と、それを追いかけようとする由奈の桜色の唇との間に、唾液の糸が引く。
「後の口を、使ってやるよ」
「え、うしろ……？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

思わず声をあげる由奈に構わず、遼は再び背後に回り、由奈のアヌスを責め続けているバイブを手にした。
そのスイッチを切り、挿入したときと同様に、つるん、つるんと引き抜いていく。
「あッ……あッ、あッ、あッ……あいッ……んあッ」
アナルバイブの球体が、肛門を丸く押し広げて、外へと出ていくたびに、由奈はまた短い悲鳴をあげた。
「後の処女も、もらってやるからな」
そんなことを言いながら、ぐったりと体を横たえる由奈の菊門に、遼は赤黒い亀頭を押し付けた。
「あ……ご主人様、こ、怖い、です……」
いかに開発済みとはいえ、遼のペニスは、アナルバイブなどよりはるかに太い。由奈の体に、緊張が走った。
「なに、お前みたいな淫乱は、すぐにケツの方も病みつきになるさ」
遼は、自らの分身にローションを塗り、片手で角度を調節しながら、ゆっくりと腰を進ませていった。
「あッ……き、きつい、ですッ……！」
「力を緩めろ」
遼は、両手で由奈の腰を持ち、少しずつ、しかし確実に、その体内に侵入していく。
「んぐ……う……うあァ……」
最も直径のある雁首の部分が、由奈の狭い器官を、拡張するようにして通過していく。
「んはああア……」
由奈は、大きく口を開き、舌を突き出すようにしながら、ゆっくりと呼吸した。そうして、どうしても強張ってしまう括約筋を緩めようとする。遼は、そんな由奈の直腸粘膜の感触を味わうように、ゆっくりと腰を進ませていった。
ようやく、赤黒い亀頭全てが、由奈の直腸の中に収まる。
細かなシワに囲まれていた肉の門は、今や、遼の剛直を咥えこみ、血の気が引くほどに引き伸ばされている。
「はァ……はァ……んあ……んはッ……」
痛みはないが、重苦しい感触に、由奈はピンク色の舌をのぞかせたまま、苦しげに息をついている。
遼は、さらに腰を突き出した。すでに、一番きつい部分を通過しているため、その挿入は意外なほどにスムーズである。
「んあああああアアアアア……ッ！」
開発されて日が浅いお尻には大きすぎるペニスに押し出されるように、由奈が高い声をあげる。
排泄の時の感覚に似た、しかし、それとは逆方向に直腸の内部をこすりあげられる、奇

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

妙な感じ。が、それは、明らかに快感を伴った刺激だった。
　由奈のお尻に、遼の腰がぴったりとくっつく。とうとう、遼のペニス全てが由奈の腸内に収まったのだ。
「入ったぞ、由奈」
「恥ずかしい……」
　つい一月前まで、このような性交の方法があるということすら知らなかった少女は、羞恥に消え入りそうな声で訴える。
「どうだ？　初めてアナルセックスしてる気分は」
　高く上げられた由奈のヒップを丸く撫でながら、遼が訊く。
「な……なんだか、ヘンな感じです……」
　困ったような、切ないような顔をしながら、由奈が答える。
「すぐに気持ちよくなるさ。……動かすぞ」
「こ、怖い……ッ」
「これだけ咥えこんどいて、今さら何言ってる」
　そう言いながら、遼は腰を前後に動かし始めた。
「あ、あッ、んあッ！」
　由奈が、うろたえたような声をあげる。
　まるで、自らの意思に反して排泄をさせられているような、奇妙な感触。
　しかもそれが、次第に、熱を伴った快感に変化していく。それは、指やバイブによって菊門をなぶられるのとも違う、体の中をかき回されるような快美感だった。
「こ、こんなの……こんなのって……ッ！」
　これまで、その幼げな体で受けとめてきた快感と全く異なる感覚に、由奈は思わず身をよじらせる。しかし、遼は由奈の腰をしっかりと固定し、容赦なく肛姦を続けた。
「んあ……ああァ……こんな……こんなの……はじめて……」
　体の内側からの圧迫感さえも気持ちよく感じながら、由奈は舌足らずな声で訴える。
「やっぱり、感じてるな。淫乱なやつだ」
「だってえ……だってえ……」
　腰を動かしながら言葉で辱める遼に、由奈が肩越しに恨みっぽい視線をよこす。
「だって、ごしゅじんさまが、由奈をこんなふうに……」
「人のせいにするな」
　ぐい、と遼はひときわ激しく腰を突き出した。
「あひッ！」
　そのまま、小刻みな動きを由奈の体に送りこむ。
「お前は、もともと淫乱な女だったんだ。だから、前も後も、初めてなのに感じるんだろうが」
「そ、そうですゥ……ごめんなさい……由奈、イ、インランです……イヤらしいんですゥ

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

……」
　排泄器官を襲うおぞましい快感に、由奈はあえなく屈服する。
　遼は、満足そうに口元を歪め、右手を前から由奈の股間に伸ばした。
　その手は、ほとんど無毛に近い由奈の恥丘を撫で、そして、クレヴァスに潜り込む。
　由奈のアソコは驚くほどの愛液を分泌させ、溢れた液は太腿まで濡らしていた。
「こんなに濡らしやがって……」
「ああ、ごめんなさい、ごめんなさいッ！」
　背骨を貫き、脳を痺れさせる快感に我を忘れてる由奈は、訳も分からず謝ってしまう。
　遼は、その熱いぬかるみを愛撫しながら、指先で敏感な肉芽を探り出した。
「ふあッ！」
　緊縛された由奈の体が、びくんとのけぞる。
「あッ！　あッ！　あッ！　ああッ！　あああああああああああああああッ！」
　クリトリスと、膣口と、肛門を同時になぶられ、由奈は、あっという間に絶頂に追い込まれてしまった。
「ごめんなさい、由奈、イクの……！　イ、イク、イク、イク、イクうううううううううぅーッ!!」
　まるで、力いっぱい握られているような締め付けが、遼のペニスを絞り上げる。
　がくン、がくン、と、由奈の体が大きく痙攣した。
　そして、がっくりと全身から力が抜ける。
　しかし、遼のペニスは、まだ力を失っていないまま、由奈の直腸に収まっている。
　遼は、ぐったりとなった由奈の体を、膝の裏に手を差し込んで、持ち上げた。無論、由奈とはアヌスでつながったままだ。
「ああア……ダ、ダメですゥ……ゆる、してェ……」
　未だ、自分の体内をえぐる遼の剛直の感触に、由奈は弱々しく訴えた。
　しかし、遼は頓着せずに、由奈の小さな体を後から抱えたまま、立ちあがる。
　たぷん、たぷんと、由奈の白い双乳がゆれた。
「ンあああァァァ……」
　自らの体重で、深々と遼のペニスがめりこんでくる感覚に、由奈は力ない悲鳴をあげた。
　遼が、ベッドを降り、部屋の一角に向かう。
　遼が歩を進めるたびに、由奈の体は頼りなくゆれた。しかし、若い由奈の体は、驚くほど早く回復し、すでにまた快楽を受けとめる準備を整えつつある。
　遼が立ち止まったときには、由奈の柔らかな頬は妖しく染まり、その大きな目はおぞましい肛姦の快美感にうっとりと閉じられていた。
「目を開けろ、由奈」
　首筋や耳元に唇を這わせながら、遼が命じる。
　由奈が目を開くと、そこには、大きな姿見があった。

Veon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

いわゆる体操座りの姿勢で、後から抱えあげられた少女の肛門に、グロテスクな陰茎が挿入されているのが見える。その首には赤い首輪がかけられており、股間は、自らが分泌した液のためにきらきらと光っていた。
自分によく似た幼げな顔の少女が、恍惚とした表情で、官能に潤んだ大きな瞳を、こちらに向けている。
「はァ……」
これまで見たこともないような淫猥な眺めに、由奈は思わず溜息をついていた。
（ああ……このコ、すごくえっちな顔してる……でも、なんだか、とっても幸せそう……）
ぼんやりと、そんなことを考える。
と、遼が無言で、由奈の体を動かした。
「あ……おしり……」
由奈は、うわごとのようにつぶやいた。
「おしり、きもちいい……きもちいです、ごしゅじんさま……」
鏡の向こうの少女も、うっとりとした声で、背後の主人に快感を訴えてる。
（あなたも気持ちイイのね……あたしも、今、お尻をいじめられて、すごく気持ちイイの……）
心の中で、鏡の中の少女に語り掛ける由奈の頬に、遼の唇が触れた。
首をねじって、遼のキスを、唇で受けとめる。
「んん……んぷっ……ンはあ……」
互いに舌を伸ばし、相手の唾液を貪るようにして、キスを繰り返す。
「ンむ……ご、ごひゅじんさま……ゆうな、こんどは、おしりだけでイっちゃいそうれす……」
キスの合間に、舌足らずな声でそう報告する。
「いいぞ、イっても……俺も、もうすぐ……」
「うれひい……」
遼が、次第に、動きを早くしていく。
「あ、あああ……きもちイイ……おしり、こんなにイイなんて……」
雁首が直腸の内部をえぐるたびに、由奈はアソコから愛液を溢れさせてしまう。
「きもちイイ……きもちイイの……ッ！　す、スゴい、スゴいよォ……！」
遼は、由奈を抱える両腕に力を込め、いっそう激しくピストン運動を繰り返した。
「あ、あああ、んあ、あいいいいいッ！　イク！　おしりでイっちゃう！」
二度目の絶頂を目前にして、由奈が高い声をあげる。
遼は、獣のように荒い息を由奈の細いうなじに吐きかけながら、狂ったようにそのアヌスを犯し続けた。
みっちりと隙間なく遼のペニスを包み込んだ直腸粘膜が、痛いほどに締めつける。
シャフトの根元が、溢れんばかりの精液で破裂しそうになっていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「うおおっ！」
　射精の瞬間、遼は思わず声をあげていた。
　重力に逆らって、大量の精液がペニスの中を駆け上る。
「あついッ！」
　腸内に放たれた遼のザーメンの温度に、由奈は悲鳴のような声をあげた。
　初めて感じるアヌスだけによる絶頂に、由奈はぞくぞくと体を震わせた。
「あつい、あ、あああ、ごしゅじんさまの……スゴい、スゴいのォ……」
　体内を、熱い粘液で満たされていくような錯覚を感じながら、由奈はがっくりと遼に体重を預けた。

　軽い失神状態にあった由奈の体をベッドに横たえ、遼は、丁寧に縄を解いてやった。
　その白く滑らかな肌に、無残な縄の痕がくっきりと残っている。
　特に、手首の部分は、赤い筋が痛々しい。
　遼は、いとおしむように、由奈の手首にそっと口付けした。
「ン……」
　それがしみたのか、由奈が、小さく声をあげながら目を開ける。
「ご主人様……」
　まだちょっとぼんやりした顔で、由奈は、下から遼の顔を見上げた。
「……」
　何も言わない遼の首に、するりとその白い両腕を絡める。
　そして、ぎゅっと、遼のことを抱きしめた。
「由奈……」
「お、お願いです……」
　少し震えた声で、由奈が言う。
「あとで、どんなお仕置きでも受けますから……しばらく、このままで、いさせてください……」
「……」
「でないと、あたし……ばらばらになっちゃいそうで……」
　それがどういう意味なのかわからないまま、遼は、とりあえず由奈の好きにさせることにした。

「ありがとうございました、ご主人様。これからも、このいやらしいメス奴隷を、ウンと、可愛がってください……」
　地下室を出ていこうとする遼に、由奈が決められた挨拶をする。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ふと、遼はベッドの上に正座をしている由奈に振り返った。
驚いたような顔の由奈と、目が合う。
そして由奈は……くちん、と小さくくしゃみをした。

由奈は、風邪をひいてしまっていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第６章

　遼は、普段、避妊のために基礎体温を計っている体温計で、由奈の熱を見ている。
「ごめんなさい、ごしゅじんさま……」
　妙に幼い調子の声で、ベッドの中の由奈が言った。
「気にするな。奴隷の健康管理は、主人の役目だ」
　意外と高くなってる由奈の体温を確認しながら、遼はぶっきらぼうな口調でそう言う。
「やっぱり熱がある。おとなしく寝てろ」
　そう言いながら、遼は、すでに用意していた洗面器の中の冷水で冷やしたタオルを、由奈の広い額にのせた。
「きもちいい……」
　ぼんやりと、由奈はつぶやく。
　遼は、無言で、由奈のベッドの傍らにイスを運び、座った。
「……いてくださるんですか？　ごしゅじんさま」
「邪魔なら、出てく」
「そんなこと……！」
　言いかけて、由奈はけほけほと咳の発作に襲われた。
「大声出すなよ。喉もやられてるんだから」
　遼が、苦笑いをしながら、水を注いだコップを差し出してやる。
「す、すいません……」
　由奈は上体を起こして、少しずつ、水で喉を潤した。
「あの……邪魔なんてこと、ないですから……できれば、ずっとココにいてください……」
　コップを返しながら、由奈が遼に訴えた。
「分かった」
　短く答えて、遼は、イスに座ったまま、腕を組む。そんな遼の方を見て、由奈は、安心したように毛布の中にもぐりこんだ。

　しばらく眠らせた由奈の汗をふいてやり、おかゆを作り、また眠らせる。
　そして、由奈を起こさないように、そっと店に出かけ、帰宅する。
　一日、二日と、遼の日常は、ひどく静かに過ぎていった。

「ご主人様……」
　二日目の夜中、帰ってきた遼に、由奈は、ぽつんとつぶやいた。
「……なんだ、まだ起きてたのか？」
「昼間寝てたから、目が覚めちゃって……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「……」
　遼は、無言で、ベッドの傍らの椅子に腰を下ろす。
「あのぅ……」
　由奈の言葉に、遼は前髪に半ば隠れた顔を向けた。
「天国って、あると思います？」
「なに？」
　由奈の意外な問いに、遼は思わず不審の声をあげてしまう。
「だから、天国です」
　素直に、由奈は繰り返す。
「……死んだ後のことは、死んだ後で考えるさ」
　答えにもならないことを、遼は言った。
「そう、ですか……」
「どういうつもりで、そんなこと、訊くんだ？」
　そう問い返す遼の方に、由奈は大きな瞳を向けた。
「もし、天国があるなら……お母さん、そっちに行ってるといいなあって……思ったんです」
「お前の、母親？　つまり……」
「あたし、お母さんが病院で死んだとき、そばにいてあげられなかったんです」
　由奈は、透明な悲しさを表情ににじませながら、続ける。
「だから、お母さんが、どんなふうに思いながら死んだか、分からなくて……」
「……」
「お母さんとあたし、あまり、うまくいってなかったんです……。お母さんは、お父さんのところから、男の人と一緒に逃げ出して……。でも、その時には、おなかの中に、あたしがいたんです。……そのせいで、結局、お母さんは男の人とも別れて、一人になっちゃって……」
「それで、辛くあたられたのか？」
「それは……そんなこと、なかったですよ……」
　由奈は隠し事が下手だな、と、遼は声に出さずにつぶやいた。
「……でも、あたし……お母さんが、本当は好きでした」
　ひどくはっきりと、由奈は言った。
「なのに、きちんとそのことを、言えなかったから……そのせいで、お母さんが天国に行けなかったら、どうしようって……あたし……」
　ぽろ、とひとしずくだけ、涙の玉が、由奈の垂れ目からこぼれる。
「……」
　遼は、無言で、由奈の髪を優しく撫でた。
「ごしゅじん、さま……？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「悪いな、由奈」
　驚いたような顔の由奈に、遼は静かな声で語りかける。
「俺は、この通りの男だから……お前を慰めるような言葉は、知らないんだ」
「え……えっと……」
「余計なことは考えずに、寝ろ」
　すっ、と手を引いて、遼は言った。
「俺にできることは、主人としてお前に命令することだけだ。何も考えずに、眠って、風邪を治すんだ」
　由奈は、整理のつかない表情をした後、こっくりと肯いた。

（……まずい、かな……）
　くうくうと、可愛い寝息をたてている由奈の顔を眺めながら、遼はぼんやりと考え込んでいた。
（うまくいっていないわけじゃない……いや、うまく、いきすぎたのか……）
　そんなことを思いながら、遼も、とろとろとまどろみの中に沈んでいく。
（……結花里は、何て言ってたかな……問題は、由奈だけに、あるんじゃないって……）
（……あいつの……うしなわれた……なんだったっけ……？）
　そして、遼も、椅子に座ったままで、眠りについた。

「！」
　朝、はっとして、遼は目を覚ました。
　傍らのベッドに、由奈の姿が無い。
　遼の服のポケットから、鍵を取り出し、外に出る……それも、できないことではないのだ。
　さすがに肝を冷やしながら、遼は立ちあがった。ぐるり、と暗い地下室の中を見回す。
「……ふっ」
　思わず、遼は笑みを漏らしてしまった。部屋のすみにある冷蔵庫を開けて、由奈が中の何かをほおばっている。
「由奈」
「あ……お、おはようございます、ご主人様」
　両手に、きゅうりと魚肉ソーセージを一本ずつ持ったまま、由奈は慌てて冷蔵庫の扉を閉めた。
　今の由奈は、寝巻き代わりに、遼のワイシャツをまとって、いつもは結んでいる髪を解いている。その姿が、遼にはひどく新鮮に見えた。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「食欲は、出たみたいだな」
「は……はい……」
　手に持っているものを背中に隠して、由奈は顔を赤くしてうつむいた。
（やばい、な……）
　遼の表情は、前髪に隠れて、由奈には分からない。
「由奈、もし……」
「はい？」
「もし、いいようだったら、昼、外に出るか？」
「え……外って？」
「ドライブに、連れてってやるよ」
　ふっ、と遼が微笑む。
　しかし、由奈から見えるのは、遼の口元だけだ。その微笑みの温度までは、由奈には伝わらない。
「嫌か？」
「い、いえ、連れてってください！」
　それでも由奈は、元気といってもいいくらいの口調で、そう返事をしていた。

「わあ、かわいい〜」
　いつも通り、髪を左右で結んだ由奈は、思わず声をあげていた。
　久しぶりの、まぶしい日の光の下で、由奈は、着替えの中から遼が選んだ、純白のブラウスとやや長めの赤系のスカートを身にまとっている。どちらも、初日のワンピースと同様、過剰なまでにリボンやフリルで飾られていた。
　すでに、梅雨は終わり、夏になっている。が、丘の上の風は、適度な涼気を運んでいた。
「何だか、ご主人様に似合わないですね……♪」
　地下室では、けしてありえなかったような打ち解けた調子で、由奈は言った。
　その由奈の目の前には、明るいオレンジ色の、旧型フォルクスワーゲン・ビートルがうずくまっている。
「悪かったな」
　遼は、その愛嬌のあるフォルムの車体を軽く叩きながら、苦笑した。
「別に、俺の趣味じゃない。定期的に、足がつかない盗品を回してもらってるだけだ」
「とうひん……って、盗んだものなんですか？　コレ」
「俺が盗んだんじゃないけどな。さ、乗れよ」
　そう言って、助手席側のドアを開けてやる。
　由奈が乗りこみ、きちんとシートベルトをしたのを確認して、遼はビートルをスタートさせた。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「きれい……」
　昼を回ったばかりの太陽の光を、湖面がきらきらと反射している。
　遼の家のある丘が連なる山の中に、その湖はあった。さして大きくなく、観光地として整備されているわけでもないが、逆にそのせいで、景観は悪くない。
　車を無人の駐車場に止めて、その湖をぐるりと巡る遊歩道を、二人は並んで歩いている。他に、人影は無かった。
「大げさだな」
　そう言いながらも、遼は由奈に歩調を合わせてやっていた。
「だって……きれいですよ、この景色……」
「そうだな」
　遼の返事は、そっけない。
「あの、ご主人様……」
「ん？」
「他の人が見たら、あたしたち、どんなふうに見えるでしょうね？」
「どういう意味だ、そりゃ」
「だから……えっと……」
　由奈が、口の中でごにょごにょと何か言う。しかし、遼の耳には届かない。
「他の人が見たら、か……」
　遼は薄く笑って、そっと由奈の肩に手を置いた。
「少し、休むか。ちょっと疲れた」
「はい」
　素直に肯いて、由奈は、遼に導かれるように、湖に向かう形で置かれた木製のベンチに腰掛けた。
　遼は、右隣に座った由奈の肩を、ごく自然に引き寄せた。
「あ……」
　頬を赤く染める由奈の耳に、遼は顔を寄せ、そして、何かをつぶやく。
　はっ、と由奈は大きな目を見開いた。
　見る見るその顔がこわばっていく。
「どうした？　由奈」
　遼が、意地悪く訊く。
「だって、こ、こんなトコで……」
「お前は、自分の立場を、勘違いしてるんじゃないのか？」
　遼は、冷たい口調でそう言った。
「でも……でも、誰かが、もし来たら……」
「見せ付けてやれよ。俺は、平気だ」
「……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

由奈は、長いまつげに涙をため、唇を噛んだ。
しかし、今の由奈には、遼に逆らうことはできない。
「し……失礼、します……」
由奈は、ベンチから腰を上げると、のろのろと遼の軽く開いた脚の間にひざまずいた。そして、白く小さな両手でそっと遼のスラックスの股間の部分をさすりあげる。
「はあぁ……っ」
その、すでに硬度を増しつつある感触にため息をつきながら、由奈は、かつて結花里がしたように、口だけでジッパーを下げた。
そして、そっと、壊れ物を扱うように慎重に、ペニスを外に解放する。日の光の元で見るそれは、地下室で見たときと、なんだか違って見えた。
由奈は、ちらっと左右に視線をやり、そして、半ば勃起した遼のそれを口に含んだ。
「ン……」
さわさわと、わずかな風が髪をなぶる。その度に、由奈はここが戸外なのだということを思い知らされるような気がした。
それでも、奉仕に気を抜くことは許されない。
「ん……んぷ……んン……んむン……」
小さな口を一杯に開いて、口蓋や頬の内側に、熱くたぎりつつある遼の亀頭をこすりつけるように、頭をピストンさせる。
（早く……早く、終わらせなきゃ……）
そんなことを思いながら、由奈は、遼のシャフトに大胆にピンク色の舌をからめ、ちろちろと尿道口を舐めしゃぶった。かと思うと、つるつるとした感触の亀頭の表面に唇を這わせ、たっぷりと唾液で濡らす。
しかし、由奈の焦りとは裏腹に、遼はひどく余裕のある態度である。
「ごひゅじんさまァ……」
由奈はとうとう、はしたないおねだりを口にしていた。
「おねがいれす……早く、早く由奈のお口に、ミルク、下さい……」
遼は、そんな由奈の懇願に何も言わず、歪んだ笑みで答えるだけだ。由奈は、諦めたように、よりいっそう激しく、遼のペニスに奉仕をした。
舌の先端や平、柔らかな裏側まで駆使して、雁首や裏筋、鈴口など、遼の感じる場所を、唾液で濡らしながら、責め続ける。
びく、とその由奈の動きが止まった。
遠くから、声が聞こえたのだ。
まだ子どもの……男の子のものとも、女の子のものともつかない、二人分の歓声。どうやら、仲良くこの湖畔で遊んでいるらしい。
それが、確実にこちらに近付いてくる。
「ご、ごひゅじんさま、おねがい……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　半ばペニスを咥えたまま、何か言おうとした由奈の頭を、遼は無言で自分の腰に押し付けた。
「んンーッ！」
　由奈が、大粒の涙をぽろぽろとあふれさせる。
（見つかっちゃう……見つかっちゃうよォ……ッ！）
　早くこの奉仕を終わらせようと、由奈は必死になって口と舌を使う。
　しかし、間に合わなかった。
　生い茂る緑の間から、一人の少女が現れたのだ。
「きゃっ！」
　高い、まだ小学生くらいのものらしき声が、由奈の耳を打つ。
（あああああああア……）
　由奈は、声に出さずに、絶望に満ちた泣き声をあげていた。
（み、見つかっ、ちゃった……）
　手遅れとは知りながら、どうにか身をよじって逃れようとする由奈の頭を、遼はがっしりと固定している。
「どうしたの、マミちゃん……」
「リュ、リュウくん……」
「あ……！」
　遅れてやってきた少年も、遼と由奈の姿を認め、絶句してしまっている。
　小学校４、５年生くらいの、私服の少年と少女である。少年が捕虫網を握っているところを見ると、二人で昆虫採集にでも来たのかもしれない。もう、学校は夏休みなのだろう。
「どうした？」
　遼は、由奈にではなく、少し離れた場所で茫然と立ち尽くす二人に向かって、声をかけた。
「そこからじゃよく分からないだろう。こっちに来いよ」
「い、いやあァ……」
　泣き顔でそう訴える由奈の頭を、遼はぐらぐらとゆすぶった。
「う、うぶっ……ううぅ……」
　恥ずかしさと惨めさに、由奈の頭は、かあっと熱くなり、そして、胸にはぞわぞわと被虐の快感が湧き上がっていく。
（あたし……あたし、感じてる……）
　年端もいかない子どもの前で、ペニスを咥え、しかもそれを目撃されて、倒錯的な快感を覚えている……。そんな自分自身が、由奈には信じられなかった。
　しかし、あの地下室で奉仕をしているとき以上に、胸はざわめき、股間は早くも熱い蜜を分泌しているのだ。
（もう……ダメ……）

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

心地よい諦めの気持ちが、体の奥から湧き起こってくる。
いつしか、由奈は、遼に頭を押さえられることなく、自発的にフェラチオを再開していた。
「さっきのおねだりは、どうした？」
わずかに昂ぶった声で、遼が言う。
（ごしゅじんさまも、コーフンしてる……）
ぼんやりとそんなことを考えながら、由奈は亀頭を口に含んだまま、遼の顔を上目遣いに見つめた。
「ごひゅじんさま……お口に、ごひゅじんさまのミルク、ください……」
熱がぶり返したような口調でそんなことを言いながら、ちらりと由奈が横を向くと、真っ赤な顔をした男の子と女の子が、まるで石になったように動かずに、じっとこちらを見ている。いや、少しずつだが、こちらに近付いているようだ。
おそらく、女性が男性自身を口で愛撫するなどということは、知らなかったのだろう。二人とも、目の前で起こっていることが、一体いかなる行為なのか、完全に理解しきれていない様子である。
それでも、性的な行為であることは、充分すぎるほど伝わっていた。少年と少女は、頬を赤く染め、まだ薄い胸を上下させながら、遼に淫らな奉仕を続けている由奈を見つめている。
と、遼は、左手で由奈の頭を押さえ、その口から唾液にまみれたペニスを引き抜いた。
「口を開けろ……！」
そう言いながら、右手で自らのペニスをしごき上げる。
言われるまま、口を開け、可愛いピンク色の舌まで突き出した由奈の顔に、遼は大量の精をぶちまけた。
「んア……！」
ほぼ直線を描いて飛ぶ、勢いのあるスペルマが、由奈の顔を汚し、舌の上にはじけ、せいいっぱい開かれた口の中に入り込んでいく。
「あ、あああ、あァ……」
うっとりとしたような声を漏らす由奈の口に、遼は再びペニスをねじこんだ。由奈は、ふンふンと鼻をならしながらも、口内に溢れた精液をすすり飲むとともに、射精直後の敏感なペニスに、ねっとりと舌をからめる。
「スゴい……」
まるで、自分が射精してしまったみたいに、はァはァと息をつきながら、少年がつぶやいた。
「すごいのはこれからさ」
由奈の顔に付着した白濁液を指で集め、それをペニスと交互に由奈にしゃぶらせながら、遼が言った。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「親がセックスしてるとこ、見たことあるか？」
　突然の遼の問いに、少年と少女はふるふると首を横に振った。
「じゃあ、ビデオか本では？」
「……ビデオなら……」
　また首を振る少女の傍らで、少年が恥ずかしそうにつぶやく。
「……リュウくんのえっち」
「しょ、しょうがないよ。タッくんが、無理やり見せンだもん……」
　なじるように言う少女に、少年が小さな声で言い訳した。
「生で、見せてやるよ。そっちのコは、セックス見るのも初めてみたいだしな」
　遼の言葉に、由奈の動きが止まる。それは、二人の子どもも同じだ。
「脱げ」
　動きの止まった人形に、再び命を吹きこむ魔術師のように、遼が命じる。
「……下だけでいい」
　遼の言葉に、由奈はぎくしゃくと立ちあがった。そして、ふりふりのスカートと、そのスカートに比べるとあっけないほどシンプルなデザインのショーツを、じれったくなるほど、ゆっくりと脱ぐ。
「手で隠すなよ……」
　まさに今、そうしようとしていた由奈の手が、びくっと止まった。
　これ以上はないというくらいに顔を赤く染めて、由奈がうつむく。
「わァ……」
　少年が、思わず声をあげた。
　由奈の白く小さなお尻が、初夏の太陽の光にさらされている。白のブラウスをまだ身につけているせいか、由奈の幼い顔のせいか、妙に明るいエロティシズムを感じさせる風景だ。
　遼は、そんな由奈の左腕を、左手でつかんだ。
　そのまま、ぐい、と引き寄せる。自然と、由奈は遼に背を向ける形で、その膝の間に立ち尽くす形になった。つまり、子どもたちに“前”を見せることになる。
「くッ……」
　由奈は、子どもたちから目をそらすように、横を向いた。遼の命令のために、その、淡く体毛が生えただけの恥丘を手で隠すことはできない。恥毛が薄いために、かすかに肉襞をのぞかせたスリットまで、さらしているはずだ。
　たとえ、目を閉じていても、子どもたちが自分のその部分に注目しているのが、由奈にも分かる。
「あッ！」
　由奈は、うろたえた声をあげた。遼が、後から、脚の間を通して、右手で由奈の靡粘膜に触れたのだ。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

遼が指を動かすと、くちゅくちゅという、すっかり潤った音がその場にいる全員の耳に届いた。
「あ、ああン……んふ……ふあア……」
遼の中指がスリットの奥をえぐり、フードに覆われた敏感な肉芽をつつくように刺激する。由奈は、立っていられないくらいに、足をかくかくと震わせてしまった。
「すっかり濡れてるな……」
「い、いやです……ッ」
消え入りたげな声で、由奈が言う。
「つまり、準備ＯＫってことだ」
「きゃあア！」
いきなり、遼は由奈の体を後からすくいあげた。ベンチに座ったままで、由奈の両膝の裏に手を差し入れ、まるで、父親が幼女に排尿させるような、屈辱的なポーズをとらせる。
「イヤ、イヤ、イヤ、イヤあああああ！」
遼の腕の中で、由奈がじたばたともがく。しかし、遼はびくともしない。
遼は、由奈の小さな体を抱えあげ、濡れ光っている秘部に、すでに力を取り戻しているペニスをこすりつけた。
「あ、ああッ……ン……あ……」
たったそれだけのことで、羞恥に暴れていた由奈の体から、くたくたと力が抜けていく。
「なんか、こわい……」
少女は、由奈のアソコを狙うその肉の凶器に、声をあげていた。そして、少年の服のすそをぎゅっとつかむ。
「よく見とけよ。これがセックスだ」
そんなことを言いながら、遼はゆっくりと由奈の体を降ろしていった。
「ふわ、あ、ああ、ああア……ッ！」
ずりずりと、充分に愛液を分泌した靡肉をかきわけるようにペニスが侵入してくる感覚に、由奈が声をあげる。
「はあああアアア……」
そして、自らの体内にその全てが収まったとき、ひどく満足そうなため息を漏らした。
「動かすぞ」
遼の宣言に、由奈はかくかくと、壊れた人形のように肯く。
ゆっくりと、遼は由奈の体を上下させ、抽送を始めた。
「あっ、あっ、あっ、あっ、あっ、あっ……」
雁首が、肉ヒダをえぐるたびに、由奈は短い悲鳴にも似た媚声をあげる。
由奈のそこは、遼のスラックスを濡らすほどに愛液をあふれさせ、ひっきりなしにぐちゅぐちゅという淫猥な音をあげた。
「あ、いや、いやァ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

その音が恥ずかしいのか、それとも昂ぶる快感のためか、由奈がいやいやをするように首を振る。
しかし、遼は容赦なく、由奈の腰をピストンさせた。
その動きに引きこまれるように、幼い少年と少女は、しきりに唾を飲みこみながら、ベンチに近づいてしまう。
「あ、あああアッ！　も、もう、もう……ッ！」
由奈が、あっけなく絶頂を迎えようとする。
と、遼は意地悪く動きを止めた。
「い、いやあ、やめないで、やめないでェ……ッ！」
涙までこぼしながら、由奈はあられもない声で訴える。
しかし、遼はそのペニスを由奈のそこから引き抜いてしまった。それは、ぬらぬらと粘液に濡れて光っている。
「いっ、いやあ〜ん。ごしゅじんさま、ひどいィ……」
由奈が、泣き声に似た声をあげる。
「疲れた」
さして疲れた様子など見せずに、遼は由奈を地面に下ろした。
「続けたければ、自分でしろ」
そんなことを言いながらも、まるで誘うように、由奈の体を半回転させて向かい合わせになる。
わずかな逡巡の後、由奈はこっくりと肯いて、遼の座るベンチに、まだ靴をはいたままの両足を乗せた。よろけそうになるのを、遼の両肩に小さな両手を乗せて、バランスをとる。
そして、まるで和式の便座にまたがるようなかっこうで、Ｍの字に足を開き、腰を下ろしていった。
かたく反りかえった男根と、蜜をたたえた柔らかい女陰が、再会する。
「うううッ……」
背後から感じられる、男の子の荒い息使いと、女の子のおののきに、由奈の羞恥心が燃えあがる。快楽の虜となり、自ら情けない姿勢をとりながらも、子どもたちの視線を無視することはできないのだ。
（いっそ……うんと感じて、忘れちゃいたい……）
そんなことを考えながら、由奈は、すでに熱く潤んだ牝の器官で、遼の剛直を貪欲に咥えこんでいった。
「ンはああッ！」
遼の肩をつかんだまま、由奈は、背筋を駆け上る快美感に体をのけぞらせた。遼が、その体を両腕で支えてやる。
「はあッ……んあ……あう、う、うううううう……ッ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

しばらく動きを止めていた由奈は、ゆっくりと、腰を使い始めた。
そして、自ら、快楽に没頭しようと、次第に腰の動きを速めていく。
抽送のたびに、由奈のピンク色のひだひだが、ペニスに絡みつくようにめくりあがり、膣口の中に埋没していく。
「どうだ、セックス気持ちいいか？」
子どもが聞いているのを意識してか、ひどくあけすけな言葉で、遼が由奈を責めた。
「きッ……きもちイイ……きもちイイ……せっくす、きもちイイの……」
その幼い肢体からは考えられないような大胆な体位で腰を振りながら、由奈が答える。
遼は、そんな由奈の体を左手で抱きとめ、右手だけで器用にブラウスのボタンを外していった。
ふるん、と、フロントホックのブラに包まれた豊かな乳房が、外界に解放される。
遼がホックを外すと、そのアンバランスなほどの巨乳が、皆の目にさらされた。
「うわ、おっきい……」
思わずつぶやく少年の声を、由奈はぼんやりと聞きながら、腰を動かし続ける。
「はァん、はァん、んうッ、んはああ……！」
狂ったように腰を使う由奈の動きにあわせて、乳房がたぷたぷと上下にゆれた。
遼は、それをじっくりと目で楽しんだ後、乳房が大きいせいでことさら小さく見える桜色の乳首を、くりくりと指で転がし、さらには挟んだ指でしごくように刺激する。
「んあ、あ、そ、それ……ッ！」
切なげに、由奈が形のいい眉をたわめた。
「あはッ……ふあ……それ、それ、イイですゥ……」
ようやく動きを休めた由奈の上気した顔に、遼は顔を寄せた。
「んふっ……」
嬉しげに微笑んで、由奈は遼の唇にむしゃぶりついた。
「あ……キス、してる……」
少女が、不思議そうにつぶやいた。彼女の今までの常識では、キスとは、少なくともこのような場面で行われるような営みではなかったのだろう。
しかし、淫らな音を立てながら舌を絡ませあい、唾液を交換したとしても、キスはキスだ。少女は、ちょっと混乱しているようだった。
「ぷはっ……」
息が苦しくなるくらいディープキスを交わしたあとで、由奈はようやく口を離した。
空ろな、それでいながら、ひどく幸せそうな顔で、遼の顔をごく近くから見つめている。
遼は、それに応えるように、下から腰を突き上げた。
「ンあああああああッ！」
その動きで、由奈は軽く達してしまったらしい。
ぷるぷると震える由奈の小さな体を、遼は容赦なく責め続ける。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「んあ、あひッ！　ま、また、またイっちゃう！　イク、イク、イクううぅ〜ッ！」
　絶頂から、さらに高い絶頂へと次々と舞い上げられる由奈を腕に抱きながら、遼の表情も切羽詰ってきた。
「くッ……！」
　短く声をあげ、遼は由奈をきつく抱き締めた。由奈も、その細い腕で、しっかりと遼にしがみつく。
「イ、イっちゃうううううううううううううううううう〜ッッッ!!」
　遼のペニスの先端から、熱い精液が、何度も何度もほとばしる。
　体の中と外の両方で遼を感じながら、初夏の空の下、由奈は失神してしまっていた。
　間近で初めて目にした性交に圧倒されたのか、少年と少女は、ぺたん、と地面に座り込んでしまっている。
　もう、この二人も、昨日までの二人ではいられなくなるだろう。
　そんなことを思ったのか、遼は、聖者を堕落させることに成功した悪魔のように、満足げな笑みを浮かべていた。

「見られちゃった……」
　帰りの車の中、由奈は、空ろな表情で、ぽつん、ぽつんと、そんな言葉を繰り返した。
「見られちゃった……どうしよう……見られ、ちゃった……」
　遼は、無言でハンドルを握っている。由奈を叱責することも、慰めることも、しない。
　太陽がようやく目に見えて傾いてきた時刻に、ビートルは、遼の家の敷地に入った。
「？」
　遼の、前髪に隠れた眉がしかめられる。そこに、黒い高級車を従えて、見覚えのある男が立っていたのだ。
　槙本――由奈の父親である。
　そのことに、由奈も気づいたらしい。その幼げな顔に、表情が戻ってくる。
　不安と、恐れの表情だ。
「どうしたんです？」
　車を降りて、遼は訊いた。
「仕事は、今日で終わりだ」
　槙本が、あの低くさびた声で、そう言った。
「……なぜです？　期間は、一ヶ月のはずでしょう。まだ一週間はある」
　遼が、全くひるんだ様子を見せず、反駁する。
「事情が変わったのだよ」
　槙本の声の調子は、変わらない。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

「今まで、ご苦労だった。無論、報酬は全額支払う」
「……調教は、まだ終わっていない。今連れてくと、厄介なことになりますよ」
　前髪に隠れた遼の切れ長の目が、いささか険悪な光を放った。
「それは、君が心配することではない」
「そうは、いかないでしょう。俺にも、一応、責任がある。あと、この仕事を続けていく上での信用もね」
「……」
　ちら、と槙本は、黒塗りの自らの車に目をやった。車内にいた黒ずくめの男が、うっそりと外に出てくる。暴力を生業とするもの特有の雰囲気が、そのごつい体の周辺に漂っていた。
　男が、意味ありげに、懐に右手を入れる。
　しかし、遼はひるんだ様子を見せない。
　じりじりと、その場の緊張が高まっていく。
「あたし、行きます」
　と、その緊張が、意外な方向から破られた。
「お父さん……あたし、行くから……」
　由奈が、わずかに震えてはいるものの、意外とはっきりした声で、繰り返した。
「ほう」
　満足そうに、槙本が笑みの形に顔を歪める。
「さすがは結城さんだ。成果は出ているようだな」
「……」
　遼は、何も答えなかった。

　丘のふもとへと走る車から、由奈は、一度だけ、ガラス越しに後を振り向いた。
　すでに、遼の姿はどこにもない。
（ご主人様が、あたしのこと、見送りなんてするわけないじゃない……）
　由奈は、くすりと哀しそうに笑った。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

第７章

　控えめなノックに対する答えを聞いて、由奈は、その部屋に入った。
「失礼します……」
　声が震えないように、努力する。
　街からかなり離れた場所にある別荘群。その外れにある、かなり大きめの別荘の中の、奥の一室である。
　そろそろ避暑のシーズンであるが、周囲の別荘は、みな無人らしい。窓を通して、高原の静けさが染み入ってきそうである。
「槙本の娘にしては、可愛い顔をしてるじゃないか」
　その静寂の中、男の声が響いた。バスローブをはおった、肥満した壮年の男が、部屋の中央にあるソファーに腰掛けている。
「槙本由奈です。よろしくお願いします」
　指定通り、学校の制服をまとった由奈が、深々と頭を下げるのを、男はねっとりとした視線で眺めていた。
　由奈は、男が佐久間という名前で、自分の父親と仕事上、深い関係を有している、ということくらいしか知らされていない。そして、それ以上を知りたいとは思わなかった。
「こっちに来るんだ」
　佐久間が、そう言いながら立ちあがる。
「はい」
　素直に返事をして、由奈が近付くと、佐久間はバスローブの前をはだけた。大きく膨れた腹の下に、グロテスクな器官が、だらんと垂れ下がっている。
　何も言われないうちから、由奈は、佐久間の前にひざまずいた。
「ご奉仕、いたします……」
　そう言いながら、由奈は佐久間のペニスを両手で捧げ持ち、初めにそっと口付けした。桜色の可憐な唇と、赤黒くエラを張った亀頭のコントラストに、佐久間は思わず声をもらしてしまう。
「あむ……」
　すでに血液を充填しつつあるペニスを口内に入れながら、由奈は、上目遣いに佐久間の顔を見つめた。由奈の小さな口の中で、きつい牡の匂いを放つ男根が、容積を増していく。
「んふ……んん……うン……」
　小さく鼻を鳴らしながら、少し顔をねじるようにして、由奈は頭を前後させる。そのあどけない顔が醜悪な器官に一心に奉仕する姿は、無残なほどにエロチックだ。
　由奈は、シャフトに舌を絡め、唇で優しく締め上げながら、ちらちらと佐久間の顔に媚を含んだ視線を送る。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「うお……おっ……」
　幼げな顔の、セーラー服の夏服の少女が、風俗嬢顔負けの技巧を駆使してフェラチオする様に、佐久間は不覚にも声をあげてしまっていた。
「どうですか……？　由奈のご奉仕、気持ちいいですか……？」
　可愛いピンク色の舌で、静脈の浮き出たシャフトの裏筋をしゃぶり、小さな手で唾液に濡れた亀頭部分をなでさすりながら、由奈が甘い声で訊く。
「おお……子どものくせに、いやらしいヤツだな……」
　満足そうな薄ら笑いを下卑た顔に浮かべながら、佐久間が言う。由奈は、恥じ入る初心な乙女のように頬を染めながら、佐久間の股間に顔をうずめ、その浅黒い陰嚢を舐めしゃぶった。その間も、右手はすりすりと竿の部分を優しくしごき、左手でたるんだ尻や毛むくじゃらの太腿をなでさする。
　佐久間は、バスローブを脱ぎ捨て、かなりの努力をして、腰を引いた。
「あン……」
　由奈が、名残惜しそうな声をあげる。
「つ、次は、尻の穴を舐めるんだ」
　犬のように荒い息をつきながら、佐久間は由奈に命じた。その股間のモノは、年に似合わぬ勢いで上を向いている。
「はい……」
　由奈は、膝で歩いて、佐久間の背後に回りこんだ。
　そして、白い手で尻たぶを割り開き、その不潔な器官に舌を伸ばす。
「おおおッ……！」
　柔らかい舌が肛門に侵入する感覚に、佐久間は大きく声をあげた。
　由奈は、佐久間の肛門に舌をねじこむようにしながら、両手を前に回し、佐久間のペニスを握る。そして、右手で巧みにシャフトをしごきあげながら、左手で亀頭を撫でさする。
「う、うおお……おお、おおっ……」
　腰が砕けそうな快感に、佐久間はしきりに声をあげた。
　ふンふンという、由奈の苦しげな鼻息までが、佐久間の下半身を絶妙に刺激する。
　このまま出してしまうのはもったいない、などと思いながらも、佐久間は由奈の奉仕を止めることができない。
「うおオっ！」
　ちゅううっ、と由奈の唇が肛門を吸引した拍子に、佐久間は高校生の餓鬼のように欲望に身をゆだねきってしまっていた。
　どぷっ！　と溢れかえる精液が由奈の小さな手を汚し、フローリングの床に飛び散る。
　脚を震わせながらも、座り込んでしまわなかったのは、佐久間の意地によるものだった。
「はァ……」
　一仕事終えた由奈は、ぺたん、と腰を下ろしてしまった。そして、自分の手に付着した

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

熱い白濁液を、じっと見つめる。
「ン……」
　由奈は、その汚穢な体液を、ぺろぺろと無心な顔で舐めとった。
　さらには、犬のように四つん這いになって、床のこぼれた精液を舐め取っていく。
　短めのフレアスカートに隠れたお尻を高く上げ、無意識にふりふりと小さく振りながら床を舐める由奈を、佐久間が欲望に血走った目で見つめている。
「きゃン！」
　突然、堅い床の上に乱暴に仰向けに組み敷かれ、由奈は可愛い悲鳴をあげた。
　下品に歪んだ佐久間の唇からは、だらしなく涎がこぼれている。その股間のモノは、放ったばかりだというのに、すでに回復しかけていた。
「ぐひひひひっ」
　すでに自己のコントロールを失った佐久間は、そんな声をあげながら、セーラー服の胸元を、その太い指で強引に開いた。
「いやああン！」
　布地の引き裂かれる音に、由奈の子どものような声の悲鳴が重なる。
　レモンイエローの、可愛いデザインのブラに包まれた意外なほどの巨乳に、佐久間は物も言わずにむしゃぶりついた。
「あ、あああッ！」
　分厚い舌で、ねばっこい唾液を下着に塗りたくられ、由奈が声をあげる。
　かまわず、佐久間は由奈の丸い乳房を、ブラの上から両手でぐにぐにと揉みしだいた。
　乱暴な愛撫にブラのカップがずれ、弾力に富んだ双乳と、その頂点にある桜色の乳首があらわになる。
　佐久間は、その乳首にきつく噛み付いていた。
「ひヤあああああン！」
　佐久間の巨体の下で、可憐と言ってもいいくらいに小さな由奈の体が、痛みに跳ねる。
　苦痛と、そして、どうしても感じてしまう快美感に、由奈は空しく身をよじらせた。しかしその動きは、佐久間の興奮を昂ぶらせることにしかならない。
　尖った乳首をつまみ、くりくりといらいながら、佐久間は脂ぎった毛の薄い頭を下にずらしていった。
　そして、張りのある太腿を、頭の動きだけで割り開き、紺色のフレアスカートの中に顔をねじ込む。
「あひッ！」
　敏感な肉の突起を隠した秘裂の上部に、ショーツ越しに鼻面を押し当てられ、由奈は短く悲鳴をあげた。
　佐久間は、なおも左手で由奈の豊かな胸を弄びながら、右手をショーツにかける。
「ン……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

しばしの逡巡の後、汚辱に顔を背けながらも、由奈は、腰を浮かして協力した。
ブラと同じ色のショーツが、まだ白のソックスをはいたままの由奈の右の足首に、くしゃっとまとわりつく。
佐久間は、由奈の腰を抱え、大きく持ち上げた。俗に「まんぐりがえし」などと呼ばれる格好である。
「いやア……は、恥ずかしい、です……っ」
由奈の弱々しい抗議に耳も貸さず、佐久間は由奈のクレヴァスに粘液質の視線を浴びせた。
犯罪的なまでに薄く繊細な恥毛が、分泌した汗と愛液で、ぷっくりとした恥丘にはりついている。佐久間は、柄にもなく溜息をもらしそうになった。
しかし、実際に佐久間の口から発せられたのは、獣じみた唸り声である。
佐久間は、果実にかじりつく豚のような勢いで、由奈の秘部に口を付けた。
「あうン！　ン、んうううううッ！」
佐久間の舌が由奈のほころびかけたスリットをえぐる。太い舌を強引にねじこまれ、肉ヒダごと愛液がすすられる感覚に、由奈はぞくぞくと体を震わせてしまう。
その童顔に似合わない感度のよさを見せる由奈に、佐久間はいっそう熱を入れてクンニリングスを続ける。普段であれば、まったく前戯無しで女を犯すこともしばしばの佐久間だが、由奈の反応のよさに、すっかり気をよくしてしまっていたのだ。
「ひあああああアアアんッ！」
クリトリスを吸引されて、高い嬌声をあげながら脚をぱたぱたと空しく動かす姿が、妙に愛らしい。
佐久間は、その突き出た腹で由奈の逆さまの背中を支え、アソコを舐めしゃぶりながら、両手を乳房に伸ばした。
佐久間の大きな手にさえも余る、柔らかく弾力のある胸を揉みしだき、堅く尖った乳首をひねりあげる。
由奈は、あられもない声をあげながら、いやいやをするように首を振った。
「欲しいか、由奈？」
愛液でべっとりと濡れた口で、佐久間が訊く。
「ほ、ほしい……ほしいです……」
はァはァと可愛い喘ぎ声をあげながら、由奈が目を潤ませながら訴える。
「もっとはっきり言え！」
「ああッ……オ、オチンチン、オチンチンを、入れてほしいです……ッ！」
「入れてやる！　入れてやるぞ！」
佐久間は余裕のない調子でそう声をあげ、由奈の両足首を持って、脚をＶ字に開いた。
「うおおおおおッ！」
そして、ぷにぷにとした感触の陰唇に、今やすっかり勢いを取り戻したペニスを押し当

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

て、一気に侵入する。
「ンはあああああああああああアッ！」
　おぞましく、どす黒い快感に、由奈は子どものような高い声をあげた。
　由奈の意思に関係なく、その膣壁は絶妙な収縮を見せ、佐久間の欲棒を優しい力で締め上げる。
　しばらく、その淫靡な動きを堪能した後、佐久間はぐいぐいと抽送を始めた。
「あ、あひッ！　ひッ！　ひあああッ！」
　まるで、レイプにあったかのように、乱れたセーラー服をまとったままの美少女が、自分の体の下で快感に悶える様に、佐久間は我を忘れる思いだった。
　力ずくで犯されて人形のように無反応になった素人娘とも、羞恥心のないスレた女子高生とも、ましてやただの娼婦とも違う。
「感じるか、この淫乱め！」
「か、感じるぅ……オチンチン、気持ちいいですぅ……ッ！」
　恥じらいながらも、猥語を口走ってしまう由奈の媚態に、佐久間はますます腰の動きを速くした。
「んッ！　あああ！　あひいいいいッ！」
　由奈は、佐久間のペニスをより深く迎え入れようと、幼げな腰をはしたなくせり上げる。佐久間は、その由奈の腰を両手で持ち、ぐりぐりと大きく回すようにした。
「ンわあああああああああああああッ！　す、すごい、ですう……ッ！」
　圧倒的な快感に翻弄され、由奈はその小さな体をおののかせた。
「イ、イク、由奈、イキますう……ッ！」
　絶頂を間近に控えたアソコはますます佐久間のペニスを咥えこみ、二度目の射精に追いこもうと蠢動する。
「出してやるぞッ！」
　佐久間が、夢中になって叫ぶ。
「ああッ！　出してえ！　由奈のお口に、いっぱいミルク飲ませて下さいッ！」
　由奈は、びくびくと体を震わせながら、感極まった声で訴えた。
「うおおおおおおおおおおッ！」
　その鈍重そうな体からは考えられないような素早さで、佐久間は、由奈の中からペニスを引きぬいた。
「ンああ、あああッ！　あああアアア……！」
　その動きによって、由奈は絶頂に追い込まれた。
　ひくひくと震える可憐な唇に、愛液でべっとりと濡れた佐久間のペニスがねじこまれる。
「んぶッ！」
　その瞬間に、佐久間も限界を迎えていた。
「うああ、あ、うおあああああっ」

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

何事かをわめき散らしながら、由奈の小さな口の中に、大量の精液を注ぎこむ。
その年齢からは考えられない量と勢いの青臭い粘液が、由奈の喉奥を叩き、口腔を満たしていく。

それが、由奈の限界だった。

「エええええッ！」
苦しげに体を丸め、由奈は激しくえずいていた。
肘で、ぐったりとなった体を起こし、その口から、生臭い黄色がかったスペルマを床に吐き出す。
「けほっ、けほ……うえッ……ぐ……ンええッ……」
涎と、胃液と、鼻水と、そして今までこらえていた涙が、由奈の顔をどろどろに汚す。
膣内射精を避けようとしていた最後の理性も、由奈の頭からは消え去っていた。もはや、自分が何故こんな辛い目にあっているのか、よく分からない。ただ、言いようのない苦痛と悲しみに、止めどもなく熱い涙が溢れる。
佐久間は、そんな由奈の傍らに、のろのろと立ちあがり、凄まじく歪んだ笑みを、その顔に浮かべた。
そして、無言で部屋の片隅の戸棚を開き、一本の鞭を取り出す。革を編んで作られた、本格的な拷問用の一本鞭である。
その鞭を、佐久間は、何の遠慮もなく由奈の背中に振り下ろした。
「ンぶっ！」
由奈は、体を支えきれず、自らが吐き出した汚濁に顔を突っ伏してしまった。
セーラー服の背中が大きく裂け、むき出しになった肌にじわじわと血がにじんでいるのが見える。
二度、三度、四度、五度……ほとんど間をおかずに、佐久間が由奈の体を鞭打ちする。
「ンぎッ！　いッ！　いあッ！　んぐゥ！　ひぎッ！」
由奈は、苦痛に食いしばった歯の間から、短い悲鳴をあげ続ける。その悲鳴に、骨にまで響きそうな鋭い鞭の音が重なった。
佐久間は、その股間のものを恐ろしいほどに勃起させ、強烈な笑みを浮かべたまま、鞭を使い続ける。
由奈が快感を訴えていたときの何倍もの興奮が、今、佐久間の体を焼いていた
すでに、由奈のまとっていたセーラー服は、原形をとどめない布切れと化している。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　由奈は、自らの吐瀉物に顔を押しつけるようにして、胎児の姿勢でうつぶせになっていた。
　精液を飲みこめなかった詫びの言葉を言うどころか、呼吸さえもままならない。
（ころされ……ちゃう……の……？）
　もはや痛みを痛みとして感じず、断続的な衝撃と閃光に意識を途切れさせながら、由奈はぼんやりと思った。
（ごしゅじん……さま……）
　目蓋の裏に、仏頂面の遼の姿が、浮かぶ。
（どうせさいごなら……もっと、たのしそうなかお……してほしかったな……）
　――いつしか、由奈は、鞭から解放されていた。
「あれ……？」
　恐る恐る顔を上げ、周囲を見まわす。
　そこに、先ほどの幻と同じ、苦い顔の遼がいた。
「え……？」
　黒いシャツにブラックジーンズといういでたちの遼が、佐久間の持つ鞭の中ほどを、右手で無造作に掴んでいる。
　由奈は、その現実を受け止めきれず、ぼんやりとその風景を眺めていた。
「なんだ、お前は……」
　最高の娯楽を中断させられた佐久間が、物騒な声で遼に言う。「西の組織」でそれなりの地位にあるだけあって、全裸であるというのに、どこか威厳を感じさせる声だ。
「そこの奴隷の製造責任者ですよ」
　遼は、面白くもなさそうに言った。
「たかが色事師風情が、何の用だ？」
「入金が確認されてないんで、商品を引き取りに来たんですがね」
　淡々と、遼は告げた。
「金なら、槙本が払ったはずだろう」
「その槙本さんの口座ですが、組織に押さえられたようなんですよ。裏切りが、発覚したためにね」
「なに……？」
　佐久間の顔色が、変わる。
「確かめますか？」
　ひょい、と遼は胸ポケットの携帯電話を左手で放った。思わずそれを受け取ろうとした佐久間の手から鞭がこぼれ落ちる。それを遼がくるくると魔法のような手つきで手繰り寄せ、自らの右手に収めた。
　佐久間は、電話と、鞭とを交互に睨みつけ、そしてどこかの番号をプッシュし始めた。
　そんな佐久間から視線を外し、遼が由奈に歩み寄る。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「大丈夫か、由奈」
　まだ空ろな表情の由奈の大きな両目から、再び涙が溢れた。
「ごしゅじんさま……あ、あたし……」
　遼は、何を言っていいか分からない様子の由奈の体をそっと立たせ、抱き寄せた。
「……ひでえ傷だな」
　そして、由奈の背中を確認し、苦りきった口調でつぶやく。
　一方佐久間は、電話口に向かい、何事かをわめいていた。
　どうやら、槙本の資金を当てにしていた大きな事業が、幾つか破綻したらしい。そのたるんだ頬肉が、ぶるぶると震えている。
「き、貴様が……」
　佐久間は、遼に物騒な声を浴びせかけた。
「貴様が、槙本を密告したのか？」
　ちら、と遼は佐久間に視線をやった後、由奈の顔を見つめ、言った。
「悪いな、由奈。あのおっさんの言ったとおりだ」
「わ、儂をコケにッ！」
　佐久間の声は、あとはきちんとした言葉にならない。獣のような唸り声をあげながら、部屋の端の机に飛びつき、引出しをあける。
　鞭を持つ遼の右手が一閃した。
「げっ！」
　鋭い音ともに、佐久間の右手から、取り出したばかりの拳銃が弾き飛ばされた。
　佐久間は、鞭で打たれた右の手首を左手で押さえた。その指の隙間から、どくどくと大量の血がこぼれおちる。
「半端な技術で、こんな大げさな鞭を使うもんじゃない」
　遼は、努めて抑えた声で、続けた。
「場所が悪ければ、太い血管を破ることだってある」
「い……医者を……」
　貧血を起こしたのか、床にへたり込みながら、佐久間が声を上げる。
「甘えるな」
　唾でも吐き捨てるようにそう言って、遼は、まだ足もとのおぼつかない由奈を、背中の傷に注意しながら抱え上げた。
「あ……」
　小さく声をあげた由奈が、その身を遼の胸に預ける。
　遼は、佐久間に一瞥もくれずに、部屋を後にした。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「お疲れ」
　一見してチンピラと分かる若い男の額に拳銃を突き付けた乾が、部屋を出た遼に声をかけた。
　別荘の警備を担当していたその男は、顔にいくつか痣を作った上に、後手に縛られている。乾にどのような目にあわされたのか、もはや抵抗する気力もなさそうだ。
「悪いな、つきあってもらって」
　遼が、乾に言う。
「いいさ。槙本から貰うはずだった報酬をフイにした詫びだ」
　いつになく神妙な顔の遼に、乾は、その爬虫類っぽい薄い唇に、笑みを浮かべて見せて、続けた。
「お前さんをここに案内するくらいじゃ、お釣りが来るぜ」
「……」
「……だが、今までだんまりを続けてた件については、別計算だぜ」
　そう言いながら、見張りのチンピラに銃で狙いをつけつつ、乾が玄関まで後ずさる。
「分かってるよ」
　遼は諦めたようにそう言い、自分と乾のために、佐久間の別荘のドアを開けた。

「しみるけど、ガマンしろよ」
　自分の胸までしかない由奈の体を抱きとめながら、遼はシャワーのコックをひねった。
「んく……」
　やはり、傷にしみたのか、遼の胸に回した由奈の腕に、力がこもる。
　屋敷に戻った二人は、今、全裸になって、抱き合うようにしてシャワーを浴びている。場所は、遼の部屋の備え付けのバスルームである。遼の屋敷は、もともとホテルか何かに使われていたのか、主要な部屋一つ一つに、小さなユニット型のバスルームが備わっている。
「雑菌が入るといけないからな」
　遼の言葉に、由奈はこっくりとうなずく。
　遼は、まるで小さな娘に父親がしてやるように、タオルで由奈の顔をぬぐってやった。由奈は、ほんわかとした表情で、されるがままだ。
　そして、乾いた血と汗に汚れた由奈の背中を、これ以上はないというくらい、優しく洗う。
「うン……」
　痛みに、由奈が軽く身をよじる。その度に、遼は、何かを詫びるように、由奈の体に軽くキスをした。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　しばらくそうした後、遼は、由奈の全身を、バスタオルで丁寧に拭いた。傷だらけの背中には、そっとタオルで叩くようにして水気を取った後で、傷薬を塗る。
「ごしゅじんさま……」
　由奈は、そのつぶらな瞳を、遼の顔に向けた。
「？」
「はみがき、したいです……」
「新しい歯ブラシが、洗面台の下に入ってる」
　そう言い残して、遼は、自分の部屋に戻った。
　そして、寝室の中央にあるベッドに横たわる。
　ドア一枚隔てたユニットバスから、かなり長い歯磨きの音に続いて、由奈が何度も何度もうがいをする音が聞こえた。
　からからというその音が、突然、けほけほと咳き込む音によって中断される。
「おいおい、大丈夫か？」
　苦笑しながら遼が覗くと、由奈は、バスタオルをまとっただけの格好で、洗面台につっぷすようにしてしきりに咳き込んでいた。どうやら、うがいをしていて、気管に水が入ってしまったらしい。
「ご主人様、あたし……」
　自分を見つめる遼に気付いて、由奈が顔を上げた。その可愛い垂れ目が、涙で潤んでいる。
　遼は、何も言わずに、由奈を抱き寄せ、その桜色の唇に唇を重ねた。
「あン……」
　遼の舌が口腔に侵入すると、おずおずといった感じで、舌をからめてくる。だが、何かひどく臆病な動きだ。
　しばらくして、遼は口を離した。細い唾液の糸が、一瞬、二人をつなぐ。
「……歯磨きの味しか、しないぜ」
　そんな遼の言葉に、由奈は一瞬きょとんとした表情を見せ、そして、いきなり遼の体にしがみついた。
　遼は、由奈が泣き出すのかと思ったが、そうではなかった。
「ごしゅじんさま……」
　遼の胸に顔を押しつけながら、由奈は言った。
「せっくす、して……」
「おい……」
　あからさまなおねだりに、遼が苦笑いする。
「傷に障るぞ」
「ダメ、なんですか……？」
　いよいよ泣きそうな声を、由奈があげる。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「いや、そんなんじゃないが……今日のところは、おとなしくしとけ」
　しかし、由奈は無言で、むずがる幼い子どものように、遼の胸に押しつけた頭を振るばかりだ。
「しょうがない奴だな……」
　遼は、安心させるように、由奈の頭をぽんぽんと叩いた。

　遼は、由奈の背中に負担をかけないように、向かい合わせの姿勢で座っている。あぐらをかいた遼の脚の上に、由奈がまたがるようにして座る格好だ。
　まだ挿入はしていないが、対面座位の姿勢である。二人とも、一糸もまとっていない。
　遼は、傷のない肩に手を添えて由奈の上半身を支えながら、その体を舌で愛撫していた。
　首筋から、鎖骨のくぼみ、丸い大きな乳房に、舌を這わせ、そして、ぴょこんと上を向いた慎ましやかな桜色の乳首を、口に含む。
「はア……っ」
　由奈は、遼の首を両腕で抱いた格好で、うっとりと溜息を漏らした。
　遼は、円を描くようにして由奈の乳首を口の中で文字通り舐めまわす。そして、充分にとがったその部分を、ちゅぱちゅぱと音を立てて、左右交互に吸いたてた。
　そうしながら、遼は、そっと由奈の股間に手を這わせた。
「んあっ……」
　短く喘ぐ由奈のその部分は、すでに驚くほどの愛液で濡れている。
　体が密着しているため、指の腹ではなく背中の部分で、柔らかなクレヴァスを撫で上げ、親指でくりくりと肉芽を隠したフードをいじくる。
「あ、んはあ、ンあぁ〜ン」
　由奈は、聞いている遼の脳をとろかすような甘い声をあげ、遼の首に回した腕にぎゅっと力を込めた。
　由奈の秘所はさらにとろとろと愛液を分泌し、遼の指を汚した。
「すごい濡れ方だぞ、由奈」
　そっと体を離して、遼は由奈の目の前に、濡れ光る自らの指をかざした。
「は、はずかしい……」
　自分自身の浅ましさの証を見せつけられ、由奈の頬が染まる。遼は、そんな由奈の柔らかい頬に、自らの指をべっとりと濡らす粘液を塗りつけた。
「しゃぶれ」
　そして、人差し指と中指を、由奈の唇にもってくる。
「はい……」
　由奈は、まるでフェラチオでもするかのような顔で、自らの分泌液で汚れた遼の指を口

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

に含んだ。
　ふンふンと嬉しそうに鼻を鳴らしながら、由奈は口の中で舌を使い、遼の指を情熱的に舐めしゃぶる。かと思うと、まるで乳児のような無心な表情で、ちゅうちゅうと指を吸った。
「どうだ、自分のオマ×コの味は」
　遼が、意地悪く訊く。
「ああッ……い、いやらひい、味がひます……」
　口に半ば指を咥えたまま、由奈は答えた。
「お、おねがいひます……いやらひい、由奈のおま×こに……ごひゅじんひゃまのオチンチン、いれてくらさい……」
　そして、遼の指をなおもちろちろと舐めあげながら、そう訴える。
「ああ……」
　遼はそう答えて、両手で、由奈のぷりぷりとした可愛いお尻を抱えあげた。
　そして、すでに堅く上を向いている自分のペニスに、由奈の愛液を塗りつけるように、シャフトの裏側でクレヴァスをこすりあげる。
「イ、イヤ……じらさないで、ください……」
　泣きそうな声で、由奈が言う。遼は、まるでそんな由奈をなだめるように、頬や首筋にキスをした。
　そして、挿入の感覚を少しでも長く味わいたいとでもいうように、ことさらゆっくりと、浅ましく静脈を浮かせた肉茎を、由奈の胎内に侵入させていく。
「あ……ンはァ……由奈、このかっこうが、いちばん好き……あ、あ、あっ……」
　ずりずりと雁首が膣内の粘膜をこすりあげる感触に、由奈は高い声をあげる。
「ス、スゴい……いっぱい……いっぱい、入ってくるゥ……きもちイイ……」
　舌足らずな声でそう訴える由奈の顔は、快感にとろけきっていた。
「んんんッ！」
　ようやく、遼のペニスが根元まで埋まったとき、由奈はぷるぷると体を震わせていた。
「イったのか？　由奈」
　少し驚いたように、遼が訊く。
「ハ、ハイ……」
　由奈は、空ろな瞳のまま、素直に肯いた。
「可愛い顔してたぞ、由奈」
　そんなことを言いながら、遼は、腕に力を込め、由奈の腰を上下させた。
「あ、ンあああッ！　んあァ！」
　絶頂を迎えたばかりで敏感になってる由奈のそこを、堅く反りかえった遼の剛直が容赦なくえぐる。
「あいッ！　ひやン！　ダ、ダメ、ごしゅじんさま……由奈、また、またイっちゃいそう

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ですゥ……！」
「いいぞ、イっても……何度でもイクんだ……」
　荒い息の合間に、遼が由奈の可愛い耳たぶに囁きかける。
「あああッ！　でも、でもッ！」
「イクときの顔、見せてくれ、由奈……」
「そ、そんなの、はずかしい、ですゥ……ふあああアアアん！」
　ずんずんと下から子宮口を突き上げられる、鈍い痛みにも似た衝撃が、そのまま由奈の胎内で深い快感に変わっていく。
「あああッ！　イク、イク、イクっ！　また、由奈だけイっちゃうゥ〜ッ！」
　いつしか、由奈は自ら腰を使い、貪欲に遼のペニスを牝の器官で貪っていた。しかし、由奈自身は、そのことに気付いていないようだ。
「ああああああああアアアアアアアアァーッ！」
　きゅううっ、と由奈の靡粘膜が収縮し、遼のシャフトを締め上げる。遼は、危うく精を漏らしそうになるのを、下腹部に力を込めて辛うじてこらえた。
「ああア……はア……ンはア……あうぅ……」
　ほとんど間をおかずにアクメに追いこまれ、由奈は息も絶え絶えな様子だ。
　そんな由奈の小さな体を、遼はさらに下から責めたてる。
「ンあぁ……ごしゅ、じん、さまァ……」
　その体を上下させられるたびに、壊れた人形のように、かくんかくんと首を振りながら、由奈が切れ切れな声で訴える。
「おね、がい……こんどは、ごしゅじん、さまも……いっしょに……いっしょにィ……」
　遼は、その懇願に答えるように、ひときわ抽送を速めた。
「んうううううううううッ！」
　由奈が、まるですがりつくように、遼の首に回した両腕に力を込める。
「く、くださいッ！　ごしゅじんさまァ！　おねがい、おねがいッ！」
「ゆ……由奈ッ！」
　遼は、そのペニスをめいっぱい由奈の膣内に突き入れた。
　その状態で、根元の部分に溜まりに溜まった熱い白濁液を、一気に解放する。
「ふわあああああああアアアッ！」
　遼の、熱く勢いのある体液を、一番深いところを立て続けに注ぎ込まれ、由奈は視界が真っ白になるほどの快感を覚えた。
　遼のペニスの律動に合わせ、二人の体が痙攣し、そして、そのまま硬直したようにうごかなくなる。
「はあァ……っ」
　長く息をついて、遼は仰向けに上体を倒した。
　一瞬遅れ、由奈も、遼の腰にまたがったまま、うつ伏せになる。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

遼と由奈は、無言で、しばらく呼吸を整えた。

我に返るのが遅れたのは、遼の方だった。
由奈が、遼の体の上でうつ伏せになったまま、ちろちろとピンク色の舌を使っている。遼の胸板を舐め、乳首を、まるで乳児のような無心な表情で、ちゅっ、ちゅっと吸っている。
「おい、由奈……」
遼が声をかけると、由奈は恥ずかしそうな顔で笑って見せた。
「ごしゅじんさま……もっと、ください……」
そして、囁くような声で、そう言う。
「お前なあ……」
苦笑しながらそう言いかけて、遼は言葉を止めた。
大量に精を放ち、力を失った遼のペニスは、しかし、まだ由奈の体内にある。そのペニスを包みこむ粘膜が、微妙にうごめき始めたのである。
「……」
遼は、無言で息をついた、ぞわぞわとした快感に、遼のペニスは、他愛もなくまた力を取り戻していく。
「はァん……ごしゅじんさまの、また、おっきくなってきました……」
自分のアソコの中で、ペニスが容積と硬度を増しつつある感覚に、由奈は嬉しそうな声をあげた。
「欲張りだな、由奈は」
そう言いながら、遼は由奈の頭を、愛しそうに撫でる。
由奈は、頬を染めながら遼の胸に顔をうずめ、そして、そろそろと腰を動かしだした。くいくいと小ぶりなヒップが可愛く踊るのが、由奈の肩越しに、遼にも見える。
遼のそれは、もはや完全に勃起していた。その遼のシャフトに、さきほどまで微妙な蠕動を見せていた由奈の膣内粘膜がからみつく。
遼は、下から由奈の上半身を起こした。
「ああ〜ン」
騎乗位の姿勢をとらされて、さらに深くペニスを体内深くに迎え入れた由奈が鼻にかかった声をあげる。
遼は、そんな由奈の大きな乳房を、下からすくいあげるように手の平に収めた。が、その小さな体に似合わない巨乳は、手の中からこぼれ落ちんほどだ。
「はぁ……ごしゅじんさま、由奈のおっぱい、揉んでください……早く、もみもみしてェ……」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

子どものような声で、由奈がはしたないおねだりをする。
遼は、その柔らかいながらもぷりぷりと張りのある感触を楽しみながら、由奈の胸を揉みしだいた。
そして、固くしこった乳首を指の間に挟み、くりくりと刺激する。
「あひッ！　んあア、ふあア〜ん」
「腰がお留守になってるぞ」
胸から与えられる快感に嬌声をあげる由奈に、遼が言う。
由奈は、自分の乳房を愛撫する遼の手に、自らの手を重ねながら、腰を前後させ始めた。
その幼げな体の中で、胸とアソコとで生じた快美感が共鳴し、さらに大きな快感のうねりになる。
「んはア……ス、スゴい……スゴく、きもちイイ……イイよぉ……ッ！」
由奈は、結局、上体を支えていられなくなり、再び遼の胸の上にうつ伏せになってしまう。大きいながらも形のいい乳房が形を変え、みずみずしい弾力が遼の体に押しつけられる。
「ごしゅじんさま、ごしゅじんさま……ごしゅじんさまァ……」
由奈は、体に力が入らないくせに、腰だけは別の生き物のように動かしてる。由奈の愛液にべっとりと濡れたペニスが忙しげに由奈の体内に出入りし、その度に、雁首の部分が膣壁をこするのだ。
「ふあっ！　んんんああァ……あ、あ、んああ、あうウん！」
由奈は、可愛い喘ぎ声を上げながら何かを求めるように、遼の顔をじっとみつめている。
遼は、左の肘で体を半ば起こし、右腕で由奈の頭を支えた。そして、由奈の唇にキスをする。
身長差があるため、キスをするにはやや辛い態勢になるのだ。
「んぐう、ふン……んんん……んむゥ……」
くぐもった声をあげながら、由奈は顔をねじるようにして、積極的に遼の舌に自分の舌を絡みつかせる。
遼も、その息が荒くなっていた。由奈の腰使いが、着実に遼の性感を高め、ペニスをその限界へと追い詰めているのである。
「はぁっ……」
とうとう遼は唇を離し、ベッドに頭を戻した。前髪が乱れ、大きく切れ長な目をあらわにする。
「ごしゅじんさま、きもちイイですか……？」
明らかに快感を感じている遼の表情を上からのぞきこむようにしながら、由奈が言う。
「ゆ、由奈は、スゴく、きもちイイです……んああ、もう、もう、たまンないですゥ……ッ！」
そう言いながらも、愛液をしぶかせるほどに激しく腰を動かし、遼のペニスを膣口でむ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

さぼる。
「くうぅッ！」
　とうとう、遼は声をもらしてしまった。
「ごしゅじんさま、やっぱり、感じてるんですね……かわいい……」
　いつのまにか主導権を手にしてしまった由奈が、うっとりとした表情で言う。
　しかし、遼はまともには答えられなかった。ペースを乱されたせいか、二度目だというのに、いつもの遼からするとひどくあっけなく、フィニッシュへと追い詰められる。
　だが、絶頂が近いのは由奈も同じだった。
「ごしゅじんさま、ごしゅじんさまア！」
　遼の胸にしがみつくようにしている由奈の声のトーンが、次第に高くなっていく。
「ああァッ！　ミ、ミルク、くださいッ！　ごしゅじんさまの、熱いミルク、由奈の、中に……ッ！」
　まるで、その部分もいっしょになっておねだりしているかのように、内部の粘膜が遼のペニスをきゅんきゅんとしめつける。
「あ……うぁっ……ゆ、由奈……ッ！」
　遼は、我を忘れて、由奈の体をきつく抱き締めた。
「ひあああああああああああああああああああああああああああああああああああアアアアアァーッ！」
　背中の傷の痛みに、しかし、由奈は明らかな歓喜の声をあげていた。
　苦痛と快楽が融合し、さらに高みへと由奈の性感を押し上げる。
「くううッ！」
　とうとう、遼は由奈の子宮めがけ、二度目の精をほとばしらせた。
「あああああッ！　ご、ごしゅじんさま、好き、好きィっ！」
　由奈が、両手両足で、遼の体にしがみつく。
　二人の体が、まるで一つの淫靡な生き物のように、いっしょになってびくびくと痙攣した。
　そして、二人の視界が、全く同じような白い光に覆われる。
「すき……すきです……ごしゅじんさま……だいすき……」
　遼の耳に、そんな言葉が、ぼんやりと届いていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

エピローグ

　二人は、ベッドの上で抱き合ったまま、朝を迎えた。
　由奈が、不思議そうな顔で、朝日の差し込む遼の部屋を見回す。思えば、この館に来てから、朝の光の中で目覚めるなどという体験は初めてだった。
「ん……」
　傍らで、遼が目を開く。
「おはようございます、ご主人様」
　先ほどの由奈と同じような、不思議そうな表情の遼に、由奈が照れたような笑みを向ける。
「ああ……」
　遼の返事は、何とも頼りない。
「……傷は、大丈夫か？　由奈」
　それでも、真っ先に自分の心配をしてくれる遼に、由奈はぎゅっと抱きついた。
「お、おい」
「憶えてますか、ゆうべ、あたしが言ったこと……」
「……」
「好きです。愛してます、ご主人様……」
「由奈……」
　遼は、今まで由奈が聞いたことのないような、何かに困ったような声をあげた。
「俺は、お前の親父を売ったんだぞ……」
「関係ないです、そんなの」
　由奈は、あっさりと言ってのける。
「もともと、お母さんが死んで、初めて現れただけの人だったし」
「それに俺は……俺は、そういう想いに、応えられるような人間じゃないんだ」
「……分かってます、ご主人様」
　由奈の声は、かすかに、震えていた。
「でも……お願いです、由奈を、ずっとご主人様の傍に置いてください……ご主人様だけの、奴隷にしてほしいんです」
「由奈……」
　遼の声には、どこか、諦めの色があった。
　そして遼は、由奈の傷に触れないように注意しながら、そっとその小さな体を、自分の体の上に横たえさせる。
　昨夜の最後と同じように、遼の胸の上に、由奈が全身を預ける形になった。
「由奈……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「なん、ですか……？」
　自分に呼びかける遼に、由奈は、恐る恐るといった感じで、顔を上げた。
「意外と、重いんだな」
　一瞬、きょとんとした由奈だったが、思わぬ遼の言葉に、ぷっと頬を膨らませる。
「ひどいです、ご主人様……由奈が、必死の思いで、告白してるのに」
　そんな由奈の言い方に、遼が、くすくすと笑う。
「でも、やっぱ重いよ……女一人、その身を引き受けるってのは……」
「え？」
　遼の持って回った言い回しに、由奈は目を見開いた。
「お前は、俺の奴隷だ……俺だけの、な」
　そう言いながら、遼は由奈の髪をそっと撫でる。
　由奈は、泣き笑いのような表情を浮かべ、そして、再び遼の胸に顔を伏せた。

「要するに、調教に失敗したんだ。俺は」
　仏頂面でカウンターの上を拭きながら、遼はこぼしていた。
「あと一週間あれば、あいつは、誰の相手をするのも平気になれたはずだった」
　遼のセリフは、どことなく言い訳めいている。
「平気でなかったのは、お前さんも、だろ」
　すでに客が皆帰ってしまった店内で、乾が、薄い唇に笑みを浮かべながら言う。
　乾の言葉が図星なのか、遼は何も答えない。
「……佐久間は、どうなったんだ？」
　無理に話題を変えるように、遼は訊いた。
「サツにお縄になった」
　そう、乾が答える。
「西の方でも、佐久間のことは切り捨てたらしい。あまり好かれてなかったんだな、あっちでも」
「そいつは気の毒に」
　遼は、実感のこもらない声で言う。
　そして、片付けを終えた遼は、懐から一通の書類を取り出した。
「誓約書、サインしておいたぜ」
「ああ」
　遼の差し出す書類を、乾が受け取る。
　これまでの件を、遼が乾に秘密にしていたその代償が、この誓約書だった。
「これで、お前さんは、うちの組織の専属だ。俺を通さない依頼は受けず、そして報酬の

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

３割は組織に収める。いいな？」
「……そんな紙切れ一枚で、俺を信用すんのか？」
「お前さんの人格を信用しようとは思わんよ」
　中身を確認しようともせず、乾は誓約書を無造作にポケットに突っ込んだ。もともとこの書類に、法的な効力など期待できない。
「ただ、お前さんは、俺に借りを作ったままにしとくような奴じゃない」
　それも図星だったのか、遼は、何も言わない。
　そんな遼に軽く笑いかけ、乾は店を後にした。
　薄暗い店の中、遼一人が残される。
　遼は、周囲に人がいないのを幸い、大きく溜息をついた。

　そして、数ヶ月が経った。
　夕刻、あれほど暑かった大気の中に、涼しい風が混じり始めている。
　もう、秋だ。
　遼は、乾が指定した駐車場へと歩いていた。そこに、替えの車があるはずだ。すでにキーは受け取っている。
　まともな手段で自動車を手に入れられない遼は、こうやって、乾がどこからか回してきた車を定期的に受け取るという契約を結んでいた。今まで乗っていた車は、別の裏稼業の人間の手に渡るだろう。
（あのビートルは、由奈が気に入ってたのにな……）
　そんなことを考え、そして、考えた自分自身に、遼は苦笑してしまっていた。
（丸くなっちまったのかな、俺は……）
　しかし、それが不快ではない。
　ただ、由奈に対する想いは、そう単純なものではなかった。自分自身でも、整理しきれていないのが本当のところである。
　それに、自分といる限り、由奈は間違いなく、裏の世界に深く関わっていってしまう。
　そんな気持ちを抱えながら、遼は、人気のない港近くの工場跡に来ていた。旧型の、塗装のすすけたジャガーが、舗装されていない駐車スペースにうずくまっている。
「今回は掘り出しもんだな」
　思わずそう呟いて、遼は車に近付いていく。
　と、いきなり、視界の端に人が現れた。
　何か重そうな棒状のものを持った、汚い格好の中年の男……それが、何かわめきながら、自分に向かって駆け寄ってくる。
　避ける間もなく、鈍く、硬い衝撃が、遼の額を打ち据えた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

一瞬で、視界が赤く染まる。
（槙本……！）
それが、由奈の父親であることを思い出した次の瞬間には、遼の意識は、深い深い闇の中に沈んでいった。

終

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw